
魔法先生ネギま！ ～落ちこぼれと呼ばれた英雄の子～

夜半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～落ちこぼれと呼ばれた英雄の子～

【Nコード】

N0328Q

【作者名】

夜半

【あらすじ】

かつて魔法世界を二分した大分裂戦争を終結へと導いた英雄ナギ・スプリングフィールド。彼には双子の息子がいた。兄はその魔力、才能から天才と呼ばれた。片や弟は親をしのぐ魔力を有していたが、一部しか魔法が使えなかった。その少年の名はリアン・スプリングフィールド。少年は『落ちこぼれ』と呼ばれていた・・・。

この作品はネギの双子の弟が主人公の二次創作です。なお、更新は不定期になります。

プロローグ

イギリスはウェールズにあるメルディアナ魔法学校。この学校の大ホールに於いて、恒例の卒業式が執り行われていた。ホールが一番奥には学園長と思しき人物がいて、その正面に7人の子供が横一列に並んで、卒業証書を今か今かと待ちわびていた。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ネギ・スプリングフィールド！」

「ハイ！」

薄暗いホールの中を一人の少年が緊張した様子でゆっくりと進んでいく。彼こそ大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの長子である。首席ということで卒業生を代表して証書を受け取る。その瞳は、これからの未来を想像し輝いていた。

SIDE リアン

今、壇上で卒業生代表の挨拶をしているのは英雄の息子、皆が期待を寄せる首席卒業のネギ・スプリングフィールド。私の双子の兄です。期待に目を輝かせ、緊張しつつも堂々とあいさつをする姿には

周囲の教師や来賓の方達も期待の目で見ています。

単純な学力のみでしたらあそこにいるのは私です。座学の成績は、私は兄にも負けません。それなのになぜ兄が首席かというところ、私が魔法を使えないからでしょう。いえ、少し語弊がありますね。私は身体能力の強化など精霊の力を借りない魔法しか使えません。これらの魔法は儀式魔法と呼ばれるものです。

これとは別の精霊にその力を借りる魔法が使えないんです。何故か分かりませんが、私には全ての精霊の加護がないんです。

故に精霊の加護が必要となる攻撃魔法といった部類が全く使用できません。対する兄は全ての分野の魔法にその才能を見せています。頭は良いが一部しか魔法の使えない弟と頭も良く魔法の才能も豊かな兄。比べれば当然、兄に期待がいくに決まっています。そしてその兄と比べられ、私は『英雄になれない落ちこぼれ』と呼ばれているようです。私は全く気にしていません。期待されすぎるとろくなことはありません。

パチパチパチパチ・・・・・・・・

どうやら兄のあいさつが終わったようです。一瞬兄と目が合いましたがすぐにそらされました。兄は一部しか魔法の使えない私に学力が負けているのがプライドに障るらしく、私と兄の関係は良好とはいえません。大きな原因として私が両親をどうでもいいと思っているのがあるみたいです。

「以上で、メルディアナ魔法学校卒業式を終了する！」

学園長の言葉で卒業式は終了した。さて、証書をもって帰りますか。ここにいるのは疲れますし・・・。

主人公設定

名前 リアン・スプリングフィールド

身長 ネギと同じ

性格 冷静 現実主義 合理主義

ナギとアリカの息子。容姿は、ネギがナギに似ているのに対し、リアンはアリカに似ている。金の髪を腰ぐらいまで伸ばしている。顔は10人中10人が振り向くイケメン。

話し方は私口調で丁寧な言葉使いをする。魔力はネギの数倍あり、ナギよりも多いが、何故か精霊の加護が全くなく一部の魔法（身体強化や封印、結界など）しか使えない。もちろん初歩の魔法の射手すら使えない。しかし、直接魔力を武器とする方法を独自に編み出しており、かなりの戦闘能力を誇る。

頭はネギよりもいいが、その魔法が使えないが故にネギと比べられて『英雄になれない落ちこぼれ』と言われている。だが本人は気にしていない。『偉大な魔法使い』には全く憧れておらず、夢は故郷の人々の石化の呪いを解呪することである。自分を利用されることを特に嫌っている。

なお、ネギとは疎遠になっている。

第一話 修業先は日本

SIDE リアン

「ただいま・・・」

誰もいない家に私の声がむなしく響く。卒業式を終えた私は誰とも話すことなく自宅に戻ってきました。私はメルディアナ魔法学校からさほど離れていない山の中に一人で住んでいます。あの兄と一緒に生活するなどあり得ません。一応ネカネ姉さんという保護者みたいな人はいますが、彼女はネギと一緒に住んでいます。

寂しくはないのか？はい。別に寂しくありません。むしろこの環境はありがたいです。石化の研究もしやすいですし、なにより修行もしやすいです。

攻撃魔法の類が一切使えない私は、それを理解したときから自分の身体能力を限界まで鍛えることにしました。同時に身体強化の魔法の精度を上げるように修行も始めました。

攻撃魔法が使えない私の武器は己の肉体です。己の身体を武器とするしかない以上、その武器を徹底して鍛え上げればいいだけです。それと同時に私の莫大な魔力をどうにか攻撃に使えないかも研究しました。

その成果として魔力に形を持たせることが可能になりました。簡単にいえば魔力を具現化し、それを剣の形に圧縮し固定する。これにより魔力の剣が創造できます。幸い私は魔力のコントロールに長けていたようです。これが出来てからは一足飛びでした。独学で浮遊

術や瞬動術も会得しました。
うぬばれというわけではありませんが、並の魔法使いでは私の相手にはならないと思います。

話が長くなりました。さて、時間的にも夕食の時間なのでその準備を始めましょうか。

「確か、まだ昨日の残りがあつたと思うんだけど・・・」

冷蔵庫の中を見ている時でした、家のドアを誰かがノックしていました。来客のようです。

物好きな人もいるものです。こんな私のところに来るなんて・・・。

「はい。どちらさまでしょうか？」

ドアを開けたそこにいたのは・・・

「やっぱりここにおったか・・・」

校長でした。先ほどまでの威厳溢れる姿とは違い、包み込むような

オーラを携えた校長でした。一応、家の中に招き入れます。

「卒業式が終わるなりすぐに帰りおって、おかげでネカネが随分と捜しておったわ」

「あれ以上、あの場にいる必要がありませんので、帰りました。特に問題はないと思いますが、・・・それで用件は何でしょうか？」

「そう、邪険にするでない。それで、修業先はどこになった？」

「そういえばそうでした。卒業証書に今後の修業先が出てくるんです。どうでもいいですがね。」

「え・・・っと、『日本で教師をすること』ですね。・・・なんの冗談でしょうか・・・」

卒業証書に浮かびあがったそれに疑問を通り過ぎて呆れてしましました。数えて10歳の私に教師なんかできるはずがないでしょう。そもそも教員免許を持ってないですし。

「ホッホッホ。ネギと同じ内容か・・・」

そう笑う校長に怒りを感じます。それを聞いて大体読めました。

「英雄の息子は一力所に集めた方が都合が良いということですか。
・・・腹が立ちますね」

「そう深く考えずともよい。卒業証書にそう出た以上それは決定じや。それにお主達が行くであろう場所の学園長は儂の友人じゃから安心せい。それにこの修行を機に兄と仲良くしてみてはどうじゃ？」

「無理ですね。そうしろといわれても拒否します。アレは私とは相容れません」

そう。私と兄では根本的な考え方が違う。ましてや、6年前のあの雪の日から目を背け続けている兄なんか、顔も見たくないのが本音ですし。一応公私は分けますけどね。

「・・・まあ必要ならそれ相応の対応はしますが必要以上の関係を築くつもりはありません」

「そうか・・・」

ひどく残念そうな表情を校長はしていますが気にする必要はありません。現実を見ず虚像を追うだけなら馬鹿でも出来る。しかもそうすることで周りからもてはやされるなら、最早それは罪。

私はたとえ愚者と罵られようと現実を見て行動する。これは私の
誓いでもあり、あの雪の日を戒めとする決意でもある。

第二話 麻帆良学園都市

SIDE リアン

時が経つのは早いもので、私の日本への出発の日がやってきました。私は兄よりも早く日本へ向かいます。修行開始の日は約一月半後です。このような日程を組んだのにはちゃんと訳があります。

見ず知らずの土地に行つてすぐに教師をしると言われても出来ないので、早めに行つて、現地の環境や自分が教師をすることになる学校を見ておきたいと考えたからです。この旨を校長に言つたところ先方と話をしてくれてOKが出ました。故に今日この日にイギリスを出発します。ちなみに出発の日程は誰にも言っていない。一応校長は把握しているでしょうが・・・。

なので見送りのいりません。いつものことです。一人は慣れています。

「さて、そろそろ時間か」

腕時計を確認して、飛行機の搭乗時刻を確認して私はそこへ向かいます。

「リアン――!!」

大きな声で私の名を呼びながら走って来たのはネカネ・スプリングフィールド。私の姉でした。姉さんは私の前まで息を切らして走って来ました。

「どうして 今日出発するって連絡をくれないの？」

若干声に怒りの色が混じっていますね。・・・当然といえば当然ですが。

「姉さんは、兄さんの子守で忙しいでしょう？私は自分の事ぐらい一人で出来ます。今までも・・・そしてこれからも」

「そんなこと言わないで。一人じゃ寂しいでしょう？」

「寂しいなら今まで一人でやってきてません。それに一人だからこそできることもあります」

これは事実。ですが・・・

「姉さんには感謝しています」

あの雪の日まで私の面倒を見てくれたのは誰でもなくネカネ姉さん。その恩を忘れるほど私は馬鹿ではありません。その後も何かと気にかけてくれました。しかしそれに甘え続ける訳にはいかない。だから

「私は一人で進みます。」

「私は一人でやっていきます。いや、やって行かなくてはなりません。むしろ姉さんは兄さんについてやってください。あれは未だにあの日から目を背け続けています」

「やっぱり、ネギとは仲良くできない・・・？」

「それは無理ですね。いくら姉さんのお願いでもそれは聞けません。むしろ一方的に向こうが拒絶している状態ですし。なぜ偉大な父親を捜さないのかってね。そんな余裕があれば村の人を治す方法を探せばいいのにね。禁書庫に入り浸るよりもね」

互いに折り合うことのない会話は飛行機の出発アナウンスによって終わりを告げる。

「・・・時間が来たからもう行くよ」

「リ、リアンっ！」

「なんですか？」

「・・・元気でね」

その声は消え入りそうな声でした。本当はもっと話したいことがあったんでしょう。ですが時間は待つてはくれません。

「・・・うん。姉さんも元気でね」

だから今は出来うる最高の笑顔で返しましょう。こんなことをするのはいつ以来でしょうか。まあ、たまには良いでしょう。私は姉さんに見送られて飛行機へと乗り込みました。

SIDE 三人称

リアンが向かう麻帆良学園。これは明治中期に創設され幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた都市。これらの学術機関を総称して『麻帆良学園』と呼ぶ。

一帯には各学校が複数ずつ存在し、下記都市機能を含め、同じ敷地内に大学の研究機関も同じ敷地内にあるため、その敷地面積はとても広い。また多くの生徒が在籍していることもあり、毎朝の通学ラッシュは鉄道・道路ともに大混雑を極め、多くの生徒が走って登校している風景は名物となっている。

そんな学園都市の中にある一つの学校。麻帆良学園都市の最奥、女子校エリアにある学校『麻帆良学園女子中等部』。その学園長室に

一人の老人と、一人の成人男性がいた。

「明日にはリアン君がここに到着するそうじゃ」

「そうですか。・・・懐かしいですね。彼と会うのは何年ぶりだったかな・・・」

老人は近衛近右衛門。ここ麻帆良学園都市の学園長にして、学園都市を本拠地とする魔法使いの団体、関東魔法協会の理事長も兼ねている。片方の成人男性は高畑・T・タカミチ。リアンの父親、ナギ・スプリングフィールドとも行動を共にしていた人物である。

「メルディアナの校長からの資料じゃと、学力はネギ君よりも良いみたいじゃの。ただやはり魔法は使えない・・・か」

「それに、他者との関わりを極端に避けているみたいですね」

「兄のネギ君とも同様みたいじゃの。原因はあの襲撃事件らしいの。まあ2人でクラス運営に携わればそれも解消できると思うが・・・」

実に見当違いな会話を続ける二人。リアンの目的、目標についてはメルディアナからの送られた資料には記載されていない。当然である。リアンが石化の呪いについて研究していることは誰も知らない。実際二人の手元の資料にも書かれているのは、学校での成績、性格や、学校近くの山に一人で生活しているといった事だけである。そしてリアンがただ修行の為だけでなく、ある目的をもって来日する

ことを知らない。

これが後に波乱をもたらすことはまだ誰も知らない・・・。

第三話 到着！麻帆良学園

SIDE 木乃香

こんにちは。ウチの名前は近衛木乃香や。ここ麻帆良学園にある女子中学校に通う中学二年生や。今日は土曜日で学校はお休みや。天気もええし、どっか遊びにいこうかなと思てたんやけど、なんやおじいちゃんから新しく麻帆良に来る人の出迎えに行ってくれへんか。って言われて、今は駅に向かつてる最中や。

「もう、せつかくの休みの日なのになんで学園長先生のお客さんの迎えに行かなきゃならないのよー!!」

「ええやんか、明日菜。どうせ明日菜は寝るしかすることないんやし」

「う、うるさいわよ!？」

そしてウチの隣を歩いているのが神楽坂明日菜。ウチは明日菜言うてるよ。明日菜とは同じクラスで、寮も同じ部屋や。せつかくやから明日菜も連れ出したんや。うん。ウチええ事した。こういうええ事したときはなんかええことありそうや!

SIDE リオン

「さて、そろそろ降りる準備をしなきゃ・・・」

ロンドンから飛行機に乗って日本へと降り立ち、そこから電車乗り継いできました。そしてそれももうすぐ終わります。正直疲れしました。まさか移動にこれだけ疲れるとは思いませんでした。しかし実に楽しいものでした。

今までの私の世界は森の中の自分の家と修行をしていた森と魔法学校しかありませんでした。本当はもっと多くが私の目に映っていたのでしょうか、それを見る余裕がありませんでした。

しかし、一步その世界から飛び出すと世界は思った以上に色鮮やかで目が奪われました。これまで私は小さな世界で生きていたのだと実感しました。

『次は、麻帆良、麻帆良。お忘れ物にご注意ください』

勉強した日本語もしっかり使えますから、とりあえずは大丈夫でしょう。

「よつと・・・」

持ってきた荷物を全て手に持って。電車の降車口へと向かいます。確か駅に着いたら、駅出口の銅像で待っていれば良かったんですね。そこからは麻帆良学園の迎えの人が来てくれるのでしたね。

『「乗車ありがとうございました」』

空気が混じったような機械音と共に電車のドアが開きました。さて、これが私の夢への一步目です。・・・待つててください皆さん。私は必ず皆さんの呪いを解いてみせます。例え、その道が茨の道でも私は迷いません。

電車を降り、駅を出た私は待ち合わせの場所の銅像の元で迎えの人を待ちます。今日は土曜日で学校も休みということもあり、私服姿の学生と思われる生徒達が思い思いに過ごしています。ただ、その生徒達がみんな女子生徒というのは何故でしょうか？

ただでさえ私は今目立つ格好をしているのに、これでは尚目立ってしまいます。まあ、迎えの人は捜しやすいでしょうけど・・・。

「あの・・・」

到着して五分ぐらいした頃でしょうか、私の背後から声をかけてきた人がいました。十中八九迎えの人でしょう。そしてふり向いたそこには、二人の少女、といっても私より当然年上ですが・・・。まあ、二人の女子生徒がいました。

「もしかして、迎えの方ですか？」

「そういう『お嬢ちゃん』はリアンちゃんであんなのかな？」

お、お嬢ちゃん！？・・・確かに私はそう見えない事ありません。しかし初対面の人にこう言われるとさすがに・・・。

「はい、私の名前はリアン・スプリングフィールドです。それと申し上げにくいのですが私は男です」

「そっかそっか……ってええええええ！」

「うそ……。これで男の子なんて反則よ……」

これはシヨックですね……。今度髪を切りましょうか……。

SIDE
木乃香

ウチと明日菜が駅に到着したときには待ち合わせ場所の銅像には一人の女の子が待っていました。

「なっ！？お客さんって子供じゃない・・・」

「えらい、かわいらしい子やな」

そういえば明日菜は子供、本人曰くガキンチョが嫌いゆうてたな。まあそれはおいといて、まずは声をかけんとな！

「あゝ・・・」

さすがに女の子とはいえ初対面の子に話かけるんは緊張するな。ウチの呼びかけに気付いたのか女の子はウチらの方に振り向いてくれた。

ほわあゝ。遠くから見ても綺麗やったけど、近くから見たらもっと綺麗やなあ。外人さんみたいやけどお人形さんみたいや。

「もしかして迎えの方ですか？」

どうやら間違いないみたいや。やけど思ってたより声がなんか低くないかな？まあええわ。こっちも確認せんとな。

「そういう『お嬢ちゃん』はリアンちゃんてええのかな？」

なんやウチ変なこと言ったかな・・・？

「はい、私の名前はリアン・スプリングフィールドです。それと申し上げにくいのですが私は男です」

うん。間違いなかった。リアン。スプリングフィールドっていうんや。それにこの女の子は実は男の子やって・・・

「そつかそつか・・・って、ええええええ！？」

「うそ・・・。これで男の子なんて反則よ・・・」

思わず大声をあげてしまった。せやけどこれで男の子は反則や。明日菜も同じ事思ってたようやし。でもそう言われると確かに女の子にも見えへんことはないけど、男の子いうた方がしっくりくるな・・・。

「あの・・・。失礼ですがお名前はなんと？」

しもた！ウチらまだ自己紹介してへんわ。

「ウチは近衛木乃香や」

「私は神楽坂明日菜よ」

「近衛さんに神楽坂さんですね。わざわざありがとうございます」

そう言ってリアン君はお辞儀をした。しっかりしとる子やな。両親がこういったことに厳しんやるか？

「ええって。ウチらも今日は暇やったし。それよりゴメンな。女の子かと思つて・・・」

まずは謝らんとあかん。いくら子供でも男の子を女の子に間違うのは失礼やし。

「いえ、気にする必要はないですよ」

うーん。こういったところもしっかりしとるな。ウチらよりしっかりしとるんちゃうかな？とりあえずおじいちゃんのところに行きながら話をしたらええか。

「ほな行こか。話は歩きながらでもできるしな」

SIDE リアン

最初に女の子に間違えられるというハプニングはあったものの今は近衛さんと神楽坂さんと三人で学園長室へと向かっている。話によると近衛さんは学園長のお孫さんのようだ。実の孫を使いパシリにするのとはどうかと思うがいい人で良かった。ここに高畑さんが来るよりかは遙かに良い。あの人は嫌いだ。

「なあなあリアン君」

ちよつと物思いに耽っていたようです。近衛さんが呼んでいるのに気付きませんでした。

「何でしょうか、近衛さん」

「その近衛さんってなんとかならへんかな？もっところ、フランクに呼んでくれへん？」

「ですが………」

「わたしもその方がいいな。なんか年下の子にそんな風に話されるとなんか肩が凝りそう」

神楽坂さんも近衛さんと同意見ですか。日本では初対面でファーストネームを呼ぶのは失礼になるということでしたが、当地人がそれでいいというならそうしたほうが良いかもしれませんね……。しかしこんな風に他人と話するのは何年ぶりでしょう。魔法のことを知らない一般人だからかもしれませんね。

「では、木乃香さんと明日菜さん。これでいいですか」

「ええで」

「いいわよ」

「じゃあちよつとりアン君に聞きたいんやけど、リアン君は何しに麻帆良に来たの？」

「いろいろありますが、一言で言うなら強制というか押しつけというか。ちよつとうまく言い表せませんね。確かなのはここ、麻帆良学園で教師をするということぐらいですかね」

魔法とは言えないのではぐらかしました。それと教師をするというのは非常識ではありますが事実なので話しても差し支えないでしょう。

「「ええええっ!?!」」

当然、このようなリアクションが来るのは想定済みです。

「リアン君先生なの!？」

「なんでこんな子供が教師なんて出来るのよ!？」

「だから強制というか押しつけと表現しました。故郷の大人達に勝手に決められました。ちなみに来月の中頃から本格的に始まります」

「その大人達は何考えてんのよ・・・」

「リアン君も大変やな・・・。ん?せやけどそれならなんでこんなに早く来たんや?」

「それはいきなり故郷から飛び出して見知らぬ土地で教師をやれと言われても出来るはずがありません。ならすこし早めに麻帆良に来て、麻帆良の雰囲気とかに慣れといたほうが後で楽かと思ひまして」

「ほえゝ。リアン君すっかりしとるな」

「ほんとよね・・・。ガキンチョがみんなリアンみたいだったらいいのに」

とりあえずは納得?してくれたようです。

「ところで、学園長室に向かつてるんですね?」

「そやで」

「それとさっきから女子生徒さんしかいないのは何故ですか？」

「ああ、それはここら一帯は麻帆良の最奥部の女子校エリアなの。だから男子生徒はいないのよ」

なるほど、だからですか。なら、さっきからの好奇の視線も理解できます。珍しいんでしょうね私が。その後も私の故郷の話などをつつ目的地へと三人で歩いて向かった。

「着いたで〜。ここが学園長室や」

目的地に到着しました。とりあえず服装を整えます。そして木乃香さんが先頭でそれに続く形で私と明日菜さんが部屋に入ります。

「おじいちゃん。リアン君をつれてきたえ」

「そうか。ご苦労じゃった。助かったわい」

木乃香さんが声をかけたのは・・・妖怪？まさかここの学園長は妖怪だったのか……。いやそうになると木乃香さんもそうになってしま
うのか。いや木乃香さんは紛れもない人間だ。ということはアレは
人間か。……………にわかに信じがたいが……………。

「ふむ。リアン君じゃな。儂はここの学園長をしておる近衛近右衛
門じゃ」

「リアン・スプリングフィールドです。この度は私の無理な願いを
聞いていただきありがとうございます」

「この程度は無理でもなんでもない。むしろその心がけは実による
しい」

思ったよりも好印象ですが、恐らくこれは本性ではない。この手の
人間は知らぬ間に利用されるから気をつけないといけませんね。そ
してその横にいるのは……………

「久しぶりだね。リアン君」

「ええ。高畑さんもお変わりないようで……………」

高畑・T・タカミチ。私が会いたくない人間の一人だ。こいつは私
を見ていない。何かと気にかけていたが、その目は私を通して誰か
を見ているようだった。おそらく私の父親を見ているのだろう。も

しくは母親か。いずれにせよ私はこいつが嫌いだ。

「では早速じゃが、リアン君には月曜日からこの高畑君が担任を持つ2・Aに混じってもらうことになる。そしてそのあと時期が来ればまずは教育実習生として勉強してもらい、しかるべき時に正式な教員となってもらつつもりじゃ」

「はい。わかりました」

「そのことやけどおじいちゃん。リアン君は無理矢理教師をやらされるってホントなん？」

ここで黙っていた木乃香さんが口を挟みます。この言葉に学園長と高畑さんは僅かばかり驚いたようです。

「ここまで来る途中でリアン君に聞いたんやけど、さすがにそれは無理なんとちゃうんかな？」

「大丈夫じゃ。こう見えても彼は教員免許も持つておるし、学力は大学卒業程度の学力はある」

「初耳ですね。教員免許を取ったつもりはないんですが？」

ここで少し試してみしよう。学力については異を唱えるつもりはありませんが、教員免許についてはどう考えても無理があります。この言葉に対して学園長という人間を観察しましょうか。

「フオツ！？そうか、リアン君の元にはまだ届いておらなんだか。大丈夫じゃ、ちゃんと向こうの学校から届いておるから安心せい。あとで渡しておこう」

顔色一つ変えませんね。思った以上に喰えないじじいようです。これは油断なりませんね。知らぬ間にいろいろと巻き込まれそうですね。

「わかりました。それで私の住む部屋はどこですか？」

「うむ・・・。それなんじゃが、実は部屋が決まっておらんのだよ。じゃから木乃香に明日菜ちゃんや。二人の部屋にリアン君を泊めてやってくれんかの？」

「話がおかしいですね。私は一月前に連絡しました。その時の話では『部屋はこちらで用意しておくから』と聞きましたか？」

「うむ。そう伝えたのじゃが空き部屋が見つからなくての・・・」

「それもおかしいですね。私がここに来るにあたってこちらの空き物件やアパート、マンションを調べたところとも一月で満室になるほどの空き数ではありませんでしたか？」

これは事実です。実際、私は麻帆良に来るにあたって、まず自宅の確保に乗り出しました。そして良い部屋が見つかって、いざその管

理会社に連絡しようと思ったところこの話を向こうの学園長から聞きました。だからこそ任せていたのです。それなのに部屋が見つかってません。しかもその代わりに初対面の人の部屋に泊めてもらいなさいとは、実に滑稽です。何かしらの意図があることが見え見えます。段々、腹が立ってきました。

「しかし、部屋があつたとしても今から契約したのでは二、三日は飯の宿を探す必要がありますね。ここはホテルにでも泊まりますので、私のことは気にしないでください」

「た、確かにリアンの言うとおりだけど、あんた一人で生活できるの？」

「ええ。問題ありません。故郷では一人で山の中の一軒家で生活してましたから」

「あかんでリアン君。悪いのはおじいちゃんやけど、リアン君がそこまでする必要は無いって。ウチは気にせえへんからウチらの部屋において。明日菜もええやろ？」

「ガキンチョは嫌いだけど、リアンはしっかりしてるし…….
いいわよ」

「ほら、明日菜もええって。ほな決まりやな」

「ちょ、ちょっと……」

私を置いて話を進めないでください。これは私の問題です。木乃香

さんや明日菜さんは巻き込まれる必要は無いんです。
「……………もしかして、この展開を狙ってたのか？そう思って、
学園長の方を見ると満足そうな顔をしていました。」

「……………お二人がそう仰るならそうさせてもらいます」

ここは素直になったと思わせておきましょう。ここで手の内を晒すのはもったいないですし。まあ研究については場所を選ぶ必要はありませんしね。

「ほな、行こうか。ウチらの部屋まで案内するえ」

あのじじいも気に入ってませんね……。あれがここのトップなら部下も似たようなものでしょう。第一高畑さんが、右腕のような立場にいるのがその証拠ですしね。

この後、私は木乃香さんと明日菜さんの部屋へと案内されました。

SIDE 三人称

「やっぱり子供じゃの。根は素直な子みたいじゃ」

「そうですね。まだ10歳の子供ですから」

リアンが去った学園長室では二人がこう話していた。彼らにはリアンの本質が見えていない。自分達に向けられる視線に侮蔑の感情がこめられていたことに気づいてない。むしろここは見せなかった、気づかせなかったリアンを褒めるべきだろうか……

第四話 買い物。それは戦争である

SIDE リアン

「・・・ん・・・朝か・・・」

私の朝は結構早いです。向こうでの習慣というのもありますが大体朝の四時半ぐらいには目が覚めます。この後は日課のランニングに行つて、シャワーを浴びて朝食をとります。これが私の朝です。では着替えてランニングに行きましょうか。

「・・・これはどういう状況でしょうか」

とりあえず起きようと思ったのですが何故か私は木乃香さんに抱きつかれています。ええ、いわゆる抱き枕というやつです。

「そつえばそうでしたね・・・」

昨日のやりとりを思い出してこの状況に納得しました。これはなるべくしてなった感じですね。

「ここがこれからリアン君が生活する部屋やで」

というわけで学園長室を後にした私は木乃香さんと明日菜さんに連れられてここに来ました。木乃香さんが部屋の鍵を開けて入ってきます。明日菜さんもそれに続きます。私も立ち止まっているわけにはいかなかったので部屋にお邪魔します。

「お邪魔します」

「そんな他人行儀にならなくてもええで。ここは今日からリアン君の家でもあるんやから」

そう言われても、はいそうですかと言えるほど常識知らずではありません。ましてや女性の部屋に入るなんて生まれて初めてですし。何より無理矢理泊めてもらっ形になってしまったので。

「あっちにお風呂とかあるから。」

それでトイレはこっちや」

部屋に入った私に木乃香さんは丁寧に説明してくれます。部屋自体は広く、二人で生活する分にはむしろ広すぎるぐらいでしょうか。これなら私がここに来て物理的には問題ありませんね。あくまで物理的には。

「とりあえずこんなところやな」

「終わった？リアンの荷物はロフトに上げておいたから」

「ありがとうございます。でも本当に良かったんですか？私なんかを部屋に泊めても」

「そんなん気にせんでええって」

「そうよ。子供は甘えられるうちは甘えておきなさい」

甘えるですか……。そのようなことはとっくにあきらめました。甘えていては私が行こうとする道は進めません。

「……分かりました。ではこれからよろしくお願いします」

とりあえず部屋が見つかるまでは厚意を受け入れますか。

「よし！ちょうどいい時間やし、ご飯にしようか。今日は歓迎の意味も込めて腕によりをかけて作ったるからな。そやリアン君食べたいものとかある？」

「いえ。好き嫌いはありませんので何でも良いです」

「うん……。せやったらどないしよかな……」

「だったら日本独特の料理でいいんじゃないの？」

「それもちよ！よし、メニューは決まったからすぐに作るわ。リアン君は荷ほどきでもしながら待っててや」

そう言つて木乃香さんはキッチンへと行ってしまいました。ここは手伝うべきなのでしょうがああ霧囲気だと野暮ですね。素直に待ちますか。

……結論から言うとおいしかったです。確かてんぷら？とかいう料理でしたか。初めての食感でした。また他人の手料理を食べるのも久々でした。……こういったのもたまには良いですね。

さてお風呂も終わらせましたし、（木乃香さんに大浴場に行こうと言われましたが断固拒否しました）あとはもう寝るだけです。こう思ってたんですがここで問題が起きました。そうです。私の分の布団が無いのです。もともと二人の部屋に突然お邪魔する形になったので当然です。

「じゃあ、私は今日はソファで寝ますね」

とりあえず毛布を一枚拝借して今日はここで寝ることにします。明日はまず布団を買いに行きましようか。

「あかんで。リアン君そないなとこで寝たら風邪ひいてまうで。今日はウチの布団で寝たらええ」

「じゃあ、木乃香さんはどこで寝るんですか？」

「そんなん決まっとるえ。ウチはウチの布団で寝るで」

「は？」

「やから、今日は一緒に寝たらええやんか」

いや、さすがにそれは拙いでしょう。多分私が子供だからそう思った考えになったと思いますが、子供である以前に私は男です。いくらなんでも初対面の異性と一緒の布団で寝るのはさすがに……。

「ほら、早よおいで」

……っと!? 有無を言わずに私は木乃香さんに引つ張り込まれ

ました。ひどく強引な方です。

「じゃあ私も寝るわね。おやすみ」

「おやすみ」

私が木乃香さんに引つ張り込まれるのを確認した明日菜さんは上のベッドに上がっていきます。・・・先ほどから何とか布団から出ようと試しているのですが、私の左腕をがっちりホールドした木乃香さんに完璧に押さえ込まれています。

「・・・・・・・・・・はあ」

これは無理ですね。とりあえず今日一日の我慢です。ええ、明日は必ず布団を買いましょう。隣では木乃香さんがうとうととしています。しかし、こうして誰かと寝るのも久しぶりですね。あの頃はネカネ姉さんに私と兄がひつつくようにして寝てましたからね。

さて、私も寝ますか・・・・。長距離の移動で思いの外疲れもたまっていますし・・・・・・・・・・明日は・・・・・・・・・・買・・・・・・・・・・い・・・・・・・・・・物に・・・・・・・・・・。。

「・・・こんな感じでしたね」

木乃香さんを起こさないように慎重に絡んでいる腕を解いてベッドから出ます。そして時間を確認すると午前4時45分。時差ボケがあるかと思っていました。がそうでもありませんでした。軽く背伸びをして、洗面所で顔を洗い目を覚まします。そしてロフトに上げてもらった荷物の中からトレーニングウェア一式を取りだしそれに着替えます。うっすらと明るいのでどうやら、そろそろ日の出のようです。

静かに部屋を出て寮から学園都市へとランニングをします。まだこの地理には疎いので今日は遠出をするつもりはありません。

「ひんやりとした空気が気持ちいいな・・・」

走る私を包むような朝の冷たい空気が心地いいです。故郷の森とはまたひと味違った感じがして新鮮です。それにしてもここ、麻帆良の街並みは日本のそれとは違い、異国情緒が溢れていますね。ヨーロッパのそれに近いですね。良くも悪くも期待を裏切られた感じがします。

程良く体が温まってきたので少しスピードを上げます。それと同時に魔力運用の修行も開始します。地を蹴る瞬間に魔力を足に集中します。そして蹴って地を離れた瞬間にソレを止めて、今度は反対の足に同じ事を行います。これをひたすら反復します。

常に足に魔力を流すのも良いんですが、それだと無駄な魔力が生じ

ます。走る際に必要なのは地を蹴る瞬間に足の筋力を魔法で強化する事です。強化はほんの一瞬行えば魔力の消費はごくわずかで済みます。

これによって、スムーズな魔力供給と発動。これを養うことが出来ます。このおかげで今では呼吸をするのと同じように任意の箇所に任意のレベルの身体強化を行えるようになりました。

これを行いながら時間にして約一時間半は走ったところで部屋に戻ります。

部屋に戻って水分補給をして、シャワーを浴びたら、時間は午前6時30分でした。

「朝食を作りますかね・・・」

ここで気付いたのですが明日菜さんがいません。私が部屋を出るときは確かに寝ていたのですが、今は布団はもぬけの殻です。靴も無いところを見ると外に出ているようです。私と同じランニングでしょうか？

まあ、それはおいといて、朝食作りをしましょう。お二人の生活リズムを把握していないので朝食の時間が分かりませんが、とりあえず付け合わせのサラダとかから作っていきましょう。まずは冷蔵庫の中身を確認して・・・。

「・・・なんや、ええ匂いがしよる思うたらリアン君やったんか」

だいぶ料理も出来た頃に木乃香さんも起きました。まだ少し眠たそうに目をこすりながらベッドから出てきます。

「おはようございます。起こしてしまいましたか・・・」

「おはよう。気にせんでええで。いつもこのくらいには起きとるから」

時計を見ると午前7時でした。そうですね。学生からすればこのくらいには起きないと遅刻してしまいますね。

「それより明日菜さんがいないんですけど、どこに行ったか知ってますか？」

「そういえばリアン君に言っただけだな。明日菜はバイトや」

「バイト？」

「そや、新聞配達をしよるんや。もうそろそろ帰ってくると思うで。というかごめん。朝ご飯の準備をさせてもって、ちょっと待つとって。ウチも手伝うから」

そう言っただけで木乃香さんは洗面所へと行ってしまった。そしてそれと入れ違いになるように玄関のドアが開く音が聞こえました。たぶん、明日菜さんですね。

「ただいま……って、リアンが朝ご飯作ってるの？」

「ええ、居候ですからこのくらいはしないと申し訳ないです」

「そう言えばリアンは朝、どこ行ってたの？私が起きたときにはもういなかったし」

「私は毎朝走るようにしています。それで行き違いになったのだと思います。私が帰ってきたときは明日菜さんはいなかったのだ」

「そっか。じゃあ私シャワー浴びてくるわね」

「はい。もう少ししたら出来ますので」

さて、お二人も揃ったので一気に仕上げましょう。……ふ
と思ったんですが私、他人に料理を振る舞うのは初めてですね。お
二人の口に合うと良いですが……。

「ん……！このオムレツふわふわや」

「そうですか？」

「木乃香のご飯もおいしいけどリアンもすごいわね・・・」

良かったです。喜んでもらえてるようです。これなら作った甲斐があるというものです。

「それで今日はどないするん？」

「とりあえず買い物に行きます。布団とか必要なものを買いそろえないといけませんし。なので店の場所を教えてもらえますか？」

「そやったらウチも一緒にいくわ。口で言うより一緒に行った方が早いし」

「私も今日は暇だから一緒に行こうかな」

「でしたらお願いします」

「ほな、ご飯食べたら早速いこか。善は急げっていうしな」

ここは土地勘のある人で行った方が得策です。安いお店が見つかるかもしれません。お金に関しては向こうで地道に魔法具を作成して『まほネット』で売っていたので十分すぎるほどありますし。私は魔法具作成の才能があったらしく、今では私に直接こんな魔法具を

作って欲しいという依頼がくるようにもなりましたしね。
そうですね。お金はあるんだから洋服も買いましょうか。スーツは
新調したのがあります。が普段着に関してはそんなに持ち合わせが
ありませんし。

……このときの私はこの選択がどうなるか理解でき
ていませんでした。

S I D E 明日菜

朝ご飯を食べた私たち三人は今、買い物に来てるんだけど……

「ほら、次はこっちや」

目の前で木乃香によるリアンの着せ替えショーが始まってるのよ。
とりあえず、最初にリアンの分の布団を買って、それを店の人に部
屋まで送ってもらうように手配した後、リアンが服を買いたいと言
った途端、木乃香が輝いたのよ。それで今に至るってわけ。

「木乃香、こういうの好きだからね……」

こうなったら私では止められない。リアンがすぐるように私を見てくるけど……。

「うん。これもええな。よう似合ってるで、リアン君」

あんな楽しそうな木乃香を止めるなんて私にはできない。ごめんね。しかし、リアンって不思議よね。10歳にしては落ち着きすぎてるし、朝の料理だつてとても子供が作ったとは思えない味だつたし。ガキンチョは嫌いなんだけどリアンだつたらむしろ歓迎ね。

「木乃香さん、そろそろ……」

「あかんで。まだ試してみたい服があるんやから」

これはしばらく時間が掛かりそうね……。

SIDE 木乃香

「うん、似合ってるでリアン君」

「・・・あ、ありがとうございます」

リアン君はウチが選んだ服の中の一着を着てるんや。店で最後に試着したのをそのまま買ったんや。しかし、なんか疲れたような顔しとるけど、どないしたんやろ。

でも、リアン君、何着ても似合うからウチも選び甲斐があったわ。ほんととは女の子の服も着せてみたかったんやけど、それはさすがに駄目やったわ。

「他には何か買う物はあるの？」

明日菜も一緒に選べば良かったのに、明日菜はずっと見てるだけやからな。

「とりあえずはないですね。布団に、服に、小物とかも揃えましたし」

明日菜と話しているリアン君の横顔を見てるんやけど、ほんまに綺麗やな。これで男の子ってのは反則や。でもなんか不思議な子なかな。年の割にはえらいしっかりしとるし、料理もかなりの腕やっただな。それに昨日、おじいちゃんの前で麻帆良に来る前は一人で生活しとった言うてたし。・・・10歳の子が一人暮らしってどうかと思うけどな。家族はおらへんのかな？

「お〜い！明日菜〜！木乃香〜！！」

うん？誰が呼んでるのやろと思って振り返るとそこにはウチのクラスメイトがいました。

SIDE リアン

「お〜い！木乃香〜！！」

明日菜さんと木乃香さんの大きな声で呼んでいる人たちがこっちに走ってきます。．．．しかし、木乃香さんにはいいようにやられてしまいました。あの様に、人形みたいに扱われたのは初めてです。何が木乃香さんを駆り立てたのでしょうか？不思議でなりません。それにあの人に似ているからやめてくださいとも言いつらいです。

「あれ？明日菜がこの時間に外にいるなんて珍しいね」

「うるさいわよー」

私たちの元にやってきたのは四人組でした。その中でも一番元気の良い人が話し掛けます。

「みんなも面白い物？」

「そうなんだなこれが。久しぶりに四人揃って部活が休みだったから遊んでるだよ」

仲良さそうに話しているところを見ると二人と同じクラスの人でしょうか？

「ところでその子は？」

どうやら私に気付いたようです。

「初めまして。リアン・スプリングフィールドです」

「リアン君は、来月からウチで先生するんやって」

「……へえ。それはまた……って先生！？」

やっぱり皆さん似たような反応をされますね。当然と言えば当然なんですが。

「それで、そのための準備として少し早めに麻帆良に来たそうや。ちなみに明日からウチのクラスと一緒に授業も受けるそうや」

「それで、こっちにきたばっかで生活に必要なものが揃ってないからこっして買い物をしてるってわけよ」

明日菜さんも木乃香さんも、驚いている四人をスルーしましたね・・・。まあ私が説明する手間を省いてくれたのでありがたいですが。

「あの・・・？木乃香さん。こちらの方々は？」

クラスメイトであろうことは理解できますが名前を知らないのて話しづらいですね。

「ああ、ゴメンな。この四人はウチらと同じクラスの子や」

「私は明石裕奈。裕奈でOK！」

「佐々木まき絵だよ。私も名前で呼んで」

「和泉亜子や。ウチもええで、下の名前で呼んでも」

「大河内アキラです。みんなと同じように呼んでいいよ」

「わかりました。裕奈さんに、まき絵さん。亜子さんにアキラさんですね。よろしくお願いします」

しかし皆さん随分とフランクというか……。日本人は謙虚と言われてますが違うのでしょうか。

「それで？ 買い物はもう終わったの？」

えーっと。まき絵さんでしたね。彼女が私の目線の高さまでかがんでこちらをのぞき込むように聞いてきます。

「ええ。とりあえずは終わりました。今は何か買い残しが無いかを考えていた所です」

「そっかそっか」

「そや！ リアン君ケータイ買いにいこか？」

「ケータイ？」

ああ、携帯電話の事ですね。そういえば私持っていないですね。一社会人として生活する以上、私個人の連絡先を確保する必要はありますね。魔法使いであれば念話が可能ですが、世間一般では携帯電話が最もポピュラーな手段ですね。

「そうですね。持っていたほうが便利ですし」

「だったら私たちも一緒に行く〜！それでその後一緒に遊ぼうよ！」

「ほな、みんなでいこか！」

というわけで合計七人となって、一路携帯ショップへと向かいます。

「良かったですか？皆さんにも予定があったんじゃ・・・？」

「ううん。特にやることもなくぶらついてただけだから」

道中、一番背の高いアキラさんに話してみました。静かな方ですが優しい人ということは分かります。

「皆さん、部活をしているという話でしたが、何をされてるんですか？」

「私は水泳部。亜子がサッカー部のマネージャーをしていて、裕奈はバスケでまき絵は新体操だよ」

「リアン君も何かしたらどうや？」

「一応考えておきます」

この人たちは何というか暖かいですね。向こうとは違います。向こうの人は何かこう、打算的な部分があつて、私個人と関わるのではなく、『英雄の息子』と関わりを持ちたいという人ばかりでしたから。

私の携帯電話はどれがいいのか分からなかったので、とりあえず最新機種にしました。そして皆さんと連絡先を交換した後は七人でカラオケに行ったりと、寮の門限ぎりぎりまで遊びました。私が明日菜さんと木乃香さんの部屋に居候していると分かったら、速攻で遊びに来たのは予想外でしたが……。

第五話 21A

SIDE リアン

さて、今日から私の麻帆良での生活が本格的に始まります。朝、まずは学園長室へと向かい、そこで簡単な説明を受けて、今度は職員室へと向かい挨拶をしました。事前に聞かされていたのか反応は薄いものでした。しかし、中には気に入らない視線もありましたがね。そして今は、高畑さんに連れられて、とあるクラスへと向かっています。そうです。私が教育実習を行うクラスです。どうやら高畑さんが担任をするクラスに私は所属するそうです。

「はい。これがクラス名簿だよ」

「ありがとうございます」

高畑さんからクラス名簿を渡されます。そこには31人の生徒の顔写真と名前そして所属部が記載されています。……。いろいろな人がいますね。お世話になっている明日菜さんと木乃香さん。昨日一緒に遊んだ裕奈さんに、亜子さん。まき絵さんにアキラさんもいます。そのほかの生徒の皆さんも外人さんもいれば、なんか口ボツトのような生徒もいますね。

顔と名前を覚えつつ名簿を読み進めていくと……

「!？」

一人の女生徒の写真に目が止まりました。彼女の名前は『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』。間違いないですね。私の目的の人物です。まさかこんな形で見つけることになるとは思いませんでした。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』『童姿の闇の魔王』などの様々な呼び名を持つ真祖の吸血鬼。間違はなく最強の魔法使いの一人です。魔法世界では知る人ぞ知る悪の魔法使い。今では悪い子のお仕置きにその名前が使われるくらい有名な人物です。そして私の目的、村の人々の呪いを解く方法を知るかも知れない人物です。

彼女はおよそ600年生きる魔法使いです。その知識は凄まじいと言えるでしょう。そんな彼女なら石化の呪いを解く鍵となるものを知っているかも知れません。

世間一般では『闇の福音は約15年前、たまたま日本を訪れていたサウザントマスターによって封印された』となっています。そう、『封印』です。死亡したとうわけではないのです。私は日本にきてまずやろうと決めていたことはこの闇の福音を捜すことでした。かなりの長丁場を覚悟していたのですが、こうもあっさり見つかるのは運がいいですね。

見つけることができたのならあとは簡単です。正直使いたくはありませんが、私の『サウザントマスターの息子』という肩書きを使えば、彼女との接触も容易いものです。

まあ、なぜ封印されている彼女が学校に通っているのかは疑問に思いますが……。このあたりも本人に聞けばいいでしょう。

「じゃあ、僕が呼んだら入ってきてくれるかな」

考えているうちに教室に到着したようです。高畑さんが先に教室に入っていきます。とりあえず、今、考えていたことは置いておいて気持ちを切り替えましょう。こういうのは最初が肝心です。

「ええ、今日からこのクラスに新しく来た子がいます。彼は来月にはこのクラスで教育実習をしてもらうことになってるから」

「え！ホントですか！？」

「むむっ！私の情報にはそんなことはなかったけど・・・」

「高畑先生！その人はイケメンですかあ！？」

えらくクラスが盛り上がってますね。元気があるのはいいいことです。ありすぎるのは勘弁して欲しいですね。

「じゃあ、入ってきてもらえるかな」

さて、行きますか。・・・ドアを開け、軽くクラス全体を見渡し、真っ直ぐ教壇へと向かいます。その道中、すぐ視線を感じます。こんなに視線を感じたのは初めてです。好奇の視線、私を値

踏みするような視線など、それぞれに感じる視線は違います。

「今日からこのクラスでお世話になるリアン・スプリングフィールドです。」ご迷惑をおかけすることもあるとは思いますがよろしくお願いします」

最後に頭を下げます。・・・・・・反応がありませんね。

「「「「ええ〜！子供！？」「「「「」

おお、やっぱり似たような反応ですね。既に知っている木乃香さんたちは驚いてませんが。

「じゃあ、この時間はリアン君への質問の時間にするから」

教室内に響く驚愕の声が静まったのを見計らって、高畑さんがクラスに声をかけます。

「お〜っと！それじゃ、私の出番だね」

それに反応して一人の女生徒が意気込んで教壇へと近づいてきます。

その手にはメモを筆記用具、そしていどこから取り出したのか分かりませんが何故かマイクが握られてました。え……っと、この人は確か………

「私の名前はあ、朝倉和美さんですね」……へ？なんで知ってるの？」

「さっき、クラス名簿を見て覚えました」

あのくらいの時間があれば31人の名前と顔を覚えるには十分すぎる時間です。

「へえ、凄いな。……じゃあ気を取り直して質問行くよ。まず年齢は？」

「数えて10歳です」

「「「「ええっ!?!?!?!」」」」

クラスの皆さんが驚いてますが特に気にせず進めます。

「出身は？」

「イギリスのウェールズです」

「趣味は？」

「特にはありませんが、強いて上げるなら読書と料理ですね」

「ふーん。じゃあ、さつき教育実習をするって高畑先生が言ったけどホント？」

「ええ、本当です。故郷の大人に勝手に決められました。まあ、白本は良いところなのが救いですがね」

「なんか大変だね・・・」

「まあ、そうですね」

「とりあえずはこんなところかな・・・じゃあ最後に、このクラスの中で彼女にするなら誰がいい？」

なぜ最後にこんな質問が来るのでしょうか。そもそも今あったばかりの人に聞く質問じゃありませんね。まあ、ここは・・・

「そうですね。皆さんそれぞれ綺麗ですので迷いますが、強いて上げるなら木乃香さんと明日菜さん。それとエヴァンジェリンさんのどなたかですね」

「「「「「おお」「」「」「」

「なんでその三人なの？」

「単純な話です。木乃香さんと明日菜さんには居候させてもらってます。ここに来てから一番接点があるんですから当然でしょう。それにエヴァンジェリンさんは私と同じヨーロッパの出身のようですから、『いろいろ』と話をしてみたいですね」

いろいろの部分強調してみます。すると思っただ通りの反応をしてくれました。先ほどまでは気怠そうにしていたが、今では私をキツと見ています。今の言い方なら、エヴァンジェリンさんの真実を知る人にしか真意は分からないでしょう。

「リアン君は教育実習が始まるまでの間はこのクラスでみんなと一緒に授業を受けてもらうから、みんなよろしく頼むよ。・・・ああ、彼は頭が良いから勉強を教えてもらうと良いよ」

どうやら質問タイムは終わったようです。

「じゃあ、リアン君の席は・・・そうだな。一番最後尾。明石さんの後ろでいいかな」

「構いません」

裕奈さんの後ろ、そしてエヴァンジェリンさんの隣ですね。願ってもない席ですね。

私は教壇から指定された席へと向かいます。私が近づくとつれてエヴァンジェリンさんの視線が強くなります。

「よろしくお願いします」

一応挨拶をして隣に腰を下ろします。

「《貴様、何のつもりだ…？》」

席に座るなり念話で私に問いかけてきます。とてもその容姿からは想像できない高圧的な厳しい言葉使いです。

「《いきなりで不躰ですが、お話したいことがあります。できれば二人きりで》」

「《くだらん話なら断る》」

「《話と言うよりは取引ですね。私にはあなたの力、特に600年生きていく知識が必要です。もちろんその対価は用意します。そのためにまず確認したいことがあるのですが》」

「《……私が悪の魔法使いと知ってそれを言っているのか？莫大な対価を要求するかもしれんぞ》」

「《正義だの悪だの、そんな些細なことはどうでもいいです。正義であるということは同時に悪であり、悪であることは同時に正義でもあります。この程度の現実を理解できていないそこの魔法使い

と一緒にされるのは腹立たしいですね。必要なのは確かな知識。そこには善も悪もありません。善であろうが悪であろうが真実は一つしかありません。それに目的のためには手段は選びません。対価についてあなたほどの魔法使いなら法外な対価は要求しないでしょう」

「《貴様なかなか面白いな……。少なくとも正義を妄信する学園の魔法使いとは違うようだ。いいだろう。とりあえず話を聞いてやる。放課後に家に来るといい。学園都市のはずれの森にあるログハウスがそうだ》」

「《では放課後に伺います》」

さて、これで第一段階はクリアです。あとは単純な交渉。それに今の間にエヴァンジェリンさんにかけている呪いは把握しました。凄くぐちゃぐちゃな術式ですが解けないことはないでしょう。……これはかなり大きなカードです。なぜ、エヴァンジェリンさんが中学生をしているかも理解できましたし。

ああ、放課後が待ち遠しいですね。これで大きく目的に近づきます。うまく協力をこぎつければ一気に研究は進みます。それに私が呪いを解いたときの学園の反応が楽しみです……。……。

S I D E エヴァ

実に面白い。こいつは私の想像を超えてくれた。魔力はあのナギをも超えている。そしてなにより、こいつは正義に染まっていない。むしろその思考はそれを否定している。……今の言葉を学園の魔法使いどもに聞かせてやりたいくらいだ。

あのナギに登校地獄の呪いをかけられ、ここ麻帆良に封印されてはや15年。3年経ったら呪いを解きに来ると言ったくせに行方不明になりおつて。おかげでこの呪いを解けるものがいなくなったと思っていたが、それは違っていた。あのナギの息子がここ麻帆良に修行に来たのだ。

このチャンス逃すつもりはない。これを利用して、この忌々しい呪いを解いてやる。

こういつときはど時間が早く過ぎてくれるといいんだが……。まもなくだ。まもなく私は自由となる！

第六話 闇の福音との契約

SIDE リアン

今日一日の授業が全て終わり、今は放課後です。生徒達は部活動に励んでいる最中ですが、私は一人麻帆良の外れにある森を歩いています。目的はもちろん今朝の件です。悪の大魔法使いエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。彼女に会うためです。

「もうそろそろ、着くはずですが……」

森に入ってしまったら、しばらく歩くと、少し開けた場所に出ました。そしてその中央に一軒のログハウスが建っていました。

「あれですね」

私は迷うことなくそのログハウスへ近づきます。そして家のインターフォンを押そうとしたところ、ドアが開きました。

「お待ちしていました、リアン先生。マスターがお待ちです。どうぞ」

出迎えてくれたのはクラスにいた絡繰茶々丸さんです。今の発言が

ら察するにエヴァンジェリンさんの従者でしょうか。

「お邪魔します」

「フフフ……。良く来たな。とりあえず歓迎しよう」

家に入ってすぐにエヴァンジェリンさんがいました。座れとか、言われてませんがエヴァンジェリンさんの向かいの椅子に腰掛けます。ここは遠慮する場面ではありません。私が椅子に座ったのを確認してエヴァンジェリンさんが切り出します。

「私は回りくどい話が嫌いだな、さっさと本題に入らせてもらうが構わんな？」

「ええ、異存ありません。ですが、その前に確認しておきたいことがいくつかあります。まず彼女……絡繰さんはどういった存在ですか？あなたの従者と見えますが、それ以前に彼女は人間ではありませんよね」

「茶々丸は私の従者だ」

「私は正確にはガイノイドと言います。魔法と科学の融合によって生み出された存在です。マスターはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルですが、私を生み出した存在はまた別です」

「そうですか。なら茶々丸さんには席を外していただけるとありがたいです。創造者が他にいるというなら、この場の話の内容が外に

漏れる可能性がありますから」

「それなら問題ない。この場の映像、音声は一切記録するな。いいな茶々丸」

「ハイ。今からの内容は記録しません」

まあいいでしょう。では結界を張りましょう。

「ほう……。見事な手際だな。術式の展開、構築。事前の情報よりも力はあるようだな」

褒められて悪い気はしませんね。

「では本題に入りますが、まず、エヴァンジェリンさんにかかけられている呪い。これは私の父がかけたので間違いありませんね？」

「ああ、そうだ」

「次に、その呪いを父がかけたときになにか条件みたいな事を言いませんでした？例えばいつ呪いを解きにくるかとか、どうしたら呪いがとけるかみたいなことですが…」

ここは重要です。あの学園長のことだとそれらを見捨てて都合の良

いように呪いを利用している可能性があります。実際、構築式がぐちゃぐちゃの呪いに上乘せするようにもう一つ何かしらの術式があります。巧妙に隠されていて気付きませんが、私には関係ありません。この話次第では私はすぐにでも呪いを解呪するつもりです。

「フンツ！当然だ。三年経ったら解きにくるっていたくせに行方不明になったんだよ、奴は。おかげで15年もこんな場所で中学生をする羽目になったわ」

予想通りですね。これなら後腐れ無く呪いを解呪できます。

「では、その呪いを私が解呪します」

「なっ！？貴様、解呪できるのか！？今まで、誰も解呪できなかったんだぞ？」

「簡単ですよ。それに少し語弊があります。『誰も解呪できなかった』ではなく、『解呪しようとしなかった』が正しいです」

「……どういうことだ？」

「では一から説明しますと、まず今エヴァンジェリンさんにかけている『登校地獄の呪い』。これは呪いとしては単純な呪いです。かけられた者は学校に行かなくてはならなくなるだけです。ただ、それを行使した私の父が馬鹿みたいな魔力でこの呪いの性質を理解することなく使用したが故に、呪いの構築式が滅茶苦茶になっています。それでも呪いが機能しているのは、その式を膨大な魔力で強

制的に動かしているからです」

よく、スタンおじいさんが、父を馬鹿だと言っていましたでしたがこれをみれば納得できます。

「つまり、その滅茶苦茶になった術式を正しく配置し直せば解呪は容易いです。まあ、それでも呪い自体の魔力が膨大なため多少苦労はしますが、それでもこれを解呪出来る人は他にもいるはずです。学園長あたりであれば十分できるでしょう」

「もし、そうだとしても私が解く努力をしてなかったとでも思うのか？」

「基本、呪いっていうのは自力で解呪するにはかなりの労力が必要です。正確にかけられた呪いであれば、エヴァンジェリンさんほどの術者なら解けますが、この呪いは違います。力業でかけた呪いですからね、これは」

「貴様なら解けるのか…？」

「もちろん。そう言ったはずです。それにそもそも、かけられて3年したら解呪するという約束があるならすぐにでも解きましょう」

「ならすぐに解呪しろ！」

「ですがそのまえに取引です。私が必要なのはあなたの知識と力。そして私をあなたの庇護の元に入れてもらいたい。それに対する対

価は呪いの解呪。これにプラスして、違約期間の12年。従者というわけではありませんがこの期間、私はあなたの指示に従いましょう。必要であれば私の血を差し出すのもありですね」

「ほう……。十分すぎる対価だが、それで貴様はいいのか？英雄の息子が悪の魔法使いに従うなんて、正義の魔法使いがうるさくなるんじゃないか？」

「その程度気にする必要はありません。なによりあなたの庇護の元にある以上、『自称正義の魔法使い』の皆さんは手出しが出来なくなります。私は彼らが嫌いですし、その関わりを絶ててちょうだいですしね」

「フフ……。フハハハハッ！気に入った！貴様は実に面白い。いいだろう。その取引に応じよう。貴様に対し、馬鹿どもが何かしてくるようなら私がその火の粉を振り払ってやろう」

「成立ですね。ではエヴァンジェリンさんの呪いを解呪します」

ふうっ……。うまくいきましたね。これで私の研究も進みます。

「まあ待て。その前に貴様の本当の実力が知りたい。どうやら向こうからの報告以上の力を持っているみたいだな」

「それは別に構いませんが、場所はどうするんですか？」

「フッ……。ついてこい」

エヴァンジェリンさんが立ち上がり家の奥へと進んでいきます。それに茶々丸さんもついて行くので、私もついて行きます。向かった先は家の中の地下室でした。そこは所狭しと人形が並べられています。…そうでした。エヴァンジェリンさんは人形使いでもありません。そしてその部屋の中央に１メートルほどの高さの台に固定されたボトルシップのようなものがありました。

「ダイオラマ魔法球ですか…」

「ああ。私の『別荘』だ」

本物を見るのは初めてです。いつか買おうと思っていたのですが、さすがに値段が高くて諦めた代物です。それに近づいた瞬間、体が光に包まれました。

そして目を開けたときには魔法球の中でした。ダイオラマ魔法球には様々な種類がアルト聞きますが、エヴァンジェリンさんのはそれらとは違いますね。どうやら自作のようです。

「ところで、貴様の目的とはなんだ？私の知識が必要ということとは生半可なものではあるまい」

「ええ。私の目的は石化の呪いを解くことです。それも爵位級の悪魔のかけたそれです」

「それはまた……」

「私の故郷の村は六年前の雪の日に悪魔の大群の襲撃に遭いました。そのときに、姉と兄と私と幼なじみを覗いた全ての人が石化の呪いをかけられました。その呪いを解くことが私の目的です」

「そんな状況でよく生き残れたな」

「まあ、私はそのときは村のはずれの森にいたというのもあります。が、村を襲撃した悪魔達は私の父が撃退したようです」

「なに！？あいつは生きていたのか！？」

「私が直接見たわけではありませんが、兄がそう言っていました。そして杖をもらったと。ですが、そのあとは行方知れずです」

「そうか…生きていたか」

どうしたんでしょうか？なにか嬉しそうですが…。

「よかったですねマスター。これで枕を濡らさずに済みますね」

「誰がそんなことするか！？」

へえ。なるほど。てつきり父のことを恨んでいるかと思いました。が、そうでは無かったんですね。これは良いことを聞きました。となると、なにかこう、劇的な出会いだったんでしょうかね。

「貴様もそんな目で見るな!!」

「そんな目とは？」

「その何か可愛らしいものを見るような目のことだ!」

「それが何か？ 実際問題、エヴァンジェリンさんは可愛いじゃないですか」

「なっ……!？」

「さすがです。褒め言葉に遠慮がありませんね…」

「そ、そんなことより貴様の实力を見せてもらっぞ」

話を変えましたね。意外と面白い人物なのかもしれませんね。

「貴様は精霊の加護がなく、攻撃魔法の類が一切使えないそうだが、それは本当か？」

「ええ、そうです」

「なるほどな。ではまず、茶々丸と戦ってもらおう。始まりと終わりは私が合図する」

「いいですよ」

「わかりました」

こうして、私の力を誰かに試すのは修行を始めてからは初めてですね。私自身も自分の力がどれくらいのものか客観的に他者と比べて知りたいですしちょうど良いです。しかも相手は闇の福音の従者。弱いわけがありません。相手にとって不足なしといったところでしようか。それにここならアレを使っても目の前のエヴァンジェリンさん達以外には誰の目につくこともありませんね。

私と茶々丸さんは開けた簡素な闘技場のような舞台で向かい合います。

「では、始めるがいい！」

先手必勝。瞬動を使い背後に回ります。そして正拳を繰り出しますが見事に防がれました。その防いだ状態で右の蹴りが腹部めがけて来ますが、慌てる必要はありません。動きもよく見えます。

「ほう・・・」

その蹴りを左手で受け止めそれを支点に上空へと飛び上がります。そしてそのまま踵落としを放ちますが避けられました。目標を失っ

た私の一撃は地面に小さなクレーターを作りました。なかなか素早いですね。少し出力を上げますが。

体制を崩している私に茶々丸さんの右のストレートが来ます。瞬間、肘のカバーが開きそこからジェット噴射による推進力をプラスした一撃です。それを私は上体を反らして避け、そのまま顎を蹴り上げます。

「くっ…！」

そのままバク転の要領で足を後方へ持つていき、地に足がついた瞬間、地面すれすれを滑空するように接敵。直前で瞬動。背後に回った瞬間遙か上空へと飛び上がり、直上から虚空瞬動で一気に降下します。落下速度を加えた一撃です。しかし、寸前で反応され、服をかすめるのみに終わりました。

「そこまでだ！」

む…。まだ始まったばかりだというのに終わりですか。まだ試したいことはたくさんあったのですが。

「とりあえずは十分だ。これ以上は茶々丸の実力では無理だ」

「ということは次はエヴァンジェリンさんが相手ですか？」

「不満か？」

「いえいえ、ありがたいです」

エヴァンジェリンさんなら遠慮する必要はありませんね。本気というのを出してみますか。

「では、私の目を見る。リアン・スプリングフィールド」

エヴァンジェリンさんの目をみた瞬間、何かに引き込まれる感じがしました。しかし周囲の景色は先ほどと変わりありません……！さつき私が作った地面のクレーターがありませんね。

「ここは『幻想空間』だ。ここなら私もかつてと同じ力を使うことができる。……さあ、構えろ」

エヴァンジェリンさんから膨大な魔力があふれ出しました。そして襲ってくるプレッシャー。これが最強と呼ばれる魔法使いですか……。勝てるイメージなど皆無ですが、やるだけやりましょう。

「はああああっ！！」

全開です。出し惜しみはしません。肉体強化も最高レベルです。自

分の魔力を媒体にして、大気中の魔力をかき集めます。それを鎧のように身に纏い、全身を覆うように幾重もの障壁を構築します。最後に両の拳に魔力を圧縮し、纏わせます。これが私の『本気』の戦闘態勢です。

「《どこが『英雄になれない落ちこぼれだ』。魔法が使えない？だが今の奴はどうだ。あのようなこと、私ですらできんぞ》」

「いきますー!!」

「フツ……。いいだろう。遠慮はいらんぞ！全力で来い!!」

SIDE 三人称

リアンが地を蹴り正面からエヴァンジェリンに接敵する。蹴り上げた地面は爆ぜるようにその様を変える。そのままの勢いのまま、リアンは正拳を突き出す。それはエヴァンジェリンの障壁を容易く突破するが、彼女は普通にそれを受け止めた。

「私の障壁を軽く抜くか…」

「くっ!!」

初撃は失敗。もちろんこの程度の攻撃が通用するなどリアンはこれっぽちも思っていない。すぐさま体を捻り、蹴りを繰り出す。それも止められるが、これは陽動。すぐさま空いている手をエヴァンジェリンの腹部に押し当て、魔力をぶつける！

「霸っ！！」

それを受けたエヴァンジェリンはいとも容易く吹き飛ぶ。しかし、

「魔法の射手。連弾・闇の99矢！」

吹き飛ばされたエヴァンジェリンだったがすぐさま体勢を立て直し、無詠唱で魔法の矢を放つ。それらは、一般的な魔法使いが放つそれとは違い、込められた魔力、その練度も桁違いである。当然、魔法学校を卒業したばかりの見習い魔法使いに向けるべきものではない。それに対し、リアンは両手を前に突き出して『壁』をつくる。

「ウォール
魔力壁」

エヴァンジェリンの魔法はリアンの目の前で見えない壁にぶつかって消滅した。リアンはさらに続ける。

「構築式変更」

「!?!。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪」

今度はリアンの手の前に直径一メートルほどの球体が出現する。それはリアンの魔力を球体にしたものである。それを確認したエヴァンジェリンは新たな詠唱に入る。

「魔砲^{キャノン}!!」

「闇の吹雪!!」

リアンは魔力による砲撃。エヴァンジェリンは上級呪文を同時に放つ。放たれたそれらは二人の中間地点で衝突し、周囲に暴風と衝撃を巻き起こす。しかし拮抗したのは一瞬で、すぐさまリアンは砲撃を止め瞬動に入る。

「《まさかこれほどとはな……》」

リアンはエヴァンジェリンの背後に移動し、先ほどの茶々丸のときと同じように拳を繰り出す。それより早くエヴァンジェリンの蹴りがリアンの腹部に直撃する。幾重にも張られた障壁は容易く碎ける。

「ガハッ!？」

「フッ……氷瀑」

すぐさまエヴァンジェリンは追撃する。強烈な腹部への一撃をもらったものの追撃は何とか大きく後方へと回避することにより逃れた。しかしそのときには既にエヴァンジェリンはさらなる追撃を行っていた。

「氷神の戦鎚」

直径20メートルはあろうかという氷がリアンに降りかかる。

「^{キャノン}魔砲!」

すぐさまそれをリアンは破壊する。だが、破壊し、見上げた空にはエヴァンジェリンの姿はない。

「終わりだ……断罪の剣」
エクスキューショナー・ソード

リアンが声に気付いたときにはエヴァンジェリンはリアンの背後にいて、その手の先には輝く刃が高鳴りを上げていた。そしてエヴァ

ンジェリンはそれでリアンをなぎ払う！
しかしそれはガキンツといった音を上げる結果となった。

「そんなこともできるのか……？」

「^{ソード}魔刀。…間に合いました」

ぎりぎりで魔力の刀を生み出したリアンは辛くも防ぐことに成功した。

「続けて行きます。^{ソード・ガーデン}魔刀の庭」

次の瞬間、周囲におびただしい数の刀が現れた。それらは一様に地に突き刺さっている。

「素晴らしい……。600年生きてきて初めての経験だ。これは」

「お褒めにあずかり光栄……です!!」

そしてリアンはエヴァンジェリンに斬りかかる。当然防がれるが、リアンの刀とエヴァンジェリンの断罪の剣が触れあった瞬間には、リアンは次の刀を手に持ち、瞬動による、高速のヒットアンドアウェイを繰り返す。ヒットアンドアウェイとは言うものの、常人には

おびただしい連続攻撃に見えるであろう。しかし、どの攻撃もエヴァンジェリンにことごとく防がれる。その足下には、リアンが手放した魔刀が積み上がっていく。

「（頃合いですね…）」

「（む…雰囲気が変わったな。さて、次は何をしてくるか）」

「^{バースト}
崩壊！」

エヴァンジェリンの足下に転がっている幾本もの魔刀が一斉に爆発した。魔刀の構築式を崩壊させ、構成する魔力を暴発させたのだ。

「^{ランス}
投擲槍……」

爆発がおさまってもリアンは戦闘態勢を解かない。この程度で勝てる相手ではない。故に今度は魔槍を構築する。その数は50本。リアンの周囲に漂いながらその切っ先を爆発の中心、そこにいるであろうエヴァンジェリンに向けている。

そして爆煙がだんだん晴れていく。ほんのわずかその煙が揺らめく。それを見てリアンは身構え、いつでも魔槍を投擲出来る体勢を取る。そして煙にエヴァンジェリンの影が映る。瞬間、50本の槍が一斉にエヴァンジェリンに向かう。しかし、槍を放った瞬間リアンは側頭部に強い衝撃を受け、地面を跳ね飛んでいく。何とか片手を着いて体勢を整える。

「（全く見えなかった…。これが瞬動の境地『縮地』ですか。それに無傷とは…）」

衝撃の主は当然エヴァンジェリンであったが、攻撃をその身に受けるまでエヴァンジェリンの姿は認識出来なかった。気配すら感じなかった。瞬動を極めると、瞬動の『入り』と『抜き』に気配を感じないという。まさにエヴァンジェリンの瞬動はそれであった。

「まさか、爆発させるとは思わなかったよ。私が真祖の吸血鬼でなかったらやられていたな。再生まで使うつもりはなかったんだけどな」

無傷と思われたがそれは違っていた。エヴァンジェリンは確かに爆発の直撃を受けた。至近距離であるがゆえに、障壁による軽減もなく、片腕が吹き飛ぶほどのダメージを受けたが、再生したのである。真祖の吸血鬼は不死の存在。不死殺しの魔法具や呪文でないとその身を滅ぼすことは出来ない。片腕程度造作もなく再生できるのである。

「貴様は師はいるのか？」

「……いません」

「独学でこれほどの力をつけたのか…… まだまだ荒削りであるが素晴らしいな。ついでだ。私が貴様を鍛えてやろう」

そして、幻想空間は崩壊した。

SIDE リアン

現実世界へと意識が戻りました。

「それで、私の實力はどうでしょうか？」

「さっきも言ったが、荒削りではあるが見事なものだ。とても独学とは思えん。そのあたりは今後、私が鍛えてやろう」

ありがたいですね。私の戦いは独学ですから、自分でも荒っぽいのは分かります。エヴァンジェリンさんほどの人に師事を仰げるなら私はより強くなれます。

「では、呪いを解きましょうか」

さて、肝心な呪いの解呪に移りましょう。失礼してエヴァンジェリンさんの頭に手を置き、呪いの術式を正しく構築し直します。

そして術式を少しずつ解いていきます。これを五回ほど繰り返して、最後に呪いの精霊を消滅させます。

「気分はどうですか？」

「ああ、悪くない。体が軽くなった。だが、魔力が戻ってないのはどういうことだ？」

「それは、登校地獄の呪いとは別に封印抑制の式があるからです」

「なんだとっ!？」

やっぱり気付いてませんね。

「登校地獄の呪いには魔力の封印効果はありません。そして今まで気づかなかったのは、この魔力抑制の式は電力を媒体にしています。だからわからなかったんでしょう」

「あの忌ま忌ましいジジイめ……」

「おそらく、近日中に私とエヴァンジェリンさんは一緒に呼び出しを受けるでしょう。そのときにでも詰問したらどうです？」

「……確かに面白いな」

「そのときの流れ次第では、学園長の目の前でその呪いも解呪しましょうか」

「フハハハッ!! 奴らの慌てる様が目に浮かぶな。やはり貴様は面白いな。これからはそんな他人行儀ではなく、エヴァとよんでいぞ」

これは、中々いい関係を築けそうですね。よかったです。これでは教師の仕事と研究に専念できます。兄が来るまでに土台を造りあげておきたいですね。

兄が来たら馬鹿みたいに掻き回されそうですね。

第七話 斯くも甘き『正義』の果実

SIDE 三人称

リアンがエヴァの別荘で登校地獄の呪いを解いた翌日。学園長室では一騒動起こっていた。

「学園長！闇の福音の呪いが解けたとはどういうことですか！？」

「儂も現状は把握できておらん。自力で解いたのかも、誰かが解いたのかもな」

エヴァの呪いが解けたことは瞬く間に学園の魔法使いの間に広がった。誰が発端かは定かではないが、それを聞きつけた幾人かの魔法使いが早朝から学園長室に詰めかけているのだ。正直、近右衛門も驚いている。誰がやったのかは分からないが、これまで解けなかった呪いが解けてしまったのだ。呪いが解けた以上、魔力抑制の式もエヴァにばれたと考えていいだろう。

「ともかく！この件については今宵、本人から事情を聞いてみる。勝手な行動は慎むように！！」

部屋全体にくまなく響き渡り、それは一つの命令となる。近右衛門に詰め寄っていた数人は不承不承ではあるがその言葉に従い部屋を後にした。それにならい他の人間も学園長室を出て行き、残ったのは近右衛門とタカミチのみである。

「……………どう思ふかの？」

「わかりませんね。なぜ今になって呪いが解けたのか……。自力で解けるなら既にエヴァは解いているはずですから、誰かが解いたと見るのが妥当でしょう」

「問題はそこじゃよ……。儂でも皆目検討がつかん」

「昨日の放課後、リアン君がエヴァの元を訪れたらしいですけど、見習い程度では彼がかけた呪いは解けませんしね」

「うーむ……。一応リアン君も呼ぶかの。何か知っているかもしれないの」

SIDE リアン

現在深夜零時を回ったところです。そして私は今、世界樹前広場へと向かっています。学園長から呼び出しを受けました。呼び出しの内容は『今夜、学園の魔法使いの会合があるから午前0を過ぎたくらいに世界樹前広場へときてくれんか』でしたね。

ええ、十中八九エヴァさんの事でしょう。それに学園長の口ぶりだと私が呪いを解いたことはばれていませんね。どうせ、見習いだと思ってるんでしょうね。まあ、そうなるように私が計算してるんで

すけどね。

「早速だな……」

「ええ。予想通りですね」

「ケケケ。ドウセナラ、派手ニイコウゼ」

私はエヴァさんとその従者チャチャゼロさんと広場へと向かっています。登校地獄の呪いを解いた事により今まで動けなかった、チャチャゼロさんは動けるようになりました。ただ、エヴァさんの魔力が戻ってないため自在には動けないみたいです。それで何故か私の頭の上に乗っています。茶々丸さんは定期メンテナンスということ
で不在です。

「では、（ヴァンスロード）天界の道……」

魔力による空への架け橋を生み出します。階段を上るように私とエヴァさんは空へと上っていきます。浮遊術を使っているわけでもなく、ただ歩いて上がります。

「しかし、応用の利くいい術だな。空を歩くなんて私でも初めての経験だ」

「この利点はイメージできればある程度のものは生み出せます。」

イメージしたものに言霊をのせて具現化する。原理を知っても私しか使えませんがね」

これは精霊の加護がないからこそ出来る芸当です。魔法を使う基本としては、無形の魔力を精霊という変換器を通して、有形の魔法とします。これは無意識下で当然のように行われているプロセスです。始動キーによって、自身を扉とし、精霊達が住まうという、精霊界とパイプを繋いで自身の魔力をそちらに供給します。そして、精霊界で各属性や性質に変換された魔力をこちらに引っ張り出して現象化させる。私はこの精霊という変換器が存在しないから、自身の魔力を魔法へと変換できないが故に、一部の魔法しか使えません。

ならば、私自身が変換器となればいい。術式処理は非常に複雑なので説明は割愛しますが、私自身を扉であり変換器として、現実に起こしたい現象をイメージして具現化することによって、先日 of 剣や槍。砲撃やこの道を生み出せます。詠唱のプロセスが必要ないので非常に発動が早く、ほぼノータイムで『闇の吹雪』や『雷の暴風』と同等、もしくはそれ以上の攻撃が可能です。

ただ、これには欠点も当然あって、純粋な魔力で構成しているので10の魔力では10のものしか生み出せません。精霊を使用する魔法は10の魔力に対し、補助術式などを使用すれば20の結果、魔法を生み出すこともできます。つまりこれは先天的に魔力が膨大な私だから出来る術式でもあります。

じゃあ、同程度の魔力を有する人物だったら可能なのではないかといたら、答えはノーです。

魔法使いというのは先に説明したプロセスを無意識下で行っています。精霊を介しないと魔法は使えないということを『知っています』。これが重要です。

別の話になりますが、クマバチという蜂がいます。この蜂は当然飛べますが、実は力学的には飛べないことが証明されています。なら、

何故飛べるのか。それはクマバチは自分が飛べないことを『知らない』からです。故に飛べます。

つまり、精霊を介さなければ魔法が使えないことを『知らない』。この境地ともいえる状態にいかに近づくかが私のターニングポイントでした。

結果、私は精霊を介さずとも魔力の変換に成功しました。これさえ出来ればもう後は私のイメージと魔力次第です。

「集マツテルヨウジャネエカ」

今の私たちは世界樹とほぼ同じ高さまで到達しました。ここからは下っていきます。広場にはざっと見て30人ほど集まっています。思ったよりも多いですね。

「リアン。あいつらに向かってあの剣を突き立てろ」

「いいんですか？」

「構わん。もう実力を隠す必要はないだろう」

ふむ。確かにそうですね。どうせ私が呪いを解いたことをばらすのに変わりはないですからね。それに一応エヴァさんにはいろいろと教えを請う身ですから、その指示には従いましょう。……ですがただ突き立てるのでは地味ですから、少し遊びましょうかね。

「魔刀」

SIDE 三人称

「学園長。闇の福音はまだですか？」

「ふむ。そろそろじゃと思うんじゃないの…」

集合時間はとうに過ぎている。なのに今回の会合の主役たるエヴァがまだここに到着していない。同時にリアンも到着していない。焦れた一人の魔法先生が近右衛門に尋ねるが近右衛門にも答えられない。

ガガガガガガッッッ！！！！

そのときだった。広場に無数の刀が降り注ぎ、地に突き刺さった。

「敵襲か！？」

一斉にその場の魔法使いは杖や剣など、様々な武器を構える。しかし誰一人として刀が降り注いできた空を見ようとしなかった。いや、正確には3人といったところか。

近右衛門と高畑、そして龍宮真名の三人である。この三人はすぐさま空を見上げた。そしてそこに見つけた。エヴァと頭に人形をのせたリアンの二人を。そして近右衛門達に続くように全員が空を見上

げる。

「あれはなんだ……」

その場にいた誰かがそう呟いた。そこには空を歩いて降りてくる二人と、その道の端に控え、その手に持つ斧槍でアーチを作る、何十人も全身を鎧で身を包んだ騎士がいた。

SIDE リアン

「ケケケ！ 凄エナ、リアン」

「どうも。でもこれはまだ開発中なんですよ。こうして生み出すことは出来ても簡単な動作しかまだ出来ないんです。最終的には自立行動を可能にして、私の手足となってもらうつもりですけどね」

「それはまた、面白そうだな」

魔刀を広場に射出するのと同時に私は開発中の自動人形を具現化します。それらを私たちの両脇にずらりと整列させ、斧槍でアーチを作らせます。あとは降りるだけです。

どうやら私たちに気付いたらしく、広場の皆がこちらを見えています。

「これは何のつもりかの……？」

アーチをぐり抜け、広場へと到着した私たちに学園長が問いかけます。まあ当然でしょうね。突然このような真似をすれば、何かよからぬ事を企んでいると取られても仕方ないですしね。

「なに、ちょっとしたお披露目だ。リアンもういいぞ」

リリース
「解放」

エヴァさんが満足したようなので騎士達も、広場に刺さっている剣も消します。すると皆さん驚いた表情を私に向けてきます。まさか私の術とは思ってなかったんでしょね。……ということは、私の『実力』は周知の事実というわけですね。

「今のはリアン君の術じゃったか……。どういうことか説明してもらえるかの」

「何故ですか？」

説明する理由はありませんね。

「なに、メルディアナからの書類にはさっきのような術が使えるとは無かったのでは」

「教えるつもりはありません」

「そうは言ってものお……」

「……このじい……」。

「何のつもりですか？人の頭を勝手に覗かないでほしいですね」

「ふお！？」

このじいはいは、話すつもりはないと言った瞬間、直接私の記憶を見ようとしたようですが、無駄です。

「フハハハっ！！無様だなじい。こいつをただの見習いと思ったら痛い目を見るぞ……。ああ、もう見てるな。私の呪いを解いたのは貴様らが『落ちこぼれ』と呼んでいるリアンだよ」

「……なっ！？」「……」

「あの程度の呪いを解けないなんて、あなたたちの実力が知れますね」

「馬鹿な！？君は何をしたのか分かっているのか！？」

誰ですか？この黒いおっさんは。その場の感情で動くななんて愚の骨

頂ですよ。

「エヴァさんにかけられていた登校地獄の呪い『のみ』を解呪しました。それが何か？」

『のみ』と強調します。分かる人には分かったでしょう。あなた達がこれとは別に魔力抑制の式を使っていたのはバレていますよと、暗に告げます。予想通り、学園長や高畑さん。その他数名はこれに気付いたようです。明らかに驚いた顔をしています。

「問題なんかあるはずないよな、じじい。元々、登校地獄の呪いについては三年したら解呪する約束だったんだしな」

黒いおっさんが何か言おうとする前に、エヴァさんが黒い笑みを浮かべながら学園長に問いかけます。……確かに、あの笑顔は悪の魔法使いですね。

「それをよくもまあ、良いように利用してくれたな……」

「むう………!!」

魔力はまだ抑えられているはずですが、エヴァさんから何か力を感じます。力というよりこれは威圧感?……いや、これは殺気ですね。

「登校地獄の呪いに上乘せして、この私の魔力を封印抑制する式ま
でかけているとは思わなかったよ」

「当然だ！貴様は悪だ。正義に仇成す存在である以上、当然の処置
だ！」

「あなたはさつきから何ですか？五月蠅いですよ。まあ、弱い犬ほどよくほえますから、仕方ないとはいえ、いい加減耳障りです」

「なんだ…と？」

これだから現実を見ない人は嫌いなんですよ。この世における全てを自分の短い物差しでしか測れない。大体、魔力を封じたぐらいでエヴァさんがどうにかなると思ってるんですかね。魔力を封じたとしても、600年も生きるということは伊達ではありません。根本的に経験が違うのに、魔力を封じて、魔法を使えなくした程度で勝てると思ってるから、実にめでたいですね。

それにこの程度の挑発で我を忘れるなんて……。本当に失望しますね。

「言うておくが、リアンは貴様らより強いぞ。そうだな、タカミチよりも強いんじゃないか？幻想空間の中とはいえ、私の腕を吹き飛ばしたんだからな」

「貴様ラジャア、瞬殺サレルノガオチダロウナ」

それは言い過ぎだと思いますが。まあ少なくともこの黒いおっさんには負ける気がしませんね。

「今後、私はエヴァさんと協力関係を結びます。あなたたちのところでは叶うものも叶わないですからね。エヴァさんが登校地獄の呪いをかけられていた15年から、当初の約定期間の三年を引いた12年の間は私はエヴァさんと行動を共にします。一応、修行に関することはそちらの指示には従いますが、それ以外、特に魔法の訓練についてはエヴァさんに教わります。ここにいる魔法使いの中でエヴァさんほどの実力者はいませんしね」

少なくとも師匠が自分より弱かったら教える必要はありませんしね。というより、この人達は恐らく私より、兄のほうに力を入れることは目に見えていますしね。それはそれで私にとっては非常に都合が良いのですがね。

「そういうことだ。ああ…封印抑制の式はこいつに解いてもらうから安心しろ。再びかけようとしても無駄だぞ。するなとは言わんが、それをした瞬間、貴様達は私に敵対するということを覚えておけ。――…帰るぞ」

何か後ろで言っているようでしたが気にする必要はありません。さて、これからどうなりますかね…。本国には報告しないでしょから、あるとしたら、一部の空気を読めない人たちが暴走するぐらいですかね。

さて、これで心おきなく研究に専念できますね。兄が麻帆良に来る

前に少しは進められるといいのですが……。

第八話 それぞれの思惑

SIDE 三人称

リアンの学園の魔法使いからの離脱宣言ともいえる発言から二週間が経過した。学園側の魔法使いは未だにあの出来事を引きずっている様子だ。

無理もない。見習いで落ちこぼれと評されていた子供が、学園都市に封印していた闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

の封印を解いたのである。今まで誰も解けなかった呪いを解呪したことも驚愕だが、その後がさらに驚愕を招いた。

『私はこれよりエヴァさんと協力関係を結びます。魔法の修行についてはエヴァさんに教えを請います』

事実上の離反ともとれる宣言である。リアンは魔法が使えないというウィークポイントは有するものの、その父は大戦の英雄ナギ・スプリングフィールド。次代の英雄候補の一人である。目下、その役目は兄であるネギ・スプリングフィールドに期待する人たちが多いとはいえ、大戦の英雄を父に持つリアンが、悪の魔法使いの象徴ともいえるエヴァンジェリンに師事するというのである。『正義の象

徴』ともいえる英雄の息子が『悪』の魔法使いと行動を共にする。学園内の正義を妄信する魔法使いの中には反逆者とするべきだという声もある。替わりはいるのだから、落ちこぼれなんぞ必要ないと声高に叫ぶが、実際問題それは出来ない。仮にリアンの修行を中止した場合、麻帆良学園は卒業生の修行場所として不適當との指摘を受けかねない。確かにリアンは魔法を一部しか使えないが、それ以外はかなりの成績を修めている。麻帆良学園の魔法使いのなかにもなぜ、リアンが首席じゃないのかと疑問に思う者もいるのである。それにリアンがエヴァンジェリンに教えを請うというのは問題ではない。

リアンは『日本の学校で教師をする』ためにここ麻帆良にきたのであって、『英雄になるため』に麻帆良に来たのではない。さらに拳げるなら、魔法学校を卒業して一人前の魔法使いとなるための、魔法に関する修行は特に条件が付されていない。誰に師事してもいいし、自力で修行を行ってもよい。これは魔法世界一般の常識である。見習い魔法使いとはいえ、自分の師を選ぶ権利はある。そこまで事細かく管理されるいわれはないのである。

つまり、リアンの修行を中止する理由が存在しないのである。問題行動も起こしていないのに、ただ『悪』が気に入らないという感情論のみで修行を中止することは出来ないのだ。

そもそも勝手に悪の決めつける学園の魔法使いは実に愚かである。誰がいつ、お前達を正義と決めたというのだ。思い上がりもここまできると滑稽である。

「……生徒とも近づきすぎることも遠すぎることもなく打ち解けており、特に問題行動は見受けられない。なお、放課後は職員室に於いて、半月後から始まる教育実習の準備等に励んでいる。教師陣からの評価も良好」

学園長室で近右衛門は一つの報告書を読んでいた。内容はリアンの指導教員になる源しずかからの麻帆良におけるリアンの素行報告である。魔法学校を卒業し、修行で麻帆良に来た以上その監督責任者は、麻帆良学園の長である近右衛門である。先のリアンの宣言は近右衛門も驚いたが、いずれはネギとリアンはエヴァに弟子入りしてもらおうと思っていたので、ある意味結果オーライとなった。しかし、気になるのが『エヴァの腕をリアンが吹き飛ばした』ということである。エヴァは嘘はつかない。特に実力の評価については。だとすると、リアンは既にかんりの力を有していることになる。それに見たこともない魔法。おそらく独自に編み出したのだろう。これらも近右衛門の頭を悩ませる要因になっている。人は異質のものを忌引し、排除する傾向にある。中世に行われた魔女狩りなんかが良い例だろう。

ただでさえ、エヴァと共に行動することで学園の正義の魔法使いから忌々しく思われているのにプラスして、今まで見たこともない魔法技術を持つリアンは今では一種の疫病神のように思われている。しかし、そんな魔法使い達の考えとは裏腹に、リアンの素行は問題がない。むしろ品行方正、絵に描いたような優等生である。学園側に敵対する行動も起こしておらず、一般の教師からの信頼も厚くなってきた。

今ではリアンに対して否定的な魔法使いは全体の一割未満になって

いるので近右衛門としても一安心といったところだろうか。

「しかし、ネギ君が来たときが問題じゃのう……」

ネギが来たときに、何か理由をこじつけて強硬手段にでないとは限らない。それだけは避けなければならない。近右衛門は一人頭を抱えるのであった。

良くも悪くも麻帆良の話題の中心人物、リアン・スプリングフィールドは現在一人で麻帆良を散策している。エヴァンジェリンの別荘での研究も徐々にはあるが進展を見せている。それにエヴァンジェリンからは大東流合気柔術を教えてもらっている。これまでの人生において（１０年ぼっちであるが）、今が最も充実しているといっても過言ではない。

「そろそろ出てきたらどうです？ バレバレですよ。桜咲刹那さん」

リアンは人気のない公園に差し掛かったあたりでリアンは突然声をあげる。すると近くの木の陰から一人の太刀をもった少女が出てくる。

「何か用ですか？こそそこそとかぎ回られるのは大嫌いなんですよね」

「あなたの目的は何ですか？」

「何故それをあなたに話す必要があるんですか？あなたには関係ないでしょう」

「やはり狙いはお嬢様か！？」

リアンの言葉に激昂した刹那はリアンに斬りかかる。しかし、それは空振りに終わり、瞬動により背後に移動したリアンに押さえつけられる。地面にうつぶせに倒れ込んだ刹那の右手を右足で押さえ、首に左手をかける。

「無謀です。怒りは力を与えますが判断力を曇らせます。常に冷静でないと命を落としますよ。それに勘違いも甚だしい。お嬢様とは木乃香さんの事ですよね？」

刹那は答えない。ただもがくだけである。もがいたとしてもリアンの拘束からは逃れられないのだが……。

「沈黙は肯定と受け取ります。……ハア、私が木乃香さんを狙う理由がどこにあるんですか？むしろ感謝してますよ。突然やってきた異国の少年である私を、なんの疑いもなく泊めてくれてるんですから。感謝することはあっても恨む理由はまったくありません。大方、

私を忌々しく思う馬鹿な魔法使いに焚きつけられたのでしょうか？人の言葉を真に受けすぎです。自分で考えなさい。そのために脳があるんですから。……さて、あなたもでてきたらどうですか？龍宮さん」

「なっ！？」

リアンは刹那を解放して、後ろを振り返る。そこには褐色の長身の女子生徒が立っていた。

「驚いた。いつ気付いたんだい？」

「最初からですよ。あなた達は特徴的な魔力及び気の波長がしますからね」

「「！？」」

「大丈夫ですよ。私は口が堅いですから、誰にも言いませんよ」

解放された刹那は起きあがり尚、敵対の態度を取ろうとするが龍宮がそのような態度を取ってないので刹那も太刀を下げる。戦闘意欲がないことを確認したリアンはさらに続ける。

「むしろ、私としては木乃香さんが狙われるならそれを阻止します。恩人ですからね。これで納得いきましたか？」

「そ、その……申し訳ありませんでした」

「龍宮さんもこれでいいですか？」

「私は刹那が良いというならそれでいいさ。元々私は刹那に頼まれてきただけだしね」

「結構。では私は帰りますね。また明日学校でお会いしましょう」

リアンは二人に一礼してその場を立ち去る。残された二人はその背中を見ていた。

「だから言っただろう？彼は大丈夫だって」

「すまん……」

「しかし、彼は強いな。エヴァンジェリンの腕を吹き飛ばしたというのめあながち嘘ではなさそうだ」

「私もいつ後ろを取られたのか気付かなかった。気付いたら組み伏せられていた……。それに私の正体に気付いていたみたいだし……」

「フフ……。おもしろい少年だ」

そんな二人の様子はつゆ知らず。リアンは一人愚痴っていた。

「説教なんて、なんかおじいさんみたいです。それに余計なことを口走ってしまいましたね……。あの二人は私と近い部分があるからですかね。烏族と人間のハーフに、半魔族ですか。2-Aはほんとバラエティーに富んでますね。これは誰かの作為なんでしょうかね……」

夕焼けが照らす道を一人、リアンは歩いていく。その顔はどこが満足そうにも、寂しそうにも見えた……。こうしてリアンの一日は終わるはずだった。

第九話 リアンの『闇（ちから）』

SIDE 三人称

刹那と真名の二人と別れたリアンはエヴァの家に向かっていた。木乃香と明日菜には今日は遅くなると伝えている。リアンの日課としては、朝、ランニングを行い、日中は2-Aで授業を見学し、放課後は職員室で教師の仕事を教わる。それらが終わるとエヴァの別荘で研究をして、寮に戻る。こういった感じである。エヴァの別荘は内外の時間差を現実での1時間が別荘での1日になるように設定されている。それを有効利用して、別荘で一日研究や鍛錬にあてるようにしている。

そして今日もまた、いつものようにエヴァの別荘を利用するために森の中を歩いていた。すっかり日は落ちて、森の生き物たちの声は一つも聞こえず静寂が森を支配している。微かに響くのはリアンが土を踏みしめる音のみである。

だが、どこかおかしい。違和感というのだろうか、何か肌にまとわりつくような嫌な雰囲気を感じて森が支配している。リアンも当然それを感じている。

「静かすぎますね……」

いくら夜だからといっても森の音が聞こえないのは異常である。確かに夜になると森の生物たちはその活動を止めるが、それでも夜行性の生物はいるし、風が吹けば森はざわめく。だが、今日に限ってはそれすらない。風は吹いているが、木々はざわめかない。

「っ!？」

そのときだった。何か森の木々の合間を縫ってリアンに飛んできた。幸い、右斜め前方、視界の端から飛んできたので対処できたが、これが背後からならやられていただろう。とっさに障壁を展開してやり過ごした。

「これは…」

飛来したそれは銃弾だった。偽物ではなく本物である。日常の日本において実弾が飛んでくることはまずない。だが非日常である魔法の世界においては日常茶飯事である。そしてここ麻帆良は関東魔法協会の本部。その非日常の中心地である。つまり…

「全く、…今日は厄日ですか」

リアンは銃弾が飛んできた方向へと向かう。

麻帆良学園には夜間の警備の仕事が存在している。こう聞いて想像するのは見回りや、学園施設の警備などを思い浮かべるだろう。確かにこの一面もあるが、ここ麻帆良学園都市においては違った部分が多い。麻帆良学園都市は世界的にも有名な世界樹を中心とした霊地であり、かつての大戦の戦火を逃れるために世界各地、魔法世界からも古今東西、種類を問わず貴重な魔法書が、学園都市内の図書館島に貯蔵されている。当然これらを狙った侵入者は絶えずにやってくる。

つまり、これら侵入者を撃退することが夜の警備の本質である。この警備は学園に在籍する魔法先生や魔法生徒が当番制であたっている。戦闘経験を積ませる意味も込めて、本来は参加させるべきではない魔法生徒達も、この警備に当たっているのである。

そして現在、今日も懲りずにやってきた侵入者（今日は西の陰陽術師のようだが）を担当の者たちは撃退せんと奮闘しているのである。

「くっ！？数が多い！！！」

学園の警備区画の一角、学園都市郊外の森。つまるところエヴァの家がある森である。少女が太刀を振るい、鬼達を切っては還していく。そして、その隣ではもう一人の少女が銃をそれぞれ両手に持ち、次々と召喚される鬼達の額を撃ち抜いていく。

二人の少女の名は桜咲刹那と龍宮真名。そして相対するは50体はあろうかという鬼達。そしてそれを召喚し続ける術者二人。刹那と真名の二人は次々に太刀、そして銃を振るうが、二人が鬼達を倒すのを上回るスピードで次々に新たな鬼達が召喚されていく。

「斬岩剣！」

「フッ……！」

太刀が月明かりに煌めき、銃声が静まりかえった森に響き渡る。

「なぜ、奴らはこんなに召喚できる！？」

「わからないな。おそらく何かを媒体にしているんだろうが、こうも鬼達が多いと術者が見えないな」

二人の少女はお互いに背を合わせるように立ち、眼前の鬼を見据える。その顔には疲労の色が浮かんでいる。

「これならこいつの出番はなさそうだな」

その二人の様子を窺う侵入者二人は顔を見合わせる。そしてその視線の先には一人の少女が鬼に掴まっていた。その瞳は混濁していて正気でないのが見て分かる。何かしらの術をかけられ体の自由も奪われているらしく、鬼にその体を捕まれていても叫くことも身動きすることも無い。

この少女は侵入にあたって内通者が寄越した少女である。この少女がいればこの区画を警備する人物達はその動きを鈍らせ、そして効果的な攻撃になるとのことだった。

……当然だろう。この少女は、今まさに目の前で鬼達を次々に葬っている二人の少女のクラスメイトなのだから。

SIDE リアン

さて、これはなかなかよろしくないですね。私の眼下では桜咲さんと龍宮さんが鬼の大群相手に奮闘してますが、このままだと押し切られてしまいますね。お二人の動きは苛烈ですが、僅かに精細を欠きつつあります。倒しては新たな鬼が召喚される。堂々巡りになっていますね。この場合は術者を仕留めるのが一番ですね。

「……………高見の見物とは良い度胸ですね……………ッ!？」

あの二人の術者の近くにいるのは那波さん!？人質…いや、違う。あれは……………。

「っ!？……………この屑がつ!!」

SIDE 三人称

突然空から何かが降ってきた。槍のようなソレは寸分も狂わず刹那と真名を取り囲む鬼達の頭を貫き、全滅させる。突然のことに驚く

刹那と真名。そして、そこにリアンが降り立つ。

「――……」

無言。特に刹那と真名に対して声をかけることもなく、ただ侵入者の二人を睨む。その表情はまさに憤怒の表情である。

「あれは……」

「那波さん!？」

刹那と真名もリアンの視線の先にいる侵入者二人とその側にいる那波千鶴に気付いた。真名はいくらか冷静であるが、刹那は今にも飛びかかって行きそうな勢いである。

「貴様ら、何をしているのかわかってるのか？」

とても普段のリアンからは想像できない口調と声色である。

「ふん。餓鬼が一人増えたところでどうにもなるまい」

そう言って術者の一人が念じると那波の体が輝き、そして新たな鬼

が召喚される……ことは無かった。寸前でリアンが槍を投擲してその四肢を貫いた。

一瞬、まさに一瞬であった。刹那の目には何も見えなかった。真名でさえかすかにリアンの体がぶれたことしか分からなかった。有無を言わせない攻撃。四肢を貫かれた一人はそのまま地に倒れる。

「な、何をしやがった!？」

「喋るな……。耳障りだ」

そして再びリアンが攻撃をしようとするが、その前に残った一人は那波を楯にした。

「貴様!!」

「こいつがどうなってもいいのか？」

そしてそのまま術者は那波の頭に右手をおき、何かブツブツと呪文を唱える。すると那波の瞳は混濁していたものがもとの輝きに戻る。そして術者は那波を放り投げ、倒れている仲間を見捨てて、背を向けて駆け出す。

「逃がすか!」

刹那がそれを追おうと駆け出すが、それは予想外の人物によって阻止される。

「な、那波さん!？」

そう、先ほど術者から解放された那波千鶴その人である。

「さ、桜咲さん……?こ、これは体が勝手に……!」

那波は意識が戻ったようだが、体の自由が利かないようだ。その手にはどこから出したのかナイフが握られ、その動きはとても素人とは思えない動きである。実際、刹那は押し込まれている。予想外の事態と、クラスメイトを傷つけるわけにはいかないということが刹那の剣を鈍らせている。

「あれはどういうことだい？」

「……あれは対象の魂を縛っています。そして先ほどから無限に召喚されていた鬼は、那波さんの魂を削って、力に変換して召喚していました。そして現在も魂、つまり寿命をエネルギーに変えて戦闘をさせられています」

リアンが激昂しているのはこれが原因である。人間の魂というのはそれこそ莫大なエネルギーを秘めている。仮に魂をエネルギーに変

換できるとしたら、その力はどんな一般人でも軽く、ナギ・スプリングフィールドを凌ぐ力を手にすることが出来る。だが、当然魂を変換する以上、寿命を削ることになる。つまり、那波は今、自分の魂を犠牲にしているのである。

「解除方法はないのか？」

「あるにはあります。おそらく私にしか出来ないですけど……」

この術は普通の方法じゃ解けない。それこそリアンが隠している『力』を使うことになる。

「《あれはまだ制御しかねる……。ですが、今はそう言っている場合ではない》……私が那波さんの相手をします。龍宮さんは刹那さんとそこに転がっている屑の処理をしてください」

「……できるのか？」

「出来るできないではなく、やるんです」

「よし。ではいくぞ。刹那！いったん引けー!!」

真名の声に応じて刹那がいったん距離を取り、真名の隣に跳躍する。そして入れ替わるようにリアンが一気に那波へと詰めより、そして……。

「え……？」

その腹部に那波が手に持っているナイフが深々と刺さる。

「ぐっ…！《だいぶ顔色が悪いな…。クソッ、時間がない》…：那波さん。少し辛抱してください」

決して痛みが無いわけではない。ただ今は痛がる時ではない。この術の欠点の一つに、術をかけられた人間が望まない行為を行ったとき、その呪縛がほんの数秒解けるのである。その数秒を利用して、リアンは那波の体と自分の体が離れないように、『拘束鎖（チェーン）』で二人の体を巻き付け固定する。そして一気に目的地へと移動する。後ろで刹那が何か言っているようだが構っている時間はない。真名に全てを任せてリアンは駆ける。

「は、離れて！リアン君！」

移動中も那波の手はリアンの腹部に刺さったナイフをえぐるように動かしている。リアンはナイフが刺さっている部分の組織を魔力で閉鎖して、これ以上の出血を防ぐ。

「《エヴァさん！聞こえますか！？》」

「《どうした？今日は来ないのかと思ってたぞ。今日は森が騒がしい。十分に気をつけろよ》」

「《それよりも別荘に入ってください。お願いしたいことがあります》」

「《なんだ急に…》」

「《魂食者の理をソウル・イーターかけられた人を運んでいます》」

「《……かけられてどのくらいだ？》」

「《およそ10分です》」

「《言っておくが私にもそれはどうにもできんぞ》」

「《そこは私がします。エヴァさんにも手伝ってもらいますが…》」

「《……ふん。急げ、10分ということは時間は残り少ない》」

「《わかりました》」

簡単に念話をして、エヴァにも協力を頼んだリアンはそのさらに速度を上げる。

そして目的地に着いた時には那波の顔色は一層悪くなっていた。呼吸も浅くなっている。しかしその手は未だにナイフでリアンの腹部をえぐるうとしている。

「もう少しです……頑張ってください……」

「ごめ……んな……さい」

リアンも顔色は悪い。組織閉鎖を行ったからといって痛みまで無くなるわけではない。あくまで出血を止めるだけである。痛みは限界を超えようとしていたが、ここで倒れるわけにはいかない。またあの悲劇を繰り返すわけにはいかない。腕の中の少女を死なせるわけにはいかない。彼女は只の一般人。裏の世界の犠牲になる必要はない。

ただその意志のみでリアンは足を進める。そしてエヴァの家のドアを蹴り開ける。この際行儀なんかどうでもいい。

「急げ！……貴様は確か那波千鶴だったか……」

そこには既にエヴァが待ちかまえていた。リアンと抱き合うような体勢の女を見て、すぐさまその正体が21Aの生徒と気付く。会話はそこそこにリアンは那波を別荘へと連れて行く。それを追うようにエヴァと茶々丸、チャチャゼロも別荘へと入る。

「これから私が拘束を解きます。そうしたら茶々丸さんは後ろから

羽交い締めにして拘束してください。……いきますよ『解放』」
リリース

リアンと那波を拘束していた鎖が消える。すぐさま、茶々丸は那波を後ろから指示通りに羽交い締めにして拘束する。茶々丸自身かなりの実力があるので難なく拘束している。

那波と離れたリアンの服は腹部から下が赤く染まっていた。血で幾分か重くなった上着を脱ぎ捨て上半身裸になる。するとナイフで刺され、えぐられた腹部があらわになり。正面でそれを見ている那波は涙を流す。

だがリアンの後ろにいるエヴァは別のものに驚いていた。

「リアン…なんだソレは？……まさか！？」

リアンの背中には背中全体に複雑な魔法陣が描かれていた。そしてその中心にある一際大きな魔法陣は他のそれが黒で描かれているのに対し、まるで血で描かれたような赤い魔法陣だった。その魔法陣が表すものに勘づいたエヴァは自身がはじき出した答えに驚愕する。

「《ありえん…。人間ごときがアレを受け入れられるはずがない…
》」

珍しくうつろたえるエヴァを余所にリアンは胸の前で両手を合わせる。まるで神に祈るように。

「もし、私が暴走したらエヴァさんが止めてください。エヴァさんじゃないと無理でしょうから…」

そして背中魔法陣が動き出す。まるで歯車が動くように複雑に絡み合っている魔法陣が一つの魔法陣となっていく。そして幾重も重なっていた魔法陣が一つになったとき、リアンに変化が起こる。

「ぐ……あああああ……！」

咆哮。何に対するものか分からないがリアンらしくない咆哮がエヴァの別荘に響き渡る。そしてリアンから黒いオーラが立ち上る。同時に腹部の傷から一気に血があふれ出す。ゆっくりと那波へと歩み寄り、そして右手を頭に置く。

「茶々丸さんは離れていてください」

茶々丸が那波の拘束を解いた瞬間にリアンの右腕に立ち上っていた暗黒のオーラが集中し、那波を包む。すると、今までがいていた那波がぴたりと大人しくなった。

「《欠損した器を修復し、同時に魂食者の理の術式を全て吸収…》」

出血は治まらない。だが、リアンは一心不乱に作業を行う。

「マスターあれは何ですか…？」

「……あれは『闇』そのものだ」

エヴァの側へと戻った茶々丸は目の前の光景について尋ねる。

「『闇』ですか？」

「ああ。アンリ・マンユ、ロソ・ノアレ、アーリマン、眠り続ける者、暗黒神など様々な呼び名があるが、闇そのものだ。三千世界、つまりこの世界や平行世界全てに存在する闇。全ての始まりにして全ての終わり。あらゆるものを生みだし、あらゆるものを飲み込む闇だ。お前も気付いているだろう？あのリアンから立ち上る漆黒のオーラそのものに力があることを」

「確かに驚くべき事ですが、あの影のようなものに魔力とも力とも違う未知の力の反応があります」

「あんなものが体にいるなら精霊魔法なんか使えるはずがない。あれは世界が忌み嫌う存在だ。……まあいい。詳しくは後で聞けばいい。茶々丸は私の倉庫からありったけの治療薬を持ってこい。あの出血量は危険だ……」

初見でリアンの力の正体を看破するあたりはさすがといったところだろう。

「《魂食者の理に取り込まれた那波さんの魂のみを取り出し、そして……》」

「あ……」

そのとき、那波千鶴は何かが自分の中に入ってくるのを感じた。異物感でもないただ暖かい何かが……。視界はリアンの手から迸る漆黒のものに覆われているが、僅かに見える足下の血だまりが、自分の状況を嫌というほど思い知らせる。

そのときであつた。暖かい何かとは別に、頭に直接ある映像を流しこまれた。それは一人の少年が一人の女性の胸をその手で貫いる光景だ。貫かれた女性は何故か笑顔だった。対する少年はその小さな体に女性の血を浴び、ただ泣いていた。己が未熟を嘆いているのか、己が殺した人に対して泣いているのか。それは分からないが、那波には直感的にその少年が誰か理解した。

「よし。これでお……わ……り……で……」

さつきまであつた、身を引き裂かれるような痛みはない。視界を覆っていた黒い靄のようなものも消えた。

「《ああ、私は助かったんだ……》」

心のどこかでそう思ってしまった。それは人として当然ともいえる感情である。命の危機を乗り越えたのだ。それが他人によって助けられたとしても変わりはない。だが、そんな那波の思考も目の前の光景を見ては全てが吹き飛んだ。

「リアン……君……？」

そう、自分を助けてくれた少年が血の海に倒れ臥していた。その顔色は土気色で生気が感じられない。

「《私のせい……。私がナイフで……》」

動こうとしても体が動かない。思考ははつきりしているのに、まるで体が動いてくれない。

「《私が、リアン君を……》」

…殺してしまった」

そこで那波千鶴は意識を手放した。

第十話 魔法の世界へ（前書き）

今回の話は繋ぎ程度のものです。

第十話 魔法の世界へ

深い森の中の一角、一人の少年が涙に濡れながらその右手を突き出す。突き出された腕は何かでコーティングされているように輝いていた。その行き先は向かいあっていた女性の心臓。人の手が人体を貫く。なんの抵抗もなく少年の腕は女性の心臓を貫いた。

「り…アン……。辛いことをさせてごめんね…。でもリアンがいてくれて良かった」

「あ……あ………」

「これで……『心』は……こ……こにおい……ていける」

「なんで……。なんで!?!」

「いい?これから前を見て生きるのよ……。決して……振り返っては……だめ」

自身の命の灯火が消えゆくことを感じている女性はリアンと呼ばれた少年に最期の言葉を贈る。

「あなたなら…リアンならできるから………」

「ごめんなさい……ごめんなさいっ！……僕がいたからこんなことにっ！！」

「そんなことはないわ……。人はいつか死ぬ……。私はそれがただ早かっただけ……ゴフッ！」

女性は大量の血を吐き出す。そして目の前の少年の見つめ、愛おしく少年の体を抱き寄せ、耳元でささやく。

「……………」

そして女性はその命を散らした。

SIDE リアン

「っうあああああー！！」

「きゃ……っ」

「はぁ……はぁ……っ。……夢？」

夢……ですか。ここは……。私の部屋？ああ……。そういえば私はエヴァさんの別荘で那波さんを……。

「リアン君……」

「……那波さん……？」

「よかったっ！！」

「うぶっ……」

く、苦しいです……。抱きつくのはいいとしても、顔が何か柔らかいものに挟まれて息が……。

「ぶは……っ！……苦しいです。那波さん」

「あら、ごめんなさい……。でもよかった。三日も目を覚まさないから……」

私は三日も寝ていたんですか……。ということは外ではまだ日が変わるかどうかというところでしょうね。

「起きたか」

「エヴァさん…」

部屋にエヴァさんと茶々丸さんが入ってきました。茶々丸さんは何か箱を持っていますが何をするんでしょうか？

「失礼します」

「…は？いや、ちょ…！？なんで服を脱がそうとするんですか!？」

「腹部の包帯を取り替えるだけです」

なるほど。そう言えばナイフで刺されたんですね。自分のことながら忘れていました。

「よろしくお願いします」

ここは素直に任せましょう。上着を脱いで、あとは茶々丸さんに任せます。

「……私も手伝っわ」

「では、そちらを……」

那波さんどこか変わりましたかね……？なにか依然と雰囲気が違うような……。こう、強い意志を感じるような。

「さて、リアン」

「はい……」

「この馬鹿者が……！」

「痛っ！……！」

エヴァさんの拳骨が頭に直撃しました。……痛い。単純に痛いです。

「おおよその事の顛末は那波に聞いた」

「そうですか……」

「なぜ、敵の前にわざわざ出てきた？貴様なら気付かれずに敵を倒すことなど造作も無いはずだ？」

そうですね。隠密に近づいたのに激情に駆られて行動したのは過ちですね。桜咲さんにああいっておきながら、自分がこうなってしまうのは笑えませんね。

「怒るなどと言わん。だが、軽率な行動は避けよ。お前のやり方次第では、そんな怪我をすることもなかった」

「すみません…」

「分かればいい…。お前はこれが分からない奴ではない。今後は注意しろ」

「はい」

「よし。では本題だ。背中の魔法陣。なぜあんなものがある。あれは人間の手に負えるものではないぞ？」

さすがですね。今回使った力はほんの一部ですが、背中の魔法陣のみで私の『力』の源を看破するのですから。それに私が激昂した理由を聞かないのはありがたいですね。

「これは私も知りません。物心ついたときには既にこれがありました。本格的にこれが使えるようになったのは6年前からです」

「となると、それを刻んだのは…」

「ええ、エヴァさんの予想通りだと思いますよ」

恐らく、これを、つまり『闇』を私に与えたのは私の両親でしょうね。何を考えてこんなものを実の子供に与えたのかわかりませんが

ね。まあ、そのおかげで今回は助かったのだから役には立ってますね。

「なるほどな…」

「これで終わりです…。あと三日ほどは大人しくしておいてください」

「わかりました」

「では行くぞ茶々丸」

「ハイ。マスター」

「どちらへ？」

「なに、すこし学園に顔を出すだけだ。お前も外の様子は気になるだろうから様子見だ」

外では私が那波さんを連れてから3時間といったところでしようか。多分、事態は終結を見せているとは思いますが、気にはなりますね。他にも魂食者の理を受けた人がいるかも知れませんが。仮にそうだとしたら、もう手遅れですけどね…。

「……………お願いします」

「安心しろ。お前の力のことを話すつもりはない。それと、那波には全て話してある。その上でお前がどうするか決める。フフ…、まあ那波はもう決めているみたいだがな…。まあゆっくり養生しろ」

そういつてエヴァさんと茶々丸さんは出て行きました。全てを話したという事は、魔法についても、強いては魂食者の理についてもでしようね。

「……………」

「……………」

さて、何から話し出せばいいんでしょうか。

「「あのっ」「」

「どうぞ」

「リアン君からでいいわよ」

「…気分はどうですか？」

「ええ。とつてもいいわ」

「それはよかった」

私も初めてのことでしたからね。一応理論上は可能であっても実際に魂食者の理を解呪したのは今回が初めてですし、あれを使った事による副作用がでるかもしれませんね。

「ごめんなさい」

「……………」

「私のせいでこんなことになってしまつて」

「那波さんが気にすることではないですよ。私が勝手にしたんですから。それに本来、責任は学園側にありますしね」

「それでも……！」

「終わりよければすべてよし、です。結果として那波さんも私も助かったこれでいいじゃないですか」

「……………わかつたわ」

納得できないのは分かりますが、那波さんは巻き込まただけであつて、なにも恥じることではないんですけどね。

「…魔法についてはエヴァさんに聞きましたね？」

「聞いたわ。麻帆良学園がその魔法使いの組織の本部だつてことも」

「…魔法は秘匿せねばなりません。そして一般人にその存在を知られたときは、その人の記憶を消去することになっていきます」

「……………」

「私としても無理矢理人の記憶を消すのは嫌です。そこで那波さんを選んでもらいます。一つは記憶を消して今まで通り普通の女子中学生として生きていく。もう一つは魔法の世界、こちら側に踏み込むか。知ってしまった以上、魔法の存在を知らなければ通りの生活をすることはできません。この二つの中から選んでください」

「私はどちらも選ばない」

……………は？

「私はリアン君と一緒にいることを選ぶわ」

「…………それが何を意味するかわかっていますか？」

「もちろん。リアン君が英雄の息子ということも、そして魔法世界においては重要な人物だということも。そしてその目的のためには手段を選ばないことも」

「私といるだけで命を狙われることもあるんですよ？」

「そのときはリアン君が守ってくれるんでしょう？……………それに、リアン君ずっと一人でしょ？あの雪の夜から」

「!」

「ごめんなさい。なんでかわからないけど、リアン君に助けてもらったときにある映像が頭に入ってきたの。……小さな男の子が女性を……その……」

これは予想外ですね。まさか私の記憶が流れ込むとは……。あれは誰にも言って無いんですがね。

「……それは私の記憶に間違いありません。私が彼女を殺しました」

初めて人を殺した日。初めて泣いた日。そして初めて、自分という存在を呪った日。

「それを知って尚、私といますか？私は人殺しですよ。さらに殺すこともありますよ。それに那波さんも誰かを殺すことになる可能性もあります。それでもいいんですか？」

「……………（コク）」

意志は確かなようです。何が彼女をかりたてるのか分かりませんが、まあいいでしょう。

「なら、那波さんの意志を尊重しましょう」

「千鶴よ。その那波さんっていうのは壁があるみたいで好きじゃないわ」

「分かりました千鶴さん。これでいいですか？」

「ええ。十分よ」

SIDE 三人称

「マスター。那波さんはどうなるでしょうか？」

「フン。奴の意志どおりなるだろうな。リアンは奴の意志を尊重するだろう。それに那波の存在はリアンにとってプラスになるはずだ」

「なぜですか？」

「簡単なことだ。今のリアンはまるで機械だ。なにが原因か知らないリアンは自分の感情、心無くしている。おそらく意識的にな。あれでは生きているとはいわんよ。さしあたって、那波はリアンの枷をとく鍵といったところかな」

「それでしたら、別に那波さんじゃ無くてもいいのでは？」

「それは無理だろうな。リアンの抱えるものはそう簡単にぬぐえる

ものではない。それこそリアンという人間を包み込むような奴じゃないとな」

「…まるで息子が連れてきた彼女を評価する母親ですね」

「貴様はいつそんなことを覚えた！？（しかし那波千鶴か…あれはなかなかの人間だ。あそこまで芯の通った奴はそうはいない。よかったなリアン。お前にはちょうどいい人間だよ）」

エヴァンジェリンが那波千鶴に何を見いだしたのかは本人にしか分からない。しかし、その様子から察するに、リアンにとって悪いことではなさそうだ。

これから先、リアンと那波千鶴がどのような道を歩むのか。それはまだ、誰も知らない。

第十話 魔法の世界へ（後書き）

この作品を書くにあたり、メインヒロインは千鶴に決めていました。
あの包容力がリアンには必要なんです。

第十一話 一夜明けて

SIDE 三人称

「昨夜の被害はどうなっておる？」

「こちらの被害はありませんが、一般人が9名ほど犠牲になりました。語弊がありますがその9人は身寄りがおらず、社会とも関わりを持ってなかったことは幸いですしょう」

「卑怯だ！一般人を攫い、術をかけ、使い捨てにするとはあいつらは悪魔だ！」

学園側の魔法使いは現在学園長室に集合している。昨夜の警備は衝撃をもたらした。一般人を楯とすることはこれまでも少なからずあったものの、一般人を武器として、しかも使い捨てにするのは初めてである。そして警備に於いて犠牲者がたのも初めてのことがある。

「全部で10ある警備区画のうち9区画で同様の手段が執られました。唯一無かつたのは桜咲刹那と龍宮真名の担当する区画のみです。術の正体は分かりませんが、術に利用された一般人は例外なく最後は死亡しています」

「それは違います」

白のレディーススーツを身に纏った葛葉刀子の報告に刹那が答える。

「私たちの所でもそれはありました。術をかけられたのは21Aの
那波千鶴さんです」

その言葉に啞然とする学園側魔法使い。術をかけられた人間は一人
残らず死亡している。つまり那波千鶴も、子供も今回の一件で死亡
したのだ。

「なんて卑劣な！学園長、これは宣戦布告です！！我らも西に攻め
込みましょう」

一人の教師の言葉に続いて声を上げる面々。雰囲気は最悪である。
現状を把握せず、ただ卑怯だ卑劣だなどと罵るだけである。

「やかましいわ！！まずは現状を把握することが肝心じゃ。考えも
せずに余計なことを口走るでない！！！」

近右衛門の一喝で一気に場が静かになる。

「言っておくが、那波千鶴が死亡したかは分からない」

その静かになった間隙について真名が言葉を発する。

「那波千鶴はほかの者と同様に私たちを襲ってきたが、その直後リアン・スプリングフィールドが連れて行ったため、その生死は分からない」

「彼が!？」

「自分にしかできないといていたがな…」

「うむ……。ではリアン君に事情を聞くのが先決じゃの…」

「その必要はない」

そのときだった。学園長室にエヴァが入ってきた。そして一言告げる。

「那波千鶴は無事だ。ちゃんと生きているぞ」

「それは本当かの？」

「私が嘘をつく理由がない」

そしてエヴァは一人悠々と部屋の中を進み、誰も座っていない近右衛門の正面のソファに腰掛ける。そしてすぐ側に茶々丸が控えている。

「相も変わらず不毛な時間を過ごしているなじじい」

「フオツフオツフォ。これは手厳しいのお」

「ほら、さつさと話せ。この私がリアンの変わりに来てやったんだ。奴に聞くつもりの質問は私が答えてやる」

「リアン君はどうしておるのかの？」

「私の家にいるさ。そこに那波千鶴もいる」

「では昨夜の侵入者の術は何かわかるか？」

「貴様が知らないのか？」

素直にエヴァは驚いたようだ。近右衛門ならおよその見当は付いていると思っていたのだ。しかし、無理もない。近右衛門に挙げられた報告はどれも抽象的で具体性に富んでないのだ。

「まあいい。奴らが使用したのは魂食者の理だ」
ソウルイーター

「フオツ!？」

エヴァの言葉に反応したのは近右衛門只一人である。その他の面々は何の話をしているのか分からないのだ。

「…学園長、魂食者の理とはなんですか？」

その中の一人、力子が近右衛門に尋ねる。

「…うむ。魂食者の理とは、対象の魂、つまり生命力をエネルギーへと変換する術のことじゃ。対象の魂を隷属させ、そのエネルギーを自身の術の媒体とする禁呪中の禁呪じゃ。これに解除方法はなくかけられた者はただその魂が尽きるまで術者にエネルギーを搾取され続けるのじゃ」

「……………なっ!？」

術の正体に驚愕する面々。中には顔が青ざめている者もいる。

「リアン君はどうやって魂食者の理を解いたのかの？」

「答えるつもりはない。答えたら貴様らはそれを利用するだろう？」

「利用とは心外じゃの」

「どこが違う？ 解呪の方法を探るよりそうならないようにするのが

貴様の仕事だろうが。大体、貴様らが附抜けているから今回のような事態になるんだよ」

今回の事件、一番重要なことは、麻帆良に住む一般人が利用されたということである。これが何を意味するか。それは麻帆良内部に既に敵が侵入している、若しくは内通者がいるということに他ならない。

「しかし、それでも万が一に備えて、今回の二の舞にならないようにするためにも解呪方法は知らないと……！」

「黙れよ小娘……。私ですら魂食者の理は解呪できんだ。方法を知ったところで貴様に出来るはずがないだろう」

「だったら、彼を警備に組み込むべきです。人々を守るのは私たち正義の魔法使いの役目です！」

エヴァに高説をしているのは高音・D・グッドマンという女生徒である。

「だから黙れと言っている！ あれほどの術を解呪することが簡単なわけがないだろうが。解呪するリアンにもかなりの反動があるんだよ。それこそ命の危険があるぐらいな。貴様はリアンに死ねと言っているのだぞ。それすなわち、私への敵対宣言と取るが……？」

「マスターとリアンさんは協力関係にあります。そのことをお忘れ

無く…」

「もう話すことはない。後は貴様らで考えるがいいさ」

「それでは失礼します」

エヴァが部屋を出て行く。それに続いて茶々丸も一礼して退室する。そしてその後はなんとしてもリアンをこちらの陣営に引き込むべきという他愛もない意見が部屋を支配するのであった。

SIDE リアン

「はい。あゝん」

「……………あゝん」

「どう？」

「ええ、おいしいです」

さて私は未だ別荘にいます。あれから別荘の中で3日が経過しました。しかし、未だ私は別荘内のベットの上です。そして千鶴さんに

よる手厚い看護を受けています。

「あの、千鶴さん？」

「何？」

「もう大丈夫なんで、起きてもいいですよね？」

「駄目よ。茶々丸さんに看てもらうまでは駄目」

「……分かりました」

跡は残ってますが傷自体は完治しています。ですが千鶴さんが最後に茶々丸さんにもう一度看てもらうまでは起きては駄目と言つのでこの状態のままです。押し切ろうかと思ったのですが、千鶴さんの背後に揺らめくオーラに負けてしまいました……。お尻にネギは勘弁して欲しいです……。

「戻ったぞ」

「お帰りなさい。どうでした？学園側の対応は」

エヴァさんが帰ってきました。

「どうやら全体で9人の一般人が魂食者の理で死んだようだ。学園

側の魔法使いはどうすることもできなかったようだな」

「…まあ当然でしょうね。私しか対処出来ないでしょう」

「解呪方法を教えるだの、リアンを警備に組み込めだの言ってたがどうする？一応私は釘を刺しておいたぞ」

「それは無視します。私には関係ありませんし。それに何度も解呪できるわけではないですし。今回はうまくいきましたが、次もそうなるとは限らないですからね」

「そう言うと思ってたよ。……それで？那波はどうするんだ？」

「千鶴さんの意志を尊重します」

「なるほどな。なら、お前と一緒に面倒を見てやろう。那波もそれでいいな？」

「当然よ。守られてばかりじゃ嫌ですもの」

どうやらエヴァさんと千鶴さんは前もって話をしていたのでしょうか？それが千鶴さんの雰囲気が違う原因でしょうか？

「よし、では明日から始めるぞ。那波は基本から、リアンは『力の制御だな』」

「エヴァさん、これの制御方法を知っているのですか？」

「私を誰だと思っている。ほんのきっかけを与えることぐらいは出来る。あとはお前次第だ」

「そうですか…。ではよろしく願いします」

こうして、私と千鶴さんの本格的な修行が始まりました。

そして、ついに兄がやってきます。彼は私に何をもちたらすのでしょうか？

……………どうせ厄介ごとでしょうね。

第十一話 一夜明けて（後書き）

次あたりで原作に突入します

第十二話 リアン 苦悩の日々？

SIDE リアン

こんにちは。リアン・スプリングフィールドです。あの千鶴さんの一件から日は過ぎ、私の教育実習も開始されました。そしてそれと同時に私の兄。ネギ・スプリングフィールドもここ、麻帆良へとやってきました。……ええ、期待を裏切らない素晴らしく厄介な方です。……まあそれを語るのはあとにして、とりあえず私の近況報告をしましょう。

私は教育実習が始まると同時に、明日菜さんと木乃香さんの部屋を出て、女子寮近くの高層マンションを購入し住んでいます。こういったことにはお金の出し惜しみはしません。引っ越すときは凄く渋られました。ちゃんとご飯は食べていけるのか、一人で寂しくないとか。このあたりはなんとか説得しました。そして今は兄が二人の部屋にいるようです。

私が買った部屋は麻帆良でも高級マンションらしく、その最上階のフロアを一つまるまる買いました。部屋数も多く、広いので非常に住み心地がいいです。研究スペースも取ることが出来ましたし、エヴァさんに教えてもらって私の別荘も造りました。私の別荘とエヴァさんの別荘は繋がっていて、中の転送陣を利用すれば双方を行き来することが可能です。同様の物を部屋にも設置したので、エヴァさんの家まで歩いていかずとも転送で済むようにしました。学校も近くて非常に便利ですが、この事を知った2-Aの皆さんはたまに大勢で遊びにきては騒いで帰って行きます。

そして、それとは別に、千鶴さんがよく部屋に来るようになりました。確かに共にエヴァさんに教えを請うので一緒にいることは多いのですが、それ以外でも普通に居ます。仕事から帰ってきたら飯が並んでいたこともあります。私は合い鍵を渡した覚えは無いんですが。どこから入ってくるのでしょうか。まあいいですけどね。

あと、最近よく言われるのが、良い表情をするようになったのとです。特に教職員の方々によく言われます。私自身ではそう意識している訳ではないんですがね…。

修行の方は順調です。私も『闇』の制御が少しずつ向上しています。以前のように反動が来ることも少なくなりました。この分なら実践で使っても大丈夫でしょう。

千鶴さんなのですが、彼女はめざましいです。もともと才能があったのかあつという間に基本魔法は習得しました。エヴァさんの教え方もうまいのですが、それ以上に千鶴さんの覚悟が凄まじいです。二度とあの日を繰り返さないともいうように鬼気迫るものがあります。おそらく、兄よりも強いでしょうね。……近況報告はこんなところでしょうか。

【リアンによるネギ・スプリングフィールド報告】

ネギ・スプリングフィールド、麻帆良に来たる

やってくれました。来日早々、問題を起こしてくれました。始業の一時前には麻帆良に来て、学園の説明や諸手続をする予定のはず

が、兄が来たのは生徒達の登校時刻です。しかも生徒達に混じって来ました。

その際に明日菜さんに向かって『あなた失恋の相が出てますよ』と言ったそうです。

………本当に馬鹿ですね。

そのあと、それに怒った明日菜さんの服をくしゃみによる武装解除魔法の暴走で吹き飛ばしました。謝罪の言葉もなく、『僕は親切で教えてあげたのになんで怒るの』とでも言わんばかりの表情でしたね。……明日菜さんの制服は兄の給料から差っ引いてもらいました。

その後、学園長室に行ったのですが、兄は住むところすら考えて無かったようです。まさかここまで世間知らずとは思いませんでした……。しかも学園長は何を思ったのか今、現に、目の前で怒っている明日菜さんに兄を泊めてやってほしいと言い出しました。

その後頭部切り落としてやりましょうか。……結局木乃香さんが許可したので泊まることにはなったようです。

そして、本番ともいえるべき2・Aでの挨拶。私は、知らぬ仲ではないので挨拶と言っても担当科目（兄と一緒に英語でした）を話して、改めてお願いしますと頭を下げただけです。兄はいきなり魔法と口走りそうになりました。エヴァさんが私に念話で『大丈夫なのか？』と呆れていました。龍宮さんも同じみたいでしたね。

自己紹介が終わった兄は一部の生徒を除いた人たちにもみくちやにされてました。知ったことではありません。私は被害が出ないように教室の隅の方に避難してました。

クラスの暴走はしずな先生が静めてくれました。その後初めての授

業が始まりました。基本兄が教壇で授業を行い、私がクラスを回って、兄の説明でわからない部分を補足するというスタンスです。…私はちゃんと下準備をしてきましたが、恐らく兄は何も準備していないでしょう。

ー…ええ、授業は予想通りの結末を迎えました。兄は黒板の上に手が届かず、クラスの笑いを取り、挙げ句の果てには雪広さんと明日菜さんが授業中につつま合いのけんかを始めるという始末。私は放っておきました。あえて放っておくことで兄がどんな対応をするのか見たかったのですが、オロオロするだけで何も出来ませんでした。期待通りというか、何とも言えないですね。なんでこんならくでなしが私の兄なんでしょうか？結局、今日の授業は何もせず終わってしまいました。しかもその責任は私にあるという兄。本当に使えませんね。

ネギ・スプリングフィールド、魔法使いとばれた！？

教育実習初日の放課後、兄の歓迎パーティーが行われました。相変わらずのお祭り好きなクラスです。私も参加ですが、私たちの指導教員のしずな先生と高畑さんも参加です。私は兄を囲む和には加わらずにエヴァさん、茶々丸さん、龍宮さん、桜咲さんと千鶴さんの六人で一緒にいました。

あの事件以降、龍宮さんと桜咲さんとの仲が良くなりました。最初は敵視（桜咲さんが）されてましたが、今はそんなことはありません。

歓迎会は無事に終わったのですが、その後が問題でした。マンションに帰ろうとしたところに明日菜さんが兄を後ろに連れて私の所にやってきました。

『リアンも魔法使いでしょ？』

……どうやら初日で兄は魔法使いだとばれたそうです。ここまでくると感心しますね。

ここまで分かっている以上嘘をつく理由はありません。素直にそうですよと答えて、その場は後にしました。本当に厄介事しか起こしませんね。

話を聞くに、階段から落ちそうになった宮崎さんを助けるために魔法を使ったとのこと。その現場を明日菜さんに現認されたようです。そして、そのあとに明日菜さんの記憶を消そうとして服を消し飛ばしたとのこと。宮崎さんを助けたことは評価できます。まあ私には関係ないからどうでも良いんですがね。むしろオコジヨになってもらったほうが静かになっていいかもしれませんね。

ネギ・スプリングフィールド、惚れ薬を作る

本当にやってくれますね。毎日毎日問題ばかり起こしてくれます。今日の授業はまともに進んでいましたが、和訳の問題を明日菜さんに解いてもらった際に、明日菜さんが答えが分からずにいたところ、『明日菜さんは英語が駄目なんですね』と言い切りました。本当に馬鹿ですね。これはさすがに私も黙ってはいません。

~~~~~回想~~~~~

「ネギ先生、あなたは何様ですか？教師が生徒に向かって言う言葉じゃないですよ。皆さんもです。問題が解けないことなんて山ほどあります。あなた方は全ての問いの正解を言えるんですか？第一、授業というのは分からない所を理解するために行うんですよ？」

教室が一気に静まりました。

「問題の答えがわからない。当然です。そのために教師という職業があるんです。その教師が『あなたは できないんですね』なんて言うのはもつてのほかです。そんなことを言うなら教師なんて辞めなさい。あとは私が授業を行いますから問題ないでしょう？」

「で、でも…！」

「まずは謝罪しなさい。言い訳は必要ないです」

~~~~~

このあとネギは素直に明日菜さんに謝罪しました。人に言われてから謝罪するのはどうなんですかね…。

しかし、この程度はかわいいものでした。この翌日にもっと大きな問題が起きました。

あろうことか、兄は明日菜への謝罪として、惚れ薬を作ったのです。惚れ薬の製造は犯罪です。他人の意志をねじ曲げる惚れ薬はその製造そのものを禁止されています。まあ一時的な好意を生じさせる軽易な物は販売されていますがね。しかし、兄が作ったのはそれよりも強力なものでした。結果としてその惚れ薬を兄が飲んでしまい、2-Aは力オスとなりました。2-Aの魔法関係者はレジストしましたが、それでも大半の2-Aの生徒はその影響下になり、兄を脱がしたり、求婚したりと大変な騒ぎになりました。

最終的には惚れ薬の効果が時間経過で消えましたが、その際に学園の備品がいくつか壊れてしまいました。

私が壊したわけではないので放っておきましたがね…。

――…簡単に挙げるとこんなところですかね。そして今、私は職員室で自分の仕事をこなしています。職員室の机の配置としては私と兄は隣同士です。そして兄の横にしずな先生の机があります。私の机の横には誰もいません。

教師という仕事も大変です。授業の年間スケジュールを立て、簡易テストの問題を作成したり、生徒達の評価をしたりと、休む暇がありません。私たちはそれぞれ兄が担任で私が副担任ですのでその業務もあります。教育実習生にクラスを持たせるなんて正気でしょうか？……まあ、心から早めに麻帆良に来て教師の仕事を勉強していて良かったと思います。

それで兄はというと……

「リアン先生、ネギ先生はどこに？」

「さあ…私も把握していません」

放課後になった途端いなくなっています。教師の仕事は授業をするだけだとも思っているのでしょうか？教育実習が始まってからの一週間は慣れてないということもあり、担任業務などは学年主任の新田先生としずな先生がやってくれてましたが、今日からは自分たちですることになっています。その旨の連絡はあったのですが、忘れたんですかね？

私は順調に仕事を進めていて、もうすぐ終わりそうですが、兄の机の上には大量の書類が溜まっています。全てが今日中にこなさないといけない仕事ではありませんが、中には今日までに行う仕事もあります。……私の知ったことではありませんがね。私は私の仕事をこなせば良いんですからね。

「仕方ない…呼び出しますか」

そう言つて新田先生は放送部へと連絡を取ります。教育実習生が職員室に呼び出しを受けるとは傑作ですね。

……結果、学園中に兄を呼び出す放送が流れ、兄は職員室へとやってきました。そして自分の机の上をみて驚いているようです。

「どこにいったんですか？教師の仕事は授業をするだけではない

ですよ」

「知らなかったから仕方ないじゃないか!？」

「知らなかった?ちゃんと今日の朝、新田先生から連絡がありましたよ。忘れたんですか?まあ、頑張って仕事を終わらせてください。私は終わったんで先に帰ります」

兄が職員室にきたときにはもう仕事は終わっていました。自分に支給されたPCをシャットダウンして、荷物を整理します。

「ちよっ!?!リアン、手伝ってよ。リアンも2-Aの副担任じゃないか」

「私は副担任の仕事はしました。担任の仕事はあなたの仕事です。自分に与えられた仕事はちゃんとこなさい。それが社会人としてのマナーです」

だいたい、仕事をほったらかしてうるついているからこうなるんですよ。知ったことではありませんね。自分の不始末は自分でつけなさい。

私はまだ残っている先生方に声をかけて職員室をあとにします。さて、今日は何をしましょうか。兄の存在を気にしなくて良い放課後は実に楽しいですね。

第十三話 リアンと学期末テスト

SIDE リアン

私たちの教育実習も順調？に進み、もうすぐ三学期も終わりです。同時に私と兄の教育実習期間も終わりになります。このまま教員採用となるわけではないでしょうね。多分、これからその説明があるんでしょう。今、私と兄は学園長に呼び出されて、学園長室にいます。

「ネギ君とリアン君には才能あるマギステル・マギ候補生として試験を受けてもらう」

マギステル・マギ候補生？それは兄だけでしょうね。

「この試験に合格したら正式に教師として採用するつもりじゃ。それで試験内容は、今度行われる学期末試験で2・Aを最下位から脱出させることじゃ」

……これはなかなかの課題ですね。学年最下位を独走している万年ドベの2・Aは一筋縄ではいきませんよ。

「え……？そんなことでいいんですか？」

全く兄は現状が理解できていませんね。担任なら生徒達の成績ぐらい把握しておきなさいよ……。簡単にできていれば、私たちよりも経験豊富な周りの先生方が既にそうしてます。

「うむ。二人で協力して頑張るのじゃぞ」

「それなら僕一人で十分です！！」

……は？この人は何を言ってるんでしょうか。学園長の話聞いてましたか？これは私たちの二人に出された課題ですが。大体、あなた一人で何ができるのか不思議です。

「2・Aは『僕』のクラスです。担任の僕が責任を持って最下位脱出をさせます」

ああ、そういうことですか。私よりも自分の方が優秀だと言いたいのですね。全く、安い虚栄心ですね。

「しかしのお、これは二人への課題じゃからそれはできんの」

「なら、クラスを二つに分けて、片方を兄が、残りを私が教えたらいいんじゃないですか」

これなら兄も私に負けないように張り切るでしょうし、それが2-Aにプラスになりますしね。……まあ、兄が私に勝つなんて億に一つもないですね。

「ふむ。それならかまわんぞい」

「決まりですね」

「分かりました。…リアン、僕は負けないよ」

この人は勘違いも甚だしいですね。私たちは実習生とはいえ、生徒達の未来を預かる人間です。それを私より上に立つための手段とするなんて言語道断です。それを理解しているとは思えませんね。ホント、なぜこんなにも常識を知らないのでしょうか？

〈SIDE リアン陣営〉

「はい、これから学期末試験までの期間は、クラスを二つに分けて私とネギ先生がそれぞれ担当することになりました。この方が一人一人にきめ細やかな指導ができますので、わからない部分は遠慮せず質問してください」

早速、2-Aは二つのグループに分けられた。ネギが教えるグループはそのまま教室を利用し、リアンのグループは別の空いている教室を使用している。

グループ構成としては、リアン組は、大河内アキラ、柿崎美砂、絡繰茶々丸、釘宮円、桜咲刹那、椎名桜子、龍宮真名、超鈴春、那波千鶴、葉加瀬聡美、長谷川千雨、エヴァンジェリンA・K・マクダウエル、村上夏美、四葉五月、ザジ・レイニーデいの合計15人、残りの16人がネギの担当である。

この分け方は簡単に生徒達に選んでもらっただけである。ネギに好意を寄せているのとかや雪広、まき絵といった面々は即決でネギの方を選んだ。逆にリアンと関わりのあるエヴァ、茶々丸、千鶴に真名と刹那はリアンを選んだ。あとの面々は単純に雰囲気を選んだようだ。

「では、とりあえず英語の対策プリントを配りますので参考にしてください。自分で言うのもなんですが、結構当たりそうですよ。他の教科についても近日中に配布しますので期待をしてみてください」

リアンは皆に特製の対策プリントを渡す。英語については前々から準備していた。学期末テストの問題を作成する教師の出題傾向を調査して作成したバイブルである。英語の他の教科は現在鋭意作成中であり、明日には完成見込みである。

「この時間は配布したプリントを元に進めていきます。分からないことがあればその都度質問をしてくださいね」

リアンの落ち着いた雰囲気もあってか、こちらの生徒達は静かに勉強を始めた。

＼SIDE ネギ陣営＼

「今度の学期末テストで2-Aが最下位を脱出しないと大変なことになるので（僕が）、大勉強会を行いたいと思います！す！！リアンに負けないように頑張りましょう！」

「『『『『『おおっっ！！』『』『』『』」

静かなリアンに対して、ネギの方はいつも通りである。お祭り騒ぎそのものでも勉強を行う雰囲気ではない。しかも何か意味をはき違えている感じがある。ネギ個人の事情をこの場に持ち込むべきではない。ましてやリアンに負けないようにというのは明らかに必要である。

「ネギ先生！普通に勉強してもつまらないのでゲームみたいにしようよー！！」

「（…確かに鳴滝さんの言うとおりかも。楽しくてなおかつ勉強になれば一石二鳥じゃないか）いいですね。そうしましょうか」

「さっすが、ネギ先生。話が分かるっ！！」

……最早、お祭りである。本来の目的を見失っている以上、ネギとリアン。どちらが教師として優れているかは火を見るよりも明らかであろう。

SIDE 三人称

「それで？何があったんだ？」

「何とは？」

一日の授業が終わり、リアンはエヴァの別荘にいる。そこで闇の制御を行っているため上半身は裸で座禅を組んでいる。そこにエヴァが近づいてきて、今日の授業について尋ねる。ちなみに千鶴は今、茶々丸との組み手を行っている。

「今日の授業だよ。いくら学期末テストのためとはいえ、クラスを分ける必要は無いだろう？」

「ああ、それですか。今回の学期末試験は私と兄の最終課題となっています。課題内容が『2-Aを最下位から脱出させること』です。それを学園長から言われた際に、兄は『自分一人ですみます』と言いきったんですよ」

「それはそれは……」

「兄は自分の方が私より優れていることを証明したいんでしょうね。昔から兄は私の方が座学の成績が上なのが気に入らないようでしたしね」

鬱陶しいとも言おうような口調である。リアンにしてみれば別に兄の方が優秀と言われようが、自分が落ちこぼれと言われようが関係ないのである。人の評価なんて、本質を見ないものが多いのである。現実にはリアンは落ちこぼれといわれているが、実際はネギよりも遙かに優秀である。リアンもそれは自負している。だが、リアンにとってはそんなことはどうでもいい。リアンの目的はウェールズの村の人々の呪いを解くことただ一つである。

片や兄のネギは、妄信的に父を追っている。自分も父のような立派な魔法使いになるんだと。すでに相容れない道を歩んでいるのでリアンはネギのことなど気にもしていない。ただ、ネギが突っ掛かってきているだけである。

「まあ、自分の力不足を思い知らせるにはちょうど良い機会ですがね」

そう言っただけでリアンは制御に集中した。ただ、瞑想するだけだが、その背後には以前同様漆黒のオーラの様なものが漂っている。だが、それも煙の様に立ち上っているだけなので、害悪はないと判断できるし、上手く行っているのだと想像できる。

一方の千鶴はというとその長い髪を纏め結び上げ、茶々丸との組み手をまだしていた。元々武道の経験もない普通の女子中学生だった

のでその動きはぎこちなさが残るが、それでも最初と比べたら図分と良くなっている。

「はっ！」

繰り出されるのは右の拳。しかし茶々丸は特に交わしたりせず、自身の左手で受け止める。お返しとばかりに繰り出した茶々丸の頭部を狙った蹴りは千鶴が上体を反らすことによって交わした。

この二人の組み手は実戦的とはいえない。スピードもどちらかというが遅い。一つ一つの動作を確認するように行っている。それもそのはず。この組み手の目的は体運びを目的として行っているからである。リアンがエヴァと行うような戦闘ではない。

「…千鶴さん。あなたは何故、ここまでするのですか？」

組み手の合間に茶々丸が問う。

「いきなりね……。私がそうしたいからに決まってるわ」

「その理由は？」

二人は互いに拳と蹴りを交互に繰り出しながら会話を続ける。

「あの子は、リアン君はこのままだといずれ心が壊れるわ。本人は気付いてないでしょうけど、あの子はなんでも自分で背負い込もうとしている。人に頼ることを知らない。今だって彼は私のことなんか見ていない。そんなの寂しいじゃない。人は何でも一人でできるわけではない」

「……………」

「私はリアン君の全てを知っている訳じゃないけど、彼が孤独だということぐらいは理解できるわ。万が一彼の心が限界を迎えたとき、それを受け止める人間がいないと彼は本当に終わってしまう。エヴァンジェリンさんには偽善だと言われたけど、それでも私は彼の、リアン君の側に居る。例えば茨の道だとしても。それが私の恩返しよ。彼の過去を見てしまった以上後、戻れないわ。それに、命をかけて救ってくれた男の子だもの。そんな勇姿に女の子は憧れるものよ」

この千鶴の言葉を最後に二人は再び黙々と組み手を続けた。千鶴が見たリアンの過去とは何か？千鶴とエヴァは何を話したのか。茶々丸は知らないが、それでも彼女、千鶴が本気だと言うことは理解できた。同時に自身の思考回路に表現できない違和感を感じた。故障というわけでもない。ガイノイドの茶々丸がその正体に気付くのはもう少し先のことである……。

第十三話 リアンと学期末テスト（後書き）

次の投稿は来週のはじめぐらいを予定しています。

第十四話 リアンと学期末テスト？

SIDE 三人称

「行方不明？」

「そうなんや。明日菜達バカレンジャーとのどかとネギ君が行方不明になってしもつたんや！！」

学期末テストまであと四日と迫った朝、リアンの部屋に木乃香が駆け込んできた。

「その方達は何をしていたのか知ってますか？」

リアンは慌てる木乃香をまず落ち着かせる。そして口ぶりから事情を知っていきうなので聞いてみる。

「実はな図書館島に読むだけで頭が良くなる本があるんや。それでその本を読んで学期末テストで良い成績を取ろうって話になって…」

「（頭が痛くなってきた……）」

「今度の学期末テストで2-Aが最下位脱出しないとクラスが解散になって小学生からやり直して話やから、明日菜達が慌ててもう

て…」

「…それは何の話ですか？そんなことは全くないですよ。そもそも義務教育期間である中学生を小学生からやり直しさせるなんてあり得ないです」

「そうなん！？じゃあネギ君が言うてた、『大変なことになる』ってどういうことや？」

木乃香は寮内で蔓延しているウワサがデマであるということに驚く一方で、疑問を抱いた。

「それは、2-Aを最下位脱出させないと私と兄がクビになるということです。だから『大変なことになる』と言ったんじゃないですかね」

呆れたように放すリアン。兄がそんな風に口走っているとは思わなかったようだ。

「（だいたい、読めば頭がよくなる本なんてあるわけじゃないですか。ほんと、そんなものを捜す余裕があるなら死にもぐるいで勉強すればいいものを…）…ところで、図書館島に入る際にちゃんと届け出はしたんですか？」

「それは…」

「…全く、それは立派な不法侵入ですよ。ハア…大体の事情は分かりました。私から学園長の方に報告しておきます。ほら、もう登校しないと遅刻ですよ?」

「ごめんな、リアン君。ウチもこんなことになると思ってなかったんや」

「反省してるならそれでいいです。ただ、何かしらの処罰は覚悟しておいてください。さすがにそれは私でもどうにもできません」

「…うん」

「（朝から面倒なことになりましたね…）」

「新田先生、少しお時間よろしいですか?」

「どうしました?」

出勤したリアンは、まず学年主任の新田に報告することにした。社会人としてハウ・レン・ソウを欠くわけにはいかない。木乃香から聞いた内容を一部始終説明する。当然、魔法の本の下りは省いているが…。学園都市内部、しかも学園施設で行方不明ということもあるが…。

り、いきなり警察へ連絡するわけにはいかない。リアンはまず、新田に報告して、次に学園長に報告するつもりである。

「…それですね、今から学園長にも報告しようと思っていまして、2・AのSHRをお願いしてもよろしいですか？そろそろ時間になりますので」

「わかりました。ではSHRは私が代わりにやっておきます」

朝のSHRを新田に任せたりアンはその足で学園長室へと向かった。

「さて、説明していただけますかね？」

学園長室へ入るなり、リアンはそう切り出した。リアンは今回のネギ達の行方不明、近右衛門が絡んでいると予想している。こういつたときは下手に探らず、正面から聞くのが上等である。

「何のことかの？」

「学園長が例の噂を流したんじゃないんですか？」

「ウワサについては想像もつかんが、ネギ君達は無事じゃよ。ちゃんと確認しておる」

「（やはり、学園長の仕業ですか…。私はウワサのことしか尋ねないのに、勝手に喋ってくれましたね。大方心配になったと思ってるんでしょうね）…私はウワサのことしか尋ねてませんが。その口ぶりだと全部ご存じのようですね」

「フオツ!？」

「まあいいでしょう。それで？すぐに帰ってこれるんですかね」

「こちらに戻ってくるのはテストの前日になるはずじゃ」

この近右衛門の言葉にリアンは大きな溜息を吐く。

「じゃあ、その間の仕事及び授業への出席はどうするんですか？無断欠勤に無断欠席。容認できるものではないですよ。それに兄は担任の仕事が溜まりに溜まっています。これ以上溜まる様であればクラス運営はおろか、学校運営に支障をきたしますかね」

ネギも幾分か慣れてきたとはいえ、未だ一人で担任業務全部を処理できる訳ではない。ただでさえ溜まっているのに、今日から三日も手を着けなければどうなるかは目に見えている。

「ネギ君の仕事についてはリアン君に頼みたい。リアン君は副担任じゃから担任が不在の時は担任業務もこなす必要があるじゃろう？それにネギ君達については公欠扱いにする」

予想通りである。ここまで予想通りの展開だと逆に怖くなるほどである。

「言っておきますが、私は勝手にいなくなった兄の尻ぬぐいなんてするつもりは一切ありません。明らかに支障をきたしかねない業務しか行いません。それに公欠扱いをするなら今日から三日間、全年クラスの授業を自習にして、テスト勉強の時間にしてください。そうじゃないとフェアじゃないです。みんなは普段通りの授業を受けてつつ、必死に努力してるのに、自分勝手な行動をして迷惑をかけている人たちが授業すら受けずにのうのうと一日中テスト勉強しているのはありえないですね。教育者としてあるまじき姿です」

一気に捲し立てるようにリアンは告げていく。

「甘やかすのもいい加減にしてください。自分で課題をふっかけておいて助力をするなら、最初から課題を出さないで欲しいものですね。それでは己の本当の力に気づけませんよ？ただでさえ、兄は甘やかされて育ってるんですからね。ではそういうことで失礼します。……学園長の行動次第では私は事の一部始終を全職員及び全生徒に公表します。子供の戯れ言と思わないことですよ」

そう言ってリアンはポケットからボイスレコーダーを取り出す。こ
こでの会話の一部始終は録音されていたのである。

「それと、兄たちの行動は明らかな犯罪です。処罰は当然受けなけ
ればなりませんよね？」

そう言い残してリアンは学園長室を後にした。

S I D E リアン

「慣れないことはするものじゃないな……」

全く、朝から疲れましたね……。しかし、これからどうしましょうか。
私が担当する15人はいいですが、兄が担当していた残りの生徒達
をほったらかしにするわけにはいきませんしね。

「仕方ない……。クラスを元通りにしますかね。担任の仕事は期限が
迫っているものについてのみ私が処理しましょうか。あとは知った
事じゃないですね」

直接学園長が、事の全てが自分の計画と喋ったわけではないですが、
一応の言質は取れたからまあよしとしましょう。話の流れで今回の

件は学園長の関与が濃厚であると判明しましたし。

「さて、とりあえず授業の準備をしますかね。事情はS H Rで新田先生が上手く説明してくれたでしょうし」

馬鹿な兄のことは放っておいて私は自分の仕事をしますかね……。バカレンジャーのみなさんも大丈夫でしょう。とりあえずテストさえ受けてくれれば、あとは他の皆さんでカバーできます。兄の方のグループがどのくらい勉強できているのか知りませんが、私のグループは全員成績アップすることは間違いないでしょう。

「ホント、自分で出来ると言っておいて、全然出来てないじゃないですか。出来ないのなら最初からできないと言えればいいものを……」

これを機に、新田先生あたりに担任を変えてくれと言いますかね……。あんな兄が担任だと生徒達の人生を無駄にしかねないですからね。

第十五話 リアンと学期末テスト？

SIDE 三人称

「遅い……」

リアンは一人苛ついていた。今日は学期末テスト当日である。生徒達は最後の足掻きと言わんばかりに、登校中やSHRと一限開始時刻の合間のわずかな時間をも利用して勉強に励んでいる。もちろんいつもお祭り騒ぎの2・Aも同様である。

ネギ達が行方不明になった翌日、つまりリアンと近右衛門のやりとりの後の最初の授業に於いて、リアンはウワサの真相を話した。リアンとしてはこんな自己都合を生徒達に放すつもりはなかったのだが、変な勘違いをして、明日菜達のような行動を起こされてはいけないので、やむを得ず話した。

その結果、雪広がクラス全体に発破をかけ、どんなことがあってもネギ先生をクビにはさせないと張り切ったのである。動機は不純であるが、やる気になっていいるのはいいことである。

そんなこんなでテスト当日を迎えたのだが、当の行方不明組はまだ登校していないのである。もちろんネギもまだ出勤していない。そしてテスト開始を告げるチャイムが鳴り響く。その時であった。

「……………遅れるー！！……………」

「みなさん、もう少しです。急いでください！」

リアンの眼前約100メートルあたりに一人の少年と六人の少女が必死に駆けてきている。その正体は件のネギとバカレンジャー+1である。そこに何故か早乙女ハルナも加わって合計8人となっている。

「完全な遅刻です。何をしてるんですかあなた達は…」

目の前で息を切らしている全員にリアンはそう告げる。内心、ここがテスト前日に帰ってくるんだと、学園長への不満を露わにする。

「あなたたちは別の教室でテストを受けなさい」

遅刻組は別室でのテストとなる。これは温情と思うが、このテストを受けないと通信簿が書けないので、生徒全員がテストを受けることになっている。リアンの指示に従って生徒達はすぐに別室へと移動する。そしてそれにネギもついて行くこととするが…

「あなたがついて行く必要はありません」

リアンがそれを制止する。当然である。教師がこれからテストを受ける生徒に付いていく必要はない。

「まず、ネギ先生には説明していただきたいことがいくつかあります。特に、この三日間、一体何をしていたのか」

「それは……」

「話せないようなことをしていたんですか？」

周りにはリアンとネギ以外誰もいない。本来なら二人はテストの間、職員室でいないといけないが、ここはリアンが無理を言って、正面玄関で遅刻者を待つように配置してもらったのである。

「ちゃんと勉強を教えていたよ!!」

「誰にですか？」

「明日菜さん達に決まっているよ」

「では、丸三日間放置されていた、あなたが担当したクラスの半分の生徒は？それに教師としての仕事はどうするんですか？」

「仕方ないじゃないか！図書館島の地下にいたんだから!!」

リアンの責め立てるような言葉にネギは反論する。

「そこですよ。読めば頭がよくなる魔法の本を探しに図書館島へ行ったんですよ？そんなものが存在するはずがありません。夜間の図書館島に無断侵入は立派な犯罪です。生徒達を止めることもせず一緒にいて行つてどうするんですか……。教師ならそこは意地でも止めなさい。そして、なぜ図書館島で三日間も居たんですか？すぐに脱出手段を捜しなさい。あなたたちはこの三日間、無断欠勤無断欠席扱いとなっています」

近右衛門はいろいろと思案したようだが、行方不明となつた面々を公欠扱いとすることはしなかった。リアンが言質を取っていたということもあるが、それに加えて学年主任の新田を始めとした面々が理由もないのに公欠扱いとするわけにはいかないと断言していたのである。このあたりもリアンの考え通りである。

「あなたは教師の仕事を魔法使いの修行の延長と考えていませんか？」

「どこか違うんだよ？僕は卒業課題でここに来てるんだよ」

「だからあなたは駄目なんですよ・卒業課題『魔法使いの修行ではないんですよ。卒業課題になんて書いてありました？』『日本の学校で教師をすること』ですよ。『日本で教師をしながら魔法使いの修行をすること』じゃないんですよ。教師をすることと魔法使いの修行をすることは全くの別物です。そこを混同している時点で現状を把握できてないんですよ」

リアンはいままでの鬱憤を晴らすかのように次々に口撃していく。

「教師という職業は生徒達の人生を左右する仕事です。あなたの行動一つで生徒達の人生を滅茶苦茶にしまうこともあるんですよ？そこを理解しなさい。軽率な行動は慎みなさい。何でもかんでも魔法で解決しようとするな。魔法は万能ではないんです。むしろ危険な力。そうはいはい使って良いものではないですよ」

「それは違う！魔法は人々の為に使う力だよ。お父さんみたいに困っている人がいたらそれを助ける為に使うのが魔法使いの本分じゃないか」

「あなたは麻帆良に来てから人のために魔法を使ったことがありますしたか？あなたは全て自分の保身のために使っているじゃないですか。以前の惚れ薬騒動だってそう。あなたは明日菜さんへの謝罪の為にそれを作った。謝罪するなら誠意をもって言葉で謝罪しなさい。今回だってそう。あなたは最終課題に落ちたくないから魔法の本なんか頼った。そんなものに頼るならなぜ、必死に生徒達に補習とかをしないんですか？あなたは結局自分が楽をするために魔法という力に頼っているだけでしょうが」

「ちゃんと宮崎さんを助けるために魔法を使ったださ！」

「それは褒めるべきですが、その後が問題です。現場を見られた明日菜さんの記憶を消そうとしたでしょうが。魔法が一般人にバレたときにはちゃんと対処手順があります。記憶を消すというのは最終手段です。それを知らず、自分がオコジョになりたくないという理由で一人の少女の記憶を消そうとした。ただでさえ未熟な魔法使いが記憶消去の魔法を使えば特定の記憶以外、つまりその人の記憶全てを消すことになりかねないんですよ。そうなったときにあなたは

責任が取れますか？」

「そ、それは……」

全てをリアンに論破されたネギは次第にその声が細くなっていき、黙りこくってしまった。

「自分の行動がどんな結果を招くか考えてみてください」

リアンはネギに背を向け、職員室へと足を進める。もう遅刻者はいないようだ。

「何をしてるんですか？あなたはあなたの仕事があるでしょう。三日分の仕事が溜まってますからそれを早く処理してください」

その場に立ちつくしているネギにリアンは告げる。

「あなたが三日間不在にしていたことで仕事が溜まって、学年全体にも影響が出始めているんですよ。早くしてください」

この後、職員室に戻ったネギに新田の雷が落ちたのは言うまでもない……。

さて、学期末テストの結果については2 - Aは無事に最下位脱出を果たした。学年全体の3位という結果であった。クラス個人の成績としては全体的に向上していた。特にリアンが担当した半分はかなり成績が伸びていた。

これにより、リアンとネギは正式に教員採用となった。そして、ネギとバカレンジャー+1の処罰に関しては、それぞれ反省文の提出と一ヶ月の部活動禁止、ネギは給料カットという処罰になった。甘い気もするがリアンとしては特に気にしていなかった。

そして変わったことが一つある。ネギがリアンをことさらに避けるようになったのだ。自分の考えを否定されたのが特に気に入らなかったらしい。今まで自分の自分は間違っていない。自分のように行動しないリアンが間違っていると信じ込んでいるようである。これまで甘やかされてきた弊害がここにきて顕著に表れ始めている。

ネギは、今までの自分は何をしても怒られることはなかった。それは自分の行動が正しかったからだ。現に学園長は何も言っていない。タカミチも何も言わない。いろいろ言ってくるのはリアンと、魔法を知らない一般人の先生だけだ。……そうなのか、リアンは僕の才能がうらやましいんだ。リアンは魔法が使えない。僕のように自在に魔法が使えないから、それができる僕がうらやましいんだ。……こう考えるようになっていたのである。

第十六話 才能を（兄）を凌駕する努力（弟）（前書き）

リアン対ネギです。

吸血鬼騒動は起こしません。その代わりの話になります。

第十六話 才能を（兄）を凌駕する努力（弟）

SIDE 三人称

「……はい？」

「だから、お前と坊やが戦うことになった」

学期末テストも終わり、麻帆良学園中等部はまた新学期を迎えることになった。2・Aの面々も最上級生の三年生となった。そして同時にリアンとネギも正式に教員として迎えられた。担任はネギで、副担任がリアンである。……職員室内の話によると、学年主任たちはリアンを担任にと推したそうだが、最終意志決定者である近右衛門がそれを認めず、ネギを担任にしたそうだ。まあ、リアンとしては担任になって仕事が増えるのは嫌だったのでどうも思わないが、他の教師達はうなだれたそうだ。

そして新学期が始まって一週間経った今日。リアンはいつもの日課通り、一日の勤務を終えてエヴァの別荘で修行をしている。今日は千鶴は保母のボランティアのため不在である。リアンが修行を初めて一時間経ったぐらいにエヴァと茶々姉妹が別荘へとやってきて、そう告げたのである。リアンは最初、エヴァが何を言っているのか理解できなかった。

「なぜ、私が兄と戦う必要があるのですか？」

「坊やの強い希望だそうだ。なんでもじじいに直談判したらしいぞ。当初の予定だと私が坊やと戦う予定だったんだがな」

「……ちよつとどちらも理解に苦しむのですが」

「当初の予定では、正式にリアン先生とネギ先生が教員採用となつたときにマスターが二人と戦闘を行う予定でした。これはお二方が麻帆良に来ると決まつた時からの予定です。目的としては自分たちよりも実力が上の存在がいるということを理解させ、これからの魔法使いとしての修行におけるカンフル剤とする。とのことす」

茶々丸が簡潔にエヴァが戦う理由を述べていく。それを聞いたリアンは納得した。確かに漠然とした修行よりも明確な目標があつた方が修行に力が入るのだ。

「それとネギ先生は、学園長に直談判する際に『リアンに現実を教えるためにリアンと戦わせてください』と言つたそうです」

「……何が『現実を教える』だ。何様のつもりですかね」

「絶対二勝ネエノニヨク言ウナ。アノ餓鬼」

「だが、坊やには戦う理由があつたとしても、リアンには理由がないだろう？そこでだ。戦闘を行う見返りとして、図書館島の深部の禁書の閲覧を許可してくれるらしいぞ」

「……ふむ。それはなかなか魅力的ですね」

図書館島には世界でもここにしかない書物が多くある。そしてそれらは一様に図書館島の深部に保管されており、一般人はおるか魔法関係者にすら公開されていない。

「そこまでして私と兄を戦わせたいのは何故でしょうか？」

「坊やに自信をつけさせたいんじゃないか？それにお前は学園の魔法使いの前では一回も戦ったことがないから、お前の実力も見ておきたいんだろうな」

「自信ですか……。つけるどころか、兄は自信の固まりだと思うんですがね」

「ネギ先生は自分が頑張っているのに副担任に過ぎないリアン先生が教員の方々に信頼されているのがお気に召さないようです。それに加えてリアン先生が魔法が使えないから、自在に使える自分からやましいのだと思われるようですね」

「なるほどね。だから現実を教えるですか……」

リアンはこう予想した。魔法を自由に使える自分の方が優秀だと私に思い知らせたいのだと。そのためには戦闘を行い、私を自由自在に使える魔法によって打ち負かすことが一番だと。

「まあ良いでしょう。その申し出を受けましょう」

「ルールは相手を致死に至るような攻撃をしないこと。それのみじや。審判は儂が務める。異論はないの」

「はい！」

「ありません」

リアンが申し出を受けた翌日。リアンとネギの模擬戦は今、まさに行われようとしている。舞台はさすがに麻帆良とするわけにはいかず、学園が所有するダイオラマ魔法球の中で行われることになった。なお、この模擬戦を観戦するのはエヴァと茶々姉妹、そして高畑と審判を務める近右衛門のみである。リアンは遠くで観戦している者達に気付いているが、ネギは気付いてない様子だ。

父からもらった杖を構え、これからの出来事を想像して目を輝かせているネギと、ただ静かに佇んでいるリアン。対照的な二人である。

「では………始め……！」

近右衛門が開始の合図を発する。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。光の精霊19柱。集い来たりて敵を撃て。『魔法の射手・連弾光の19矢』！！」

ネギが放った魔法の矢はリアンに向けて一気に飛来する。そしてリアンが立っていた地点にそれが降り注ぐ。

「これなら……」

その光景を見てネギは勝利を確信するが……

「どこを見ているんですか？」

その背後にリアンはいた。特に衣服の乱れもなく、息一つ切らすことなく立っていた。

「くっ！ラス・テル・マ・スキル・マギステル。風精召喚。剣を執る戦友」

それを確認したネギはすぐさま次の魔法を行使する。風の中位精霊による複製が8体。それぞれ手に持っている剣でリアンに襲いかかる。

「そんな!？」

しかし、襲いかかった風の精霊は無手のリアンにことごとく殴り、蹴飛ばされる。魔法を使わない純粋な体術のみで。

「魔法を使えるということはそれ即ち強さではないですよ」

リアンはネギに接近して、ネギが反応できるであろう速度で拳を繰り出す。

「仮に最強の魔法が使えても、体術が未熟だところなる」

ネギも慌ててリアンの拳を受け止めるが、次の速度を上げた蹴りは止められず側頭部にまともにそれを受ける。蹴られたネギは地面をバウンドするように吹き飛ぶ。

「逆に魔法が使えなくても体術を極めれば、魔法使いでもたどり着けないような高みに到達できます。あなたは魔法の知識ばかり追い求め、それを行使する自分の肉体を鍛えることを怠った。だからその魔法を取り上げると……」

リアンは先ほどの蹴りの際にネギの魔力封印を行った。

「あれ？ま、魔力が！？」

それに気付かなかったネギは自分の魔力を感じられないことに驚愕しうろたえている。

「どうです？魔力のない体は。あなたは常に魔力により身体能力を強化してますが、それが無くなればあなたの肉体は10歳の子供のそれです。とても戦闘を行える体じゃありません」

「そこまでじゃ！」

ネギの魔力を封印したところで近右衛門が終わりの合図を出した。これ以上の戦闘は無理だと判断したのだろう。事実、ネギはこれ以上戦闘できない。肝心要の魔力を封印されてしまつてはネギに攻撃手段はないのである。故にこの模擬戦はリアンの勝利という形で終わった。

「分かりましたか？これがあなたの力です」

そしてリアンはネギの魔力封印を解除する。当のネギは信じられないといった目でリアンを見ている。ネギもリアンと同レベルの頭脳を有しているので、あの一瞬の魔力封印がどれほどの技術かは理解

できる。ネギに同じ事をやれと言っても絶対に出来ないその技術は、ネギにリアンの方が魔法技術が優れていると認識させるのには十分すぎるものであった。

自分が思い描いていた結果とは大きく異なる結末に、ネギはただ俯くしかなかった。

第十六話 才能を（兄）を凌駕する努力（弟）（後書き）

結構、あっさりと終わらせてみました。

第十七話 ネギの相棒来る

SIDE 三人称

「はあ……」

リアンとの模擬戦の翌日、ネギは一人部屋で溜息をついていた。先日の一件はネギにとって衝撃的な出来事であった。ネギとしてはあの模擬戦で自分がリアンを倒して、自分の方が優秀だとリアンに思い知らせるはずだった。しかし結果はリアンの力をまざまざと見せつけられ、ネギは一撃もリアンに攻撃することが出来なかったのである。

「（リアンはどうやってあんなに強くなったんだろう……。魔法が使えないのに、なんであんなに強かったんだろう。もしかして、誰かに教えてもらっているのだろうか……。そういえばあの後、エヴァンジェリンさんと一緒に帰って行ったっけ）」

朝からずっとこの調子である。この部屋の主の明日菜と木乃香は出払っていて、今ここにはネギしかない。部屋の雰囲気もネギの雰囲気と同じく、かなりどんよりとしている。

「フツ……。何かお困りのようだな兄貴」

堂々巡りをする事幾十回。そろそろ自殺でもするのではないかと思つてしまいそんなほど落ち込んでいるネギに声をかけるモノがいた。

「え？」

「こつちでさあ、兄貴」

ネギは誰に声をかけられたのか分からず部屋の中を見渡すが、人影は全くない。するとどうだろう。なんとその声はネギの足下から聞こえてくるのだ。

「ああゝゝっ！！カモ君じゃないか！？」

「お久しぶりです。兄貴！！」

そこにいたのは一匹のオコジヨであつた。喋るオコジヨとはなんとも珍妙な生物であるが、どうやらネギとは旧知の仲のようである。それもそのはず、ネギとこのオコジヨ、名をアルベール・カモミールというが、このオコジヨが罾にかかっているときに助けたのがネギなのである。その件以降、このオコジヨはネギを兄貴と慕うようになったのである。

「なんでカモ君が日本に居るの？」

「兄貴の為にはるばるやってきました！」

ビシッと敬礼するオコジヨ。それに感動するネギ。どこの三文芝居だろうか。だが、さっきまでの鬱な雰囲気はなくなった。

その頃、リアンは一人図書館島の深部に來ていた。ネギとの模擬戦闘の報酬というが見返りとしてここへの立ち入りを許可してもらったので、早速やってきたというわけだ。

「へえ…。これは凄い」

目に付く本全てが初めて見る本ばかりでリアンは久しぶりに興奮していた。これだけあればどれかに石化のことについて書いている本もあるはずだ。持ち出しを許可されなかったのは残念であるが、見るだけでもよしとしよう。

「では、早速…」

リアンは、とりあえず目の前にあつた本から読んでいくことにした。幸い今日は休日であり、予定もない。リアンは今日一日をここで過ごすことにした。

「なるほど…。兄貴の弟はそんなに強かったんですか」

「うん。どうしてあんなに強くなったのか不思議なんだ…」

「そいつは誰かに戦い方を教えてもらっているに違いないっすね」

「だとしたら一体誰が？」

「そいつは…弟さんはだれかと一緒にいなかったですかい？もし、だれかを師としているなら多分、弟さんとよく一緒にいる人間がそこに違いない」

「うん…。リアンとよく一緒に居るのは…」

ここでネギは今日までのリアンを振り返ってみる。特に誰と一緒に行動することが多かったかがネギはリアンの姿はほとんど授業中しかみていない。放課後は自分の仕事をこなすのに精一杯でリアンのことを気にしている余裕がないのだ。しかし、その僅かな記憶でもある程度の人物は絞れた。

「ウチのクラスの那波さんやエヴァンジェリンさんに茶々丸さんとかとよく一緒にいるけど…」

その言葉にカモは目を見開く。

「あゝ兄貴…。エヴァンジェリンって…」

「エヴァンジェリンさんがどうかしたの？」

カモはエヴァンジェリンという名前に聞き覚えがあったが、ネギは違うようだ。

「兄貴、そのエヴァンジェリンって知る人ぞ知る有名人だぜ!？」

「ええっ!？」

カモはネギのパソコンからまほネットに接続して一つの情報を表示させる。

「こいつで間違いないかい？」

「うーん。この人だよ」

「ほら、兄貴ここを見てくれ。15年前までは600万ドルの賞金首だった奴だ。闇の福音と呼ばれ、恐れられた真祖の吸血鬼。最強の魔法使いの一人っすよ!!」

「ええええええええ!!??」

この日一番のネギの絶叫が部屋に響き渡った。あまりの音量に近くにいたカモは耳鳴りが治まらない様子だ。

「なんでそんな人が、麻帆良で学生をやってるのさ!？」

「俺っちもそこは知らないが、こんな話は聞いたことがある。闇の福音エヴァンジェリンは極東の日本という島国で兄貴の父親『サウザントマスター』に倒されたってね…」

カモの言葉にネギは一瞬思考を停止する。そしてあることに気がついた。

「…ってことはお父さんのこと何か知ってるかも!？」

父親の名前がでた瞬間、今まで考えていたリアンのことなどどこかに飛んでいってしまったようだ。だからこそ気付かない。エヴァンジェリンがナギと出会ったのは15年前で、ネギがナギと最後に会

つた6年前よりもさらに昔のことであると。故に行方など聞いても絶対に分らないことも。しかし、ネギは止まらない。父の杖を持つて、部屋を駆けだした。制止をする力ものことなんか眼中になく、一心不乱にエヴァンジェリンの所へと向かう。

第十八話 ネギと明日菜

SIDE 三人称

「ああゝ暇だ…」

エヴァンジェリンは春の麗らかな日差しのもと、自分の家でだらけていた。今日はリアンはいないので別荘に入る予定もないので、自堕落な生活を送っている。

「マスター、お茶が入りました」

「ああ…」

茶々丸が淹れた紅茶にも特に反応を示さず、テーブルに突っ伏したままである。

「ああ…マスター。そんなにもリアン先生が恋しいのですね」

「ぶふうーっ!!」

茶々丸の突然の言葉にエヴァは飲んでいた紅茶を吹き出してしまう。

「…一応聞いておこうか。なぜそう思う?」

「何故って…。マスターの今の状態はいわゆる恋煩いというものでしょう?」

「誰が恋煩いだ!?!」

「いえ…。リアン先生を相手にするマスターは凄く楽しそうなので、つきりそういうものだ…」

「このボケロボ!いつから貴様はそんな口を利くようになった!?!というかどこからそんな知識を得た!?!」

「それは禁則事項です」

「だあああああつ!?!?!」

エヴァンジェリンの家に於いて最近見られるようになったやりとりである。茶々丸がエヴァをからかう。これまでの茶々丸からは考えられなかった。リアンと出会ったことにより茶々丸は『人間らしくなった』。

「ヨク飽キネエナ…」

エヴァと茶々丸のやりとりを静観するチャチャゼロ。今日もエヴァ

ンジェリン家は平和である。

「ちょっと待ちなさいよ、ネギ!!」

「兄貴!!」

ネギは一路エヴァンジェリンの家に向かっていた。そしてそれを追いかけているのは明日菜とカモである。ネギが部屋を飛び出た直後に明日菜が部屋に帰ってきて、そこでカモを見つけたのである。最初はカモを訝しんでいた明日菜だったが、事情をカモから説明されると明日菜は直ぐにネギを追いかけたのである。カモもまさか明日菜が魔法のことを知っているとは思ってなかったが、ネギと同じ部屋に住んでいるならそれもありえるということもあって、思いの外すんなりといったのである。

「だから待ちなさいって!」

「何を…って明日菜さん!??」

ネギに追いついた明日菜は、ネギの右腕をつかんで急停止させる。

「話はこのオコジヨから聞いたわよ」

「ええっ!？」

「兄貴。今自分が誰の所に行こうとしてるのか分かってるのか？あのエヴァンジェリンだぜ？」

「それでも、お父さんのことを知ってるかもしれないんだよ？」

「だからって、そんなに焦ることはないぜ兄貴。エヴァンジェリンが逃げるわけでもないだろう？」

「確かにそうだね…」

「大体ねえ、あんた焦りすぎなのよ。少しは落ち着いて行動しなさいってのよ」

そう言つて頭をポカンと叩く明日菜。明日菜は基本子供、ガキンチヨは嫌いだったが、ネギはそこらの餓鬼とは違っていた。最初は怪訝に感じていたが、何事にも一生懸命に取り組むその姿は、その認識を改めるのに十分だった。まあ、そんなネギでもリアンと比べるところでも子供になつてしまふのだが…。同い年なのに不思議なものである。

「私もついて行ってあげるからとりあえず落ち着きなさい。いいわね!！」

「は、はい」

明日菜は何故かネギのことを放っておけなかった。どのように言い表したらいいのか分からないが、こう、他人の様な気がしないのである。

こうして、ネギは明日菜とカモと共にエヴァンジェリン宅を目指すのである。

「む……」

茶々丸とのじゃれ合いを終えたエヴァンジェリンは自宅に近づいてくる気配を察知していた。暇だ暇だと唸っていた先ほどの様子はなりを潜めている。基本エヴァンジェリンの元を訪れる人物は少ない。ここ麻帆良でエヴァンジェリンと関わりを持っているのは、学園長の近右衛門とタカミチ。茶々丸の制作者である超鈴音と葉加瀬聡美。最近ではリアンと千鶴ぐらいである。そのどれも違う気配にエヴァンジェリンは一体誰が来たのかと首をかしげる。

「茶々丸」

一言自らの従者に告げると、従者たるガイノイドは無言で玄関へと

向かう。茶々丸も自身のセンサーで人の気配を察知していたので、詳細を話す必要は無い。そして家のインターホンが鳴り響いた。同時に茶々丸が玄関の扉を開ける。

「これはネギ先生、それに神楽坂さん。ようこそいらっしゃいました」

「こゝこんにちは。え、エヴァンジェリンさんはいらっしゃいますか？少しお聞きしたいことが…」

そこで茶々丸は家の中にいるエヴァへと視線を向ける。実際にエヴァを見ているわけではないが、今の一連のやりとりはエヴァも聞いている。そこで初めてエヴァは重い腰を上げて玄関へと向かう。

「私に何の用だ。くだらん話なら帰れ…」

玄関へと出てきたエヴァは一言そう言い放った。

「じゝ実はお父さんのことで聞きたいことが…」

それに対してネギはおどおどした様子でそう答えた。ネギの父親の話、ナギの話ならエヴァも興味はあるが、リアンから奴が生きていることは確認している。それにリアンの話通りネギの手にはナギの杖がある。リアンから聞いた話だと、ネギはナギの行方を追い、ま

たナギの様な偉大なる魔法使いになることを最優先している。そしてネギの側には神楽坂明日菜とその肩に乗るオコジョ妖精。おどおどとした様子ではあるが、ネギのその瞳には希望の色が見て取れる。それと対照的にオコジョ妖精はビクビクしている。以上の情報から、エヴァは的確にネギの思考を推理する。

「（坊やは私に父親の行方を知らないか聞きたいのか…。と言うことは私の素性に気付いたというわけだ。そしてその情報源は肩に乗る小動物。神楽坂は着いてきたただけだな）…話すことは何もない。生憎私も奴のことは知らん」

故にこう答えた。まあ事実である。呪いをかけるだけかけて、そのあと蒸発したんだから行方なんぞ知るわけもない。

「そ、そうですね…」

目に見えて落ち込むネギ。深い溜息をついて肩を落とす。

「それだけか？なら帰れ」

「ま、待ってください。実はもう一つ聞きたいことが…」

ネギ達に背を向けたエヴァをネギは引き留める。

「リアンはエヴァンジェリンさんの弟子なんですか？」

この言葉にエヴァは足を止める。茶々丸も若干驚いているようだ。まさかネギがそこまで考えが回るとは思っていなかったのだ。一応ネギはメルディアナ魔法学校を首席卒業しているので頭が悪いというわけではない。むしろかなり良い方である。…非常識な部分は多々あるが。

「…奴は私の弟子ではない。私は奴の目的に協力しているだけだ」

エヴァはこう答えた。事実リアンは弟子ではない。『闇』の制御については手ほどきしたが、リアンは既に大成しつつある。そこにエヴァの教えが入る余地はないのだ。むしろ、リアンは魔法使いとしては特異な存在であるため、例えエヴァでも、指導することは難しいのである。できることといえば体術などを教える程度である。だが、それも師弟関係というほどではない。

「なら、リアンはどうやってあんなに…」

さらに悩むネギを放っておいてエヴァはその場を後にする。これ以上話すつもりはないとの意思表示である。そして茶々丸も一礼して玄関の扉を閉める。

「兄貴、残念だな…」

「うん…。リアンに勝つにはどうしたらいいのかな…」

「ふっふっふ…。それならいい手がありますぜ」

エヴァの家を後にしたネギ達は来た道に戻っている。落ち込むネギの肩の上でカモは嫌らしい笑みを浮かべる。

「パートナーっすよ。パートナー！。一人で駄目なら二人で相手をすればいいんです」

このカモの言葉にネギは一筋の光明を見つけたように俯いていた顔を上げる。

「そっかその手があつた！…でもカモ君。肝心のパートナーになつてくれる人がいないんだけど」

「それならここにいますよ！！」

「ええっ！？私！？」

カモは明日菜をパートナー候補に挙げる。それが何なのか分からない明日菜であるが、なんとなく厄介な雰囲気を感じ取っていた。

「俺っちの目に狂いはねえ。姉御は肝も据わってるし、兄貴を追いかけたときの足の速さは見事だったぜ。姉御なら兄貴のいいパートナーになるはず！！パートナーになると強力なアーティファクトつてものが手に入る。姉御もこちらの世界に関わってしまった以上、自己防衛の手段は持っているに越したことはないですよ」

「…う、確かにそれはそうね。でもパートナーって何をすればいいのよ？」

「簡単なことよ。兄貴と姉御がキスをすればそれでOKでさあ」

「「ええ〜っ！！??」」

「嫌よ。こんなガキンチョなんか！！他の方法はないの!？」

「そうだよ。キスの他にも血の交換でもできたはずだよ!!」

「なに?他の方法があるなら、そっちでやるわよ」

すっかり明日菜は仮契約に乗り気のようにである。カモとしてはキスの方が都合（お金の面）。オコジヨ妖精は仮契約の仲介をする報酬がもらえるのだ。その報酬は仮契約の方法によって金額が上下する。一番高額なのはキスによる仮契約である）が いいのだが、他の方法でも結局報酬は手に入るの二人の言うとおりの方法ですることにした。

そしてこの日、ネギは神楽坂明日菜というパートナーを得た。同時に神楽坂明日菜。本名アスナ・ウェスピーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの運命の齒車も再び回り始めることとなった……。

第十八話 ネギと明日菜（後書き）

最後はご都合主義になってしまいました。次から修学旅行編に突入します。

第十九話 いざ行かん！古都京都（前書き）

短いです

第十九話 いざ行かん！古都京都

SIDE リアン

「よく来てくれたの二人とも」

現在は学園長室に呼び出されています。もちろん兄も一緒です。ということは何かが起こりますね。ええ、十中八九そうですね。

「実はのお主達にちと頼みたいことがあるんじゃないよ。今度の修学旅行、お主達のクラス2ーAは京都に行くことになっておる」

ちょうど明明後日からです。クラスの面々が私たちに日本の文化を見せたいということとでわざわざ修学旅行先を国内の京都にしてくれたんですね。本来なら自分たちの行きたいところを選択して欲しかったのですが、クラス全体が京都で一致していたので問題はないでしょう。

「しかしじゃ。実は先方が今回の修学旅行の受け入れを渋っておつての……」

「先方って市役所とかそんなところですか？」

「それは違う。先方というのは関西呪術協会。日本古来より存在する陰陽師などの組織じゃ。ここ関東魔法協会と似たような組織じゃ。

実はの、関東魔法協会と関西呪術協会は仲が悪くての、それで今回の修学旅行の引率教諭に魔法使いが故にその受け入れを渋っているという訳じゃ」

実にくだらないですね。修学旅行を通じて何か工作をする訳でもないのに…。自分たちはさんざん麻帆良に侵入しようとしているくせに生意気ですね。

「儂としてもこの問題はどうかしたいと思っておる。そこでじゃ、今回の修学旅行を良い機会として、儂からの親書を西の長に届けて貰いたい。君たちに東と西を架け橋となってもらいたいのじゃ」

面倒ですね…。大体西の長は学園長の娘婿だったはず。こんな回りでいことはせずに話し合いを持てばそれで済むはずですがね。

「わかりました！その役目僕に任せてくださいー！」

「うむ。それとこれはいつも頑張っている君たちへのご褒美じゃが、京都にはサウザントマスターが日本に滞在するときに使っていた別荘がある。この修学旅行でそこを訪れてみるのもいいじゃろう」

「えっ…？ほんとですか！？本当に父さんの別荘があるんですか！？」

「嘘ではないぞ。そのためにもしっかり頼んだぞー！」

「はい!!」

父の別荘というエサで釣り、組織の長から長への親書の受け渡しという仕事をさせることで自信を付けさせる。よく考えていますね。兄にはうってつけのカンフル剤ですね。西の長は確か父の友人の一人だったはず。おそらくそのあたりも学園長は計算に入れているのでしょうか。千鶴さんのこともあって、私としては西にはいい印象がありませんが、ここは私情を持ち込むべきではありませんね…。

「……はい」

「よろしい。親書については後日ネギ君に渡すから、しかと頼んだぞ!!」

頼まれるのはいいんですが、しっかりと引率教諭の仕事をするのが最優先事項なのを兄は理解できているのですかね…。

「……これは何事ですか？」

学園長の話も終わり、一日の仕事を終えて自宅に戻ってきたのです。

が、玄関を空けて、リビングに入ってみると、そこには千鶴さんがいました。まあこれはいつものことなんですが、リビングが服や、
…その…下着で溢れています。

「おかえり、リアン君」

「はい」

「ちょうどよかった。リアン君も一緒に選んでくれる？修学旅行の準備をしてるんだけど、どの服がいいのか迷ってるのよ」

というより、あなたはどこからこれだけの量を持ってきたんですか？そして何故私に選ばそうとする。私も10歳ですが一応男ですよ。異性に自分の下着を見せびらかすような真似は謹んでほしいのですが…。

「ほら、これなんかどう？」

そう言つて千鶴さんは一着の服（下着）を私に見せてきます。

「き、基本的に千鶴さんの好きなものを選べばいいんじゃないですか？男の私の意見より御自身の感性で選んでください」

さすがに面と向かつて直視できません。

「いいじゃない。男の子の意見は参考になるものよ。『いろいろとね』」

…あなたは修学旅行で何をする気ですか。

「千鶴さんなら何でも似合うんじゃないでしょうか？」

私に近づいてくる千鶴さんに背を向けますが、ふり向いたところでフローリングに無造作に置かれてあるモノが目に入ります。…これは計算してるんでしょうか？

「じゃあ、リアン君はどんなのが好きなの？こっちの赤？それともこんなの？」

…最近の私、なんか千鶴さんのおもちゃになってきているような。こんな時は逃げるに限ります。

「すみません！私は別荘に行ってますね！」

敵前逃亡です。名誉ある撤退です。あのままあそこには私の何かが壊れてしまいそうです。

SIDE 千鶴

「あゝあ。行っちゃったわね…」

ふふ。やっぱりリアン君も男の子ね。いつもあんな風に感情を表に出せばいいのに。リアン君は自分の感情を抑えすぎている。あのときの怒りや今のような恥ずかしさ。少しずつだけ感情を表現してくれるようになってきてる。

リアン君はエヴァンジェリンさんにすら自分の感情を見せない。事情を知る私たちにぐらい甘えてくれてもいいのに。

「でも、少しずつだけど進展してるかな」

私だって、自分の下着をこんな男の子の部屋に広げるような真似なんて絶対しない。恥ずかしくてしかたなかった。でも、このくらいの刺激じゃないとリアン君は普段通りの淡泊な反応しかしてくれない。

「ふふふ。顔を赤くして可愛かったわね」

さて今日はこのくらいにしてちゃんと修学旅行の準備をしまし
うか。いつか心からリアン君が笑える日が来るようになればいい
わね。…違うわ。その日を来させるのよね。うん。また明日からも
頑張らしよう。

第二十話 修学旅行一日目

SIDE リアン

「みなさんおはようございます!」

「「「「おはようございます!」」」」

毎度のことながら元気ですね。一応言っておきますが、現在朝の7時です。今日から最大の学生イベントの一つ、修学旅行が始まります。待ちに待った修学旅行ということでテンションが上がっているのは分かりますが、もう少し節度を持っていただきたいですね。直接駅に集合ということですので一般の利用者さんもあるわけですから、驚いているじゃないですか。

「それではクラスごとに割り当てられた車両に乗り込んでください。それと各クラスの委員長さんは点呼をして各クラスの担任の先生に報告してください!」

そして一番はしゃいでいるのは兄というのがみつともないですね…。生徒達からは微笑ましい視線で見られてますが、これはこれで問題ですね…。学園長からの直々の依頼に父の別荘。はしゃぐには十分すぎる理由ですね。それに兄の肩に乗っているオコジョ。どっかで見たとあると思ったらアルベール・カモミールですね。確かあいつは下着泥棒の罪でオコジョ収監所に収容されていたはずですがねえ…。学園長あたりが手引きしたんでしょうか。何にせよ使い魔の責任は主の責任。あの変態オコジョの不始末を兄は責任取れるの

でしょうか。まあ私には関係ありませんがね。しっかり引率教諭の仕事をしてくれればそれだけで十分です。あまり期待はしてませんが…。

「リアン先生…」

「はい。何でしょうか？大河内さん」

「実は亜子が気分が悪いって」

「原因は何でしょうか？」

「肉まんがおいしくて食べ過ぎたんや…」

ああ、あれですか。超包子のみなさんが肉まんを売り歩いてましたね。かくいう私も一つ頂いたんですが、朝に合うように薄味で生地がすこしさくさくとしていてかなりの味でした。あれを食べ過ぎるのは理解できますが…。

「でしたらとりあえず、お水を少しずつ飲みながら席でゆつくりとしてみてください。もしそれでも気分が優れないようならもう一度私に言ってきてください。楽しくてはしゃぎすぎる気持ちは理解できますが、ほどほどにね。今からそんな調子だと最後まで持ちませんよ」

食べ過ぎならたいしたことはないでしょう。私の持っていたミネラ

ルウォーターを渡しておきました。大河内さんに背中をさすられながら亜子さんも新幹線に乗り込みました。

「フハハハッ！これが新幹線か！リアン、お前はこれに乗ったことはあるのか？」

忘れてました。ある意味兄よりはしゃいでいる人が一人いたことを。

「私は麻帆良に来る際に短距離ですが乗りました。快適ですよ」

「そうかそうか。実に楽しみだ。行くぞ茶々丸」

何故か知りませんがエヴァさんもかなりテンションが高いです。てっきり面倒だとか言いながら不承不承参加するものだと思っていましたがこれはびっくり。意気揚々と参加しています。茶々丸さんに聞いたところによると、なんでもエヴァさんは日本の伝統家屋とか仏像といったモノが好きだそうです。つまりそれらの集合体ともいえる、京都・奈良への修学旅行は行きたくて行きたくて仕方なかったみたいですネ。

「大変かと思いますがエヴァさんの制御をお願いします。茶々丸さん」

「畏まりました」

現在でこれなら、現物を見た瞬間のエヴァさんは想像できます。私は教員の仕事もあるのでエヴァさんだけを見ているわけにはいきません。ここは常に一緒にいる茶々丸さんにストッパーとなってもらうのがベストです。

「最悪、アレを使ってもOKです」

「アレ……ですね。分かりました」

とりあえずこれでエヴァさんはOKですね。そして最後にして最大の難関があと一人……

「さあリアン君行きましょうか。あやかがグリーン車を貸し切りに行っているそうよ」

「駄目です。私は仕事がありますから先に乗ってください。私も少ししたら3-Aの車両に行きますから」

千鶴さんです。彼女が最大の難関です。基本的にクラスが暴走し始めたときは委員長の雪広さんがストッパーとなってくれます。そしてその雪広さんが暴走したときにストッパーとなるのが千鶴さんです。そのため千鶴さんが暴走をしたときはそれを止める人がいないためその役目が私に回ってきます。まあ、千鶴さんの暴走は私に対してのみ発生するので別に構わないのですが……

「千鶴さん。みなさんの視線が痛いので離れてください」

そう、千鶴さんがこうなったときの周囲の視線が非常に痛い。現に今も千鶴さんは私と腕を組んでいる状態です。これを見る3・Aの面々は何か黄色い歓声を小さく上げながらこっちを見ています。「あらまあ、お熱いことですね」「禁断の関係!」「これはやはりスクープよ!？」など。思い思いに口走っています。

「あら、残念…」

千鶴さんは腕を放してくれました。ですが、この修学旅行。いろんな意味で無事に終われるか不安ですね…。

「ほら、次はそのカードでいいじゃん」

「ああーっ!? それ、私のお菓子ー!？」

「これが新幹線か!? 素晴らしい。人間はこんなものまで造ったのか!!!」

「ネギせんせーい！先生も一緒にやろうよ！！！」

カオスですね。一応貸し切りにはなっているからいいものの、好き放題しすぎですね。まあ良いんですけどね。どうやら他のクラスの車両も似たようなものみたいです。これも毎年恒例みたいで、乗務員の方々も手慣れた様子で仕事をしています。もしかして彼らはこちら側の人間なんでしょうか？まあ、関係ないですね。一応兄も仕事はしてるみたいですしね。

「しかし、兄と明日菜さんとの間に魔力パスを感じますね…。仮契約でもしたんですかね」

仮に私の見通しが真実だとしたら、兄は自分、つまり『英雄の息子』と仮契約をすることの危険性を理解しているのですかね…。あのオコジョが一枚噛んでいる気がしますし…。

「私の邪魔さえしてくれなければ別に……ん？」

今、魔力の流れが変わった。明らかになんらかの術が行使……

「「「きゃーっ！！！！」」」

遅かったか！……ってカエル？……この程度なら問題ないですね。ほっときましょう。現にエヴァさんも無視を決め込んでますし。ここは兄に処理させて、私は術者を捜しますか…。

「これは陰陽術の一つですね。となると召喚符を使用する必要があるから、術者は近くに……見つけた」

あの隣の車両の販売員がそうですね。あの制服の内側の魔力は別の符ですね。西の術者と見てもいいでしょうね。さて、目的を聞かせてもらいましょうかね…

SIDE 三人称

「ふふふ。慌てとるわ。そりゃそうやるな。いきなりカエルが溢れだすんやからな。後はこの符で親書を…」

3-Aが乗る車両の隣の車両。そこに居る一人の販売員はカエルが溢れてパニック状態の車両を見て一人笑みを浮かべていた。どうやらこの販売員の狙いはネギが持つ親書のようにある。

「親書を…どうするんですか？」

新たに手に持った符をカエル蠢く車両へと放とうとした瞬間、リアンが背後から声をかける。位置関係としては変であるが、リアンはこの販売員の影を媒体として転移魔法を使用したのだ。最近になってようやくモノにできた魔法である。

「なっ!？」

「とりあえず、このお菓子とコーヒーを頂けますか？」

驚く販売員を余所にリアンは普通に車内販売品を注文する。だが、販売員はそれに応えることはない。眼鏡の奥の瞳がリアンを睨みつけている。

「そんなに眉間に皺を寄せるとせつかくの美人が台無しですよ？別にあなたに危害を加えるつもりはないです。まだ何もしてないですしね。とりあえず聞きたいのは、あなた達の目的です。その内容如何によつては…」

ここまで喋って、リアンは一呼吸置く。そしてゆっくりと次の言葉をはき出す。

「潰しますよ…?。」

明確な殺気と威圧感を込めて言い放つ。

「（な、なんやこのガキは！？こんながおるなんて聞いてへんで！？）」

販売員は明らかにリアンの雰囲気飲み込まれていた。同時に目の前の少年が異質な存在であることを理解した。二の句が続かない販売員。この場を離脱しようにもこの狭い車内では思うように身動きも取れない。

「どうしました？話してくれないんですか？」

詰め寄るリアン。後退する販売員。完全に狩る側と狩られる側にわかれている。しかし、ここは新幹線の車内。この場に居るのは二人だけではない。

「ま、待て～～！！親書を返せ～～！」

突然車両デッキの扉が開いたと思ったら、ネギが飛び出してきたのである。何かを追っているようだ。そして、リアンの注意が一瞬ネギに向いた瞬間販売員は、懐から一枚の魔法符を取り出す。

「…準備のいいことで」

販売員が取り出したのは転移魔法符であった。即座にソレを使用した販売員は転移して車両から消えた。逃げられたにもかかわらずリアンは冷静であった。それよりもネギが親書を追いかけていたということは、少なくともあと一人術者がいたということである。

「あれだけ隣の車両で騒いでいるというのにこの車両の乗客はその様子に気付いていませんしね。それと親書を兄から奪っていった式紙は逃げた販売員の仕業ではない。…となると複数人が動いているということか」

面倒だ。言葉には出さないがリアンは見るからにこう思っている。カエル騒ぎも収まったようなのでリアンは3-Aの車両に戻る。ネギは勝手になんとかするだろうと踏んでいるので無視である。

「どうやら逃げられたようだな…」

車両に戻ったリアンにエヴァはまるで一部始終を見ていたかのように話す。さっきまで新幹線にはしゃいでいた人物とは思えない。このあたりの切り替えはさすがといったところだろう。

「たいした術者がありませんでしたので問題ないでしょう。あの程度なら兄でもどうにかできます」

「ふん…。リアンも苦労してるな」

「そう思うなら手伝ってください。一応学園長の目の前で『はい』と言った以上最低限のことはしないといけませんからね。西の術者も大人しくしていればいいものを…」

溜息一つ吐いて、リアンはエヴァの向かいの席に座る。どうやら力エル騒ぎの後始末は源しずながしてくれたようなのでリアンも京都に到着するまで大人しくしていることに決めたようだ。ちょうどそのときネギも3-Aの車両に戻ってきた。

「桜咲さんって…。それに気をつけてくださいって、桜咲さんは何か知ってるのかな…」

ブツブツと一人で呟いている。内容からするに刹那と何かあったようだ。が、リアンには関係ない。そんなネギの様子に溜息を一つ追加する。そしてリアンはこの先の修学旅行にどれだけの苦労が待っているのだらうと想像し、思考の海に沈んでいくのであった……。

第二十一話 修学旅行一日目・？

SIDE 三人称

「……これほどお風呂が気持ちいいと思ったのは初めてですね。風呂は命の洗濯というのもあながち嘘ではないですね」

現在、麻帆良学園女子中等部修学旅行一行は、宿泊するホテルに到着している。今日一日のスケジュールを消化し、あとはホテルで夜を明かすのみである。そしてリアンは自分にあてがわれたホテルの一室で部屋備え付けの風呂に入っている。

備え付けの風呂はユニットバスで、大人が入るには狭く感じる大きさであるが、10歳のリアンに取っては十分なサイズである。このホテルには露天の大浴場があり、そこを利用することになっているが、リアンは背中の魔法陣を見られるわけにはいかないので部屋の備え付けのものを利用している。

首まで湯につかりながら京都に到着してからのことを振り返ってみる。

「今日は清水寺の観光だけだったのになぜ、こんなに疲れたんでしょうね……」

さて、ここで本日唯一の清水寺観光を振り返ってみよう。

まず、清水寺に到着した一行は清水寺の代名詞ともいえる、清水の舞台を訪れた。順路からいってもここが最初に訪れる場所になる。

「おお！！ここがウワサの飛び降りるアレか！？」

「誰か飛び降りれ！！」

「では拙者が…」

「やめなさい！」

「これが清水の舞台か！！素晴らしい景色だ！京都が一望出来るとは！！」

「ああ…マスター。あんなに楽しそうに…」

清水の舞台に到着して早々、騒ぎまくる3-Aの面々。清水の舞台から飛び降りる。これを実行しようとする忍者に、腰に手を当て、踏ん返り返って自分の世界に入っている金髪少女。まさしくカオスである。

3-Aのストッパーである雪広がなんとか飛び降りようとした忍者を制止するが、金髪少女には誰も近寄らない。どうやら下手に近づいて同類に見られたくないようだ。

「はい、みんなで記念撮影をするから集合してね！」

しかし、そんな混沌の場は、しずなの一声でまとまった。そしてそのころのリアンはというと、暴走しかけている千鶴を抑えるのに必死だった。ネギは生徒達談笑していた。

清水の舞台を後にした一行は、バカブラックこと綾瀬夕映の一言、

「ここ清水寺には恋愛成就で有名なところもあるです」

これで青春真つ盛りの女子中学生に火がついた。我先にとその場所へと駆け出す3・Aの生徒達。やはり女の子なのだとりアンは一人納得していたのは別の話である。

さて、綾瀬夕映の言っていたのは清水の舞台を出て、直ぐ左手にある地主神社のことである。ここは縁結びの神様として若い女性やカップルに人気のスポットの一つである。そしてこの境内にある二つの守護石のことを恋占いの石と呼ぶ。

二つの石の間の10メートルほどを、目をつぶって、その石から石までたどり着ければ恋が叶うとされている。

「フフフ…。これで私と某N先生との恋は成就ですわー!!」

「ああゝ!?!いいんちよずるい!薄目にしてるでしょ!?!」

「古今東西あらゆる武術を修めた私にとってこの程度の距離はなんの障害にもなりません!!」

片方の石をスタートに飛び出したのは雪広とまき絵の二人。最初こそゆっくりと歩いていたが、次第にその速度を上げ、今では完全に走っている。そして二人が反対側の石まであと2mほどの地点で二

人がいきなり消えた。……落とし穴である。

「「キヤアアアア！！カエルー！！」」

どうやら落ちた穴の中にカエルがいたようだ。二人は直ぐに近くの生徒に引き上げられた。

「なんでこんなところに落とし穴が…？」

二人が落ちていた落とし穴をまじまじと見つめているネギ。リアンは特に関することなくネギがどういった行動をするのか見ていた。結局、ネギはうーんと唸ったまま、生徒達と一緒に次のスポットへと移動していった。

「こんなときはまず報告でしようが…」

その背中を最後尾で溜息を吐きながら見ているリアン。リアンはスーツと着ているスーツの内ポケットから携帯電話を取り出して、新田先生に連絡をする。生徒がいたずらの被害に遭ったと伝える。そして現場に来てもらうように伝える。

「しかし、この程度のいたずらで何がしたいのか理解に苦しみますね…」

親書が西の長の元に渡るのを阻止したいならもつと直接的に干渉してくればいい。それをせずにこんな搦め手みたいなことをする必要は全くない。まあ、ネギみたいな愚直な人間には効果的ではある。
…こうリアンは考える。

「私もその程度にしか見られていないということですかね」

一人呟く。現在リアンは一人で3-Aの最後尾を歩いている。さっきまで側にいた千鶴は村上夏美と、落とし穴に見事にはまった雪広をいじっている。

そして一行が次にやってきたのは音羽の滝である。これまでの展開から想像は付くだろうが3-Aの生徒はこぞって恋愛成就の御利益がある三つの内の一つに集中している。

「みなさん。他の一般の方もいらっしゃるんですから静かにねがいます!!」

音羽の滝が3-Aの生徒でごちゃついている現状を見たネギは、意外にも教師らしいことを言った。だが、そんなことで止まるなら苦労はしないし、麻帆良学園の教師達も3-Aの対応に苦労はしないだろう。

「こゝこれは!?!」

「すごいおいしい!!」

「いかにも靈驗あらたかな味はっ!？」

「お代わり〜!!!」

水を飲んだ生徒達はその水の味に興奮し、次々にお代わりをしていく。そして……。

「起きてください〜!!!」

音羽の滝周辺には寝てしまった3 - Aの生徒が現れた。酒の匂いがあるところを鑑みるに酔いつぶれてしまったようである。その数はクラスの半数にもおよぶ。それを起こそうとするネギと一部の良識ある3 - Aの生徒。どうやら飲酒がばれたら修学旅行が中止になると考えているようである。

「…またですか」

遅ればせながら現場に到着したりアンはこの惨状?を見て、再び携帯を取り出し新田先生に報告する。そして至急来て欲しいと伝える。電話からものの数分で新田先生が到着した。息があがっているので走ってきたようである。

「何事ですか、リアン先生」

「見ての通りの現状ですが、どうやら音羽の滝の水にお酒が混ぜられていたようで、それを飲んだウチの生徒達が酔いつぶれてしまったようです」

リアンは新田先生が来るまでに屋根の上にある酒樽を見つけておいた。

「なるほど。では私がここの管理者と話をしますので、リアン先生は生徒達をお願いできますかな」

「それなら、無事な生徒達に手伝ってもらってバスに運んでおきますね」

「ええ。それでお願いします」

実に頼りになる。こうリアンは思った。どっかの誰かさんとはえらく違う。その後の関係機関への連絡は新田先生に任せて、リアンは無事な生徒達と共に、酔いつぶれている生徒達をバスへと運んだ。幸い、今日の予定は清水寺の観光を終えるホテルに直行である。

生徒達をバスに運ぶ際に、ネギがリアンに勝手に連絡をしないでくれと言ってきたが、懇切丁寧にネギの行動の問題点を列挙し、真正面から論破してやった。

以上、今日の出来事である。ホテルに到着するとまず、夕食を済ませ、未だに酔っている生徒達を各部屋に押し込んだ後、教師陣は今日の振り返りを行い、明日の予定の確認を行って、解散となった。そして現在リアンは自室で風呂に入っているのである。

時刻はすっかり夜である。就寝時間が近いこともありホテル内も静かになっている。リアンは風呂から上がって京都の山々を一望できる窓辺に立っていた。風呂上がりの体に窓から流れてくる夜風がひんやりと心地良い。

「今日は団体行動だったからいいけど、明日の班別自由行動と明後日の完全自由行動日は注意が必要だな。特に千鶴さんに……。それにしても兄は一人で親書を届けに行くつもりみたいだな。いつ行くのか全く私に言ってきてませんし」

麻帆良学園の修学旅行は全体での行動日というのがほとんどない。日程の大半を生徒達の自主性に依存する形となっている。これはこれで大変だが、生徒達は常日頃学園都市という一種の閉鎖空間で生活しているため、こういった日程が組まれているのである。

生徒達が自由に行動する以上、教師も一力所に留まるわけにはいかない。生徒達が提出した旅程表を見て、生徒達が立ち寄るであろうポイントで生徒達の行動を監督しないと行けない。言い換えれば、教師も仕事という大儀を得て、自由に動き回れるのである。

これがあるからこそ、修学旅行の引率中に、親書を届けるという行動ができるのである。だが、ネギはいつその親書を届けに行くのか

をリアンに言っていない。一応学園長は『君たちに』とネギだけでなくリアンも含めて今回の親書の配達を依頼した。だがネギは自分一人で今回の学園長の依頼をこなすつもりなのだろう。

「まあ、兄と一緒に行動しなくても良いから、こっちは楽で良いんですがね」

ネギは今回の依頼についてかなりのやる気に満ちあふれているが、リアンはその正反対である。どうでもいい些事である。

「大体、西の長って学園長の娘婿ですし、わざわざ親書という形を取らなくても意思疎通は取れるから、形式的なものですし、失敗しても問題ないですね。それにしてもお風呂に入っていて気付かなかったが、いつの間にか侵入者探知用の結界が張られてますね。刹那さんあたりでしょうか。術式は陰陽術のようです」

いつのまにかホテル全体を覆うように探查結界が張り巡らされていた。簡易な侵入者察知用のそれである。

「着眼点はいいいですが、これには欠点が……って言ってるそばからですか」

リアンの眼下で、人のようなものを抱えた着ぐるみとそれを追う、刹那と明日菜がいた。様子から察するにただごとではないようだ。

「桜咲さんが動いているということは、着ぐるみが抱えていたのは木乃香さんですかね…。となると、敵の狙いは木乃香さんの魔力か、それとも西の長の娘という肩書きか…」

眼下で駆けていく者達を見てもリアンは冷静に状況を分析する。とはいっても、一応着替えを始めている。

「しかし、兄はどこに行ったんですかねえ…。ホテル内には兄の魔力を感じませんし」

兄がホテル内にいないことに若干の疑問を抱きつつも着替えを終えたりアンは窓から飛び出す。

「縮地・无疆」

地面に対し垂直に精製した魔力壁を足場に超長距離瞬動で一気に着ぐるみの後を追った。

結論から言うならリアンはあつという間に追いついた。だが、直ぐに参戦するのではなく、状況把握を行っていた。それも現場から1?程度離れた地点で。

「あのときの販売員か…」

いつの間にかネギも追跡に加わっていた。京都駅の大階段の最上段に位置する眼鏡をかけた着物を着崩した女。それを階段の中腹あたりで対峙する、ネギと明日菜、そして刹那。女はその腕に木乃香を抱えている。なんの反応も無いところを見ると何かの術で睡眠状態にしているのだろう。現在、女が起こした巨大な炎をネギが吹き飛ばしたところである。

「もう逃げられないわよ！この猿女！！」

「なかなかしつこいどすな…。猿鬼、遊鬼！！」

女は式神を二体召喚する。ここで追ってきたネギ達を始末することにしたようだ。

「姐さん！！カードを掲げて『アデアット』と唱えてくたせえ！そうしたらアーティファクトが出てきます！！兄貴は姐さんに魔力供給を！！」

ネギの肩に乗るオコジヨ、カモがネギと明日菜に指示を出す。それに従ってネギは明日菜に魔力供給をし、明日菜は言われたとおりアデアットと唱える。

「武器つて、ハリセン！？」

明日菜が喚びだしたアーティファクトは巨大なハリセンだった。カードの絵には身の丈ほどある大剣が描かれているのに、ハリセンが出てきた。基本アーティファクトというのは仮契約カードに描かれているものが呼び出されるのが普通というか当然である。

「…つまりまだ明日菜さんには足りないものがあるということか」

リアンはそれを見て呟く。アーティファクトが完全な状態で喚びだ

せないということはその使用者になにかしら不足しているものがあるということである。

「ちょっと！これのどこが武器なの！？」

「明日菜さん前、前！！」

出てきたものが武器と呼ぶにはファンシーなものなため明日菜は振り返ってネギを怒鳴る。しかしその背後からは女が召喚した猿が迫る。

「このー。着ぐるみなんかに！！」

ネギの声に気付いた明日菜は迫り来る着ぐるみに立ち向かう。二体をそれぞれ刹那と明日菜が担当する形になった。気合一閃。明日菜と刹那のハリセンと野太刀の攻撃はそれぞれ白羽取りされるが……。

「うそ！？」

明日菜のハリセンを受け止めた猿の方が消滅した。

「すーい……い……」

その光景に太刀を受け止められた刹那は感嘆の声をあげる。

「これならいける！刹那さん。この猿は私に任せて、刹那さんは木乃香を――！」

「分かりました――！」

残った猿を明日菜に任せた刹那は一気に階段を駆け上がり、女に接敵する。

「覚悟してもらっぞ。そしてお嬢様を返してもらっぞ――！」

一気に斬りかかる刹那。しかしそれは横から突撃して来た何かに阻まれた。

「この太刀筋……神鳴流か――！？」

「どうも……。お初にお目にかかりやすく。月詠と申します」

ゴスロリの衣装を着た小太刀二刀の少女がペコリと頭を下げる。

「こんなのが神鳴流とは……」

刹那は目の前の少女が自分と同じ神鳴流の使い手であることが信じられなかった。

「では…」

「くっ……!!」

ゆったりとした口調とは裏腹に繰り出される斬撃は苛烈である。刹那の持つ野太刀と月詠の持つ小太刀二刀では手数が段違いなため刹那は防戦一方になっている。同時に事態が自分たちに不利な状況になってきていることを刹那は自覚する。

「ほな、後はまかせますえ。月詠はん。うちはお嬢様を連れていくさかい」

完全に足止め状態の明日菜と刹那を見て、女は木乃香を抱えたままこの場を後にしようとする。

「ふむ。明日菜さんはやはり仮契約してましたか。それと刹那さんは突発的なイレギュラーに弱いということですね。そして兄は…」

リアンがネギを見ると、ネギは詠唱を終えようとしていた。詠唱を

終えるタイミングを見計らいつつ、女に接近している。

「自分の小柄な体型を利用して死角から接敵するとは良い判断ですね」

そして、女が油断している隙をついて、一気に魔法を放つが、女は木乃香を楯にした。

「曲がれー！！」

それをみたネギは間一髪で魔法の射手をそらす。

「捕縛の矢なんだから、そのまま当てても問題ないんですがね…。
さて、私も行きますか」

やはり詰めが甘い。自分の使う魔法についての知識が浅すぎる。ネギは魔法を人に向けて放つ覚悟が足りていない。魔法は人を救うものであって、人を傷つけるものではないと思っているのだろう。リアンはこのままだと千日手になると予想し、自分も参戦すべく移動を開始する。

「石の槍」

しかし、どこからともなく現れた石の固まりがリアンの行く手を遮る。元々直撃コースでは無かったため回避運動を取る必要もなかった。

「どうやら君はこちらの情報以上の力をもっているようだね」

リアンの目の前に白髪の同年代と思える少年が現れた。学生服のようなものを身に纏い、浮遊術を使用しリアンの前方約10mのところに佇んでいる。

「なぜ、そう思うのかな？」

「簡単なことだよ。君は浮遊術とも違うものを使っているからね」

事実、リアンは精製した魔力壁の上に座っていた。一応浮遊術を使用していると見せかける為の措置も施してあるが、それを目の前の少年は一目で看破したのである。

「（ふむ。なかなか喰えない人間ですね…。いや、人形か？）」

リアンは目の前の少年が只者ではないことは一目で理解していた。そして少年に違和感も感じていた。通常の人間の魔力の流れ方では

ない。人工的な流れを感じる。そして展開している魔法障壁は人間の業とは言い難いものである。

「とりあえず名前をお聞きしましょうか」

「フェイト・アーウェルンクスだよ。『落ちこぼれ』と呼ばれているリアン・スプリングフィールド」

「なら私はあなたのことを『人形』のフェイト・アーウェルンクスと呼びましょう」

「へえ…君は面白いね」

「君こそ面白いよ。というか、そこを通してもらっても良いかな？」

「それは無理なお願いだね。僕の役目は君の足止めだからね」

「なるほど。でもその役目はどうやらもう終わりのようですね」

リアンの視線の先では、ネギ達が木乃香の奪還に成功していた。月詠は壁に激突していて、女は何故か全裸だった。そして木乃香を奪還されるや、直ぐに退却をしたようである。

「どうやらそうみたいだ。でも……」

突然少年は距離を詰め、リアンに正拳を繰り出す。リアンはそれを

片手で受け止める。同時に一気に体内の魔力を練り上げる。

「少し付き合ってもらおうよ」

「戦神舞踏曲」

そしてオリジナルの身体強化魔法を発動する。同時にフェイトの腹を蹴り上げるがそれは防がれる。しかし、腹部への蹴りが防がれた瞬間、踵落としが障壁を破壊してフェイトの頭部に直撃する。刹那の二連撃である。蹴り落とされたフェイトはそのまま地面に激突するかと思われたが、ぎりぎりのところで制止した。

「その魔法はただの身体強化ではないね…」

「これを使うのは今日が初めてです。いい実験台になってくださいね」

戦神舞踏曲。リアンが独自に開発完成させた身体強化魔法である。通常の身体強化魔法である『戦いの歌』などは術者の身体を魔力で覆って、その身体駆動を補助・加速させる術式構築となっている。つまり魔力というパワードスーツを着ている状態である。

この点リアンが開発した『戦神舞踏曲』は着眼点が違う。全身の何億という細胞すべてに莫大な魔力を流し込み、細胞レベルでの身体強化を施すのである。そのため常軌を逸したレベルでの身体強化が可能となる。そしてこの『戦神舞踏曲』の最大の特徴は、神経伝達速度そのものを向上させることにある。擬似的に光速に近い速度

での神経伝達を可能にする。

「やるね……」

魔法の類は一切使わない。純粋な肉弾戦を展開するリアン。フェイトの攻撃の予兆を察知し、潰す。詠唱すらさせない。極端な先の先を取る戦い方である。幾重もの障壁をただ力のみで殴り、蹴り壊して肉体に叩き込む。

「（一応肉体に届いてはいますが、おそらくダメージは通ってないですね）」

一方的に攻め立てながらもリアンは自分の攻撃が届いていないことを悟っていた。ここでいったん攻撃を止め、距離を取る。

「体に直接攻撃を淹れられたのは初めてだよ」

「全然効いてないくせによく言います……ね……!」

一呼吸置いた後、再びリアンが攻め立てるが、今度はフェイトも殴られっぱなしではない。徐々にはあるが、リアンの攻撃を防ぎつつある。

「障壁突破。石の槍」

リアンのほんの僅かな攻撃の間隙を縫ってフェイトが石の槍を放つ。障壁突破の付加効果付きである。

「ネット防壁網」

しかし同時に生み出した網に絡め取られ、リアンの眼前数？でそれは停止する。

「そろそろお時間のようです。私も明日に備えて睡眠時間を確保しないといけないので今日はこのあたりで…」

「随分とつれないね…」

「餞別です」

その言葉と同時に繰り出されたのは右ストレート。だが、それにはリアンが身体強化に回していた魔力の全てが込められており、瞬間的に亜光速に達する。

「爆光撃」

光速に迫る拳をどうして避けられようか。フェイトはその拳をまと

もに腹部に受けた。着弾と同時に、凝縮された魔力が爆発を起こす。巻き起こる爆発も拳の一点に凝縮されているのでその威力は凄まじく。さしものフェイトも一瞬でリアンの視界から消え飛んでいった。

「…これは乱発できませんね」

自身の右手の状態を見てリアンは一人呟く。リアンの右手は技の威力に絶えられず、ひどいことになっている。万が一のことを考えて持ってきていた最高級の治療薬エリクシールを懐から取り出し飲み干す。すると瞬く間に右手は元通りになった。

「しかし、フェイト・アーウェルンクスか。エヴァさんと戦っているみたいでしたね」

月夜が照らす闇の中でリアンは一人、強敵の出現に危機感を抱いていた。

一方のフェイトは山の斜面に激突し大きなクレーターの中心にいた。来ていた制服はボロボロになり、リアンの一撃を受けた腹部からは大量の血が流れている。

「…あれで『落ちこぼれ』…か。まさか僕が血を流すことになるのはね」

フェイトはリアンに対する認識を大幅に修正し、リアンを危険人物と認識していた。

「おそらくまだ彼は力を隠している…。まあ僕も人のことは言えないか。次は本気でやって見ようかな」

フェイトは強敵の出現に『心』を踊らせていた。

第二十二話 修学旅行二日目（前書き）

今回はさらっと流します。

第二十二話 修学旅行二日目

SIDE 三人称

「ネギ先生&リアン先生とラブラブキッス大作戦〜!!」

一日の班別自由行動を終え、就寝時間も過ぎたホテルのテレビに3-Aのパパラッチこと朝倉和美が映し出される。そして盛大にタイトルコールを行い、番組がスタートした。

「さあ、いったい誰が新田を始めとする教師の監視をかくぐり、そしてスプリングフィールド兄弟の唇を奪うのか!？」

ノリノリで司会進行を行う朝倉。さて、なぜこんなことになったのかを説明しよう。

班別自由行動を終えた一行は、ただ一人の子供先生を除いて無事にホテルに帰ってきた。子供先生ことネギ・スプリングフィールドは何故か明日菜に担がれてホテルに帰ってきた。何でも熱を出したそうだ。

風邪かと思っていたが、実際は違う。なんと奈良の東大寺を見学しているときに3-Aの生徒の一人、宮崎のどかがネギに告白したのだ。ネギは日本の女性を奥ゆかしいと思っている。そのため、そんな奥ゆかしい女性に告白された以上、英国紳士としては責任を取らなくてはいけない。でも自分は教師でのどかは生徒。教師と生徒の恋愛はタブーであると姉のネカネにも教えられてきた。なら自分はどうしたらいいのだろうか？と悩んでいる内に知恵熱を出したようだ。

そしてフラフラとホテルを出て、散歩をしているところ、トラックにひかれそうなネコを魔法で助けた瞬間を朝倉に目撃された。

「なお、食券トトカルチョにも参加よろしくー！！」

スクープを目撃した朝倉がじっとしているわけがない。魔法を目撃した朝倉はネギに真相を迫った。このときにいろいろあったようだ。

しかし、結果として朝倉はネギの味方となった。そしてカモと意気投合して、今回の騒動へと至る。

「グフフフ…。仮契約の仲介料は一人に付き五万\$。それに兄貴の

戦力増加にも繋がって一石二鳥。俺っち天才！」

「分け前は打ち合わせ通りに頼むよ。カモ君」

「任せとけい！」

ある意味危険な二人がコンビを組んだ。だが、二人に共通しているのは、自分たちの行動が危険きわまりないことに気付いていないということである。目先の欲に眩んだが故の結果である。

「では早速、選手紹介といくよー！！」

「不穏な気配ですね…」

そんな騒ぎが起きていることを知らないリアンは自室でくつろいでいた。しかし結界などの術式に敏感なリアンは違和感を感じていた。

「…これは仮契約の陣？」

意識を集中して魔力の流れを追う。陣はホテル全体を覆うほど巨大なもので、その魔力構成から、仮契約の陣だとリアンは結論づける。

「あのオコジヨの仕業ですかね…」

なんとなく犯人を予想するリアン。そして気分転換にとテレビをつける…

『それではラブラブキッス大作戦！開始〜！！』

画面一杯に朝倉と肩に乗ったオコジヨの姿が映し出された。次には画面を六分割して、3・Aの生徒達がどこぞの蛇大佐のごとくホテルの廊下を忍び足で進んでいく姿が映し出された。

「ホテル全体を覆う仮契約の陣に、この騒ぎ。そして朝倉さんとオコジヨが一緒にいるとなると…」

リアンはテレビの画面に一瞬思考がフリーズするが直ぐに状況把握

に努める。そして答えを導くために現状の情報を統合していく。

「イベントの一環として仮契約の仲介料と戦力確保といったところですか。そして朝倉さんに魔法がバレたんでしょうね」

即座に朝倉とカモの狙いを察するあたり、さすがというべきである。そして改めて画面を見ると参加メンバーは3 - Aの修学旅行班から各2〜3人ずつ出ているようだ。

「一応対処はしておきますか…」

リアンは自分の部屋に結界を構築し、仮契約の術式範囲から隔絶した。同時に人払いの結界も張る。

「私にとばっちりが来ては困りますからね。あれを怒るのは新田先生に任せますか。ちょうど今日の当番は新田先生ですし」

リアンは仮契約ができない。それは精霊の加護がないからか、それともリアンの『力』が関係しているのか定かではない。それでもリアンがこの騒動に対してここまでの対処をするのには当然理由がある。一度、エヴァと千鶴と仮契約をしようとして、魔力が暴走し爆発した経験があるのである。そのとき寸前で気付いたのと、エヴァも千鶴も魔法が使えたので大事には至らなかった。それに、今回の騒動を考えると、仮契約の方法としては『キス』である。教師の身

分を持つ自分が生徒とそんなことをする理由はない。それにいくら10歳の子供相手とはいえ、異性には違いない自分にキスするのはどうかと思っっているからである。

リアンもそのあたりは心得ている。思春期の青春真っ盛りの女子中学生。ファーストキスはやはり、好きな人になりたいと思うのが普通である。

なので、今回は過剰ともいえる対処を取ったのである。それでも自分のことしか対処しないあたり、リアンのネギに対する感情が表れていると見てもいいだろう。

「使い魔の責任は主の責任です」

リアンはホテルの周囲をフラフラと動いているネギの魔力を感じつつ、一人呟いた。

結局、リアンのところにたどり着けた者はいなかった。逆にネギは

というところ、ちゃっかりのどかとキスをしてしまい、彼女との間に仮契約が成立した。このほかに、も式紙による分身体の暴走によりスカードを大量に作る羽目となってしまったのである。そして、この騒ぎに参加した面々はお約束通り新田に見つかって、しばらくロビーで正座の上、説教をされたそうだ。

翌日、ホテルのロビーの一角ではネギが明日菜に責められていた。当然理由は昨日の騒動である。

「あんたはこんなにカード作ってどうするのよ!？」

「ごめんなさい…」

「まあまあ、明日菜。良いじゃんかこのくらい」

ネギを責める明日菜に、責められるネギ。それを仲裁しようとする諸悪の根源の朝倉とカモという図式が成り立っている。そしてそこにリアンが通りかかる。リアンとしても少し確認したいことがあるので、今回はこの渦中に飛び込むことにしたようだ。

「ちょっと、リアンも何か言っただけだよ」

「そういえば、リアン先生も魔法使いだっただよな」

「私から言うことは何もありません。ただ、確認したいのが、明日菜さんは何故兄と仮契約をしたのですか？」

リアンはこれを確認したかった。昨夜の騒動の一件。宮崎のどかが結果としてネギと仮契約をすることになった。これはあくまでもゲームの一環ということで仮契約の趣旨を理解したものではない。しかし、明日菜はリアンもいつしたのか分からなかった。それにその理由も。

「と、とりあえず魔法のことを知ったから、自分の身を守るためにね」

明日菜としては仮契約を行う際に、カモがリアンと戦うときの戦力になると言っていたのは覚えていないし、そもそもそんなつもりはない。カモの口車に乗せられた感があったものの現在では仮契約をして良かったと思っている。

「それに、昨夜のようなこともあったし…」

正直、魔法の世界というものの甘く見ていたと明日菜は実感した。まさか、身近なクラスメイトが誘拐されるとは思わなかった。それに対抗する手段として、アーティファクトというものの必要性をひしひしと感じていた。まあ出てきたのはハリセンではあるが。

「だから、兄貴には戦力が必要なんだよ。姐さんもそこところは理解しているでしょうに」

「お前には聞いていない。耳障りです」

途中で口を挟む力モを一蹴するリアン。

「明日菜さんはとりあえず魔法の世界について理解しているようですね。まだまだ甘いですが…」

とりあえず、明日菜が裏の世界というものの一端を理解している点は評価できる。しかしまだ甘い。魔法に関わる「人の生死に深く関わる」ということである。自分の親友が殺されることもあるし、自分が人を殺すこともある。おそらく、明日菜の認識だどこまでは考えていないようである。

「それに比べてその小動物と朝倉さんは理解していますか？今回のあなた達が起こした騒動がどんな結果を招きかねないか……。魔法の世界に関わるということはいつ死んでもおかしくないということですよ？漫画やアニメの世界のようにファンタジー溢れる世界じゃないんです」

「今の平和なご時世にそんな物騒なことはないよ。リアン先生は心配しすぎだって」

「……忠告はしました。あとは自己責任です。それと、兄さんは自分が仮契約をした人達の責任をしつかり見ることでですね。そのオコジヨも含めて。使い魔の責任は主の責任です。使い魔の犯した罪により、主たる魔法使いが処断された例は多いですよ？」

リアンはやることは終わったとばかりにその場を後にする。そして残されたネギ達と言うと、リアンに場をかき乱されてしまい、明日菜もこれ以上怒るに怒れず、結局解散となった。

そして一行は、激動の修学旅行三日目に突入する。

第二十二話 修学旅行二日目（後書き）

次話が修学旅行編の山場です。

第二十三話 修学旅行三日目 くリアン 暗躍く

SIDE リアン

「さて…」

兄には言うべきことは言いましたし、あとは勝手にしてもらいましょう。とりあえず目的地は関西呪術協会総本山です。

「立方体^{キューブ}。術式構築パターンを『隔絶』に設定」

私の周囲に魔力壁を構築します。言うなれば箱です。そして、術式構築パターンを『隔絶』にします。これは、世界を箱で区切ってその内と外の繋がりを断つ術式です。

これの利点は、箱の内側の存在を、外側にいる者は認識出来ないという点にあります。かなり便利な魔法ですが、これは魔力消費が非常に多く、並の術者ではこれは使用できません。私はこれを使って、今日の日中の、完全自由行動日を過ごすつもりです。教師の仕事については身代わりの分身を用意してます。一枚100万する符でしたが、この性能は素晴らしいものです。

「とりあえず、兄は明日菜さん達と行動するみたいですし、一応エヴァさんに木乃香さんのこともお願いしてますから大丈夫でしょう」

エヴァさんなら、あのフェイトという少年にも対応できるでしょうし。それに日中は一般人の目もあるので派手には行動できないはず。本格的に動くのは今日の夜でしょうね。

「なら、私は先に本山に警告を出しに行きますか」

私が本山に先に乗り込むのは今回の件についての見解を聞くためです。それと西の長という人物を見極める為でもあります。自分の組織の人間がこんな動きをしているのに、関西呪術協会からの連絡は全くありません。学園長が根回しをしている可能性もありますが、自分の娘が拉致されかかったのに行動を起こさないのはさすがに不思議です。あと、あの女術者達の狙いについても把握しているかも知れませんか。

「確か本山はあっちの方角でしたね」

私の姿が全く認識されないのだから、空から向かうことにしましょう。浮遊術で飛んで、超長距離瞬動で一気に向かえば一時間もかかりませんでしょう。

...

...

...

...

...

「思ったよりも早く着きましたね」

浮遊術で高々度へと上がり、超長距離瞬動をすること五回。関西呪術協会の総本山へと到着しました。丸々一つの山を拠点として、その頂上あたりに広大な日本家屋があります。その他にも離れという

ものがありますね。

「解放」

とりあえず、屋敷の門の前で術を解きます。屋敷へは正面から行きます。まあ当然ですね。

「何かご用ですか？」

屋敷の門をくぐると直ぐに巫女の格好をした女性が応対してくれました。

「（ふむ。外からは見えなかったんですがね……。これも結界のひとつですか）麻帆良学園女子中等部で教師をしている、リアン・スプリングフィールドと申します。この長、近衛詠春殿に面会できますか？」

「はい。少々お待ちください」

私の言葉使いが意外だったみたいですね。見た目で人を判断すると痛い目を見ますよ？

待つこと十分。さっきの女性が戻ってきました。

「長がお会いになるそうです。どうぞこちらへ…」

少し意外でしたね。いきなりやって来たのに直ぐに会うとは思いませんでした。少しは手こずると思っていたのですが…。まあ、いいでしょう。

案内されたのは10畳ほどの和室でした。中央あたりにぽつんと座布団があるので、ここに座れということでしょうね。

「お待たせしました」

私が座るタイミングを見計らったように一人の男性が部屋に入ってきました。年齢的には40をこえたぐらいでしょうか。一件穏やかそうな雰囲気ですが、その目は私を見定めるような視線です。

「リアン・スプリングフィールドです。突然の来訪申し訳ありません」

「関西呪術協会の長、近衛詠春です。麻帆良では木乃香が世話になってます。それでご用件は何かな？」

とりあえず挨拶。そして詠春さんは私の目の前まで来て、腰を下ろします。さて、試させてもらいましょうか。

「私は無駄な話が嫌いなので単刀直入に言います。一昨夜の一件。あなたはどうか捉えておいでですか？」

「…あれは彼女、天ヶ崎千草の独断によるものです。関西呪術協会の意志ではありません」

把握はしているようですね。

「しかし、その口ぶりだとその天ヶ崎千草というのは関西呪術協会の所属で間違いないようですね。独断と断定するのは結構ですが、あなた方は何も行動を起こさないんですか？特にあなたは自分の娘が利用されかけているのですよ？」

まさか10歳の私にこんなことを言われるとは思ってもしないでしょうね。組織が一枚岩でないというのは理解できます。麻帆良も実際はそうですし。しかし、組織の意向に沿わない行動をする輩を放っておくのは愚の骨頂。

「確かに彼女は魔法使い達に恨みを持っていました。しかし、だからといってこんな行動を起こすとは思っていませんかった」

「…まあ、このあたりをネチネチ言いつつもりはありません。ですが、

これからはどうするんですか？実際に行動を起こした以上、何かしらの対応は必要だと思いますが？」

「確かにそのとおりですが、生憎、こちらの手練れの者は出払ってしまして、招集しても早くて明日にならないと……」

この人は駄目ですね。戦闘力は凄いのでしょうけど、政に関しては論外です。

そもそも、修学旅行で木乃香さんが京都に来る、しかも英雄の息子二人と一緒に。こんな状況、魔法使い達に恨みを持つ人間からすればこの上ない好機です。強硬手段にでる人間もいるでしょう。現に出ますが……。

英雄の息子、次代の英雄候補とはいえ未熟な見習い魔法使い。それがわざわざこちらに飛び込んでくる。始末するにはちょうど良いです。このくらいの事態はすぐに想像できます。

そして万が一それが実行されたとすると、間違はなく西と東の戦争に突入するでしょう。西の一部の強行派の行動とはいえ、関西呪術協会の人間には変わりないのですから。

……となると人員を用意して、なにかしらの対策をこの修学旅行期間中は講じる必要があります。これは学園長もそうですが、事態を楽観視しすぎですね。

「人手が足りないから何もできないというわけですか」

「ええ……。しかし、幸いなことに一昨夜の件はネギ君と刹那君が対処してくれました」

そこまで把握してるんですね。ですが、あの白髪の少年のことは把握してないようですね。

「天ヶ崎千草の手勢はそれほどの力ではないようですので、こちらの人員が到着するまではそちらでの対処をお願いしたい。こちらの手勢が到着次第、彼女の身柄確保にあたりますので…」

……この言葉を待つてました。

「現状それしか手だてはないんでしょうが、関西の内部のごたごたに、何故私たちが協力しなければいけないんでしょうか？そんなに協力が欲しいなら、学園長に応援の要請を出せばいいじゃないですか。修学旅行中の私たちに頼む問題ではないですね」

「しかし、それでは時間がかかります。そちらにはネギ君や刹那君も居るのですから…」

なるほどね…。これには学園長も関与している可能性が濃厚ですね。この場で兄の名前が出てくる必要はない。この程度の障害を見越しての今回の親書となるわけですか。恐らく、詠春さんは木乃香さんが巻き込まれていることは心配していますが、実際に兄と護衛の刹那さんがそれを退けたから大丈夫だと思っっているんでしょうね。…

…甘い。甘すぎます。

「何の見返りもなく協力を依頼できると思っているのですか？さつきも言いましたが、こちらは修学旅行中に巻き込まれた、いわば被害者です。そのところをちゃんと理解していますか？あなた方が組織内の異分子をほったらかしにしておいた結果がこれです。自分たちの都合ばかりを押しつけるなんていいご身分ですね」

子供だからと思って舐めるなよ……。第一、なぜ末端の私にそれを言うのか理解できない。

「等価交換という言葉を知ってますか？何かを望なら相応の対価を用意してください」

……さあ、何を差し出しますか？

「……それなら、君たちの父親、ナギの別荘を案内しましょう。そ

れとそこにあるものを自由に持って行ってもらってかまいません」

SIDE 三人称

「……舐めてるのか？」

リアンの纏う雰囲気が変わった。そこには年長者を敬う態度など微塵もない。詠春もリアンの変わりように驚いている。さっきまで理知的に話していた人物とは思えない。そしてリアンはおもむろに立ち上がる。

「この京都に、ろくでもない父の別荘があるのは知ってる。だが、それはあんたのものではない。父がいない以上、その相続は私と兄にある。私に所有権があるものを対価として差し出す？ふざけるのもいい加減にしろよ」

詠春が見誤った点は大きく二つ。まずはリアンを10歳の子供だからと甘く見ていたこと。次に、リアンもネギと同じように父親のこ

とを思っていると認識していたこと。この二点である。まあ、両方とも必然的に情報が少ない関西としては仕方ないとはいえ、それ前提で話を進めた詠春の手腕は稚拙と表現するに相応しい。『名監督、名選手にあらず』と言われるように、戦争の英雄と呼ばれた詠春が、優秀な組織の長というわけではない。立ち上がったリアンはそのまま部屋の出入り口へと向かう。これ以上話すことはないということだろう。

「（これ以上話しても無駄ですね。ならば……）」

リアンは詠春という『政治家』の器をしかと見た。その上で埒があかないと判断した。リアンにも当然狙いがあった。リアンとしては協力の見返りとして、ここにある陰陽術の秘伝を見せてもらうつもりだった。最近石化の研究に行き詰まってきたリアンは、西洋魔法とは違う、日本古来の陰陽術を研究に取り入れようと思っていたのである。もちろんいきなり見せてくれるとは思っていない。

「（まさか、ここまで使えない人間だとは思わなかったな。所詮武の英雄か……）」

交渉の第一段階で、あのようなことを言われるとはさすがのリアンも予想していなかった。故に近衛詠春という人間は、リアンにとって取るも足らないモノだと判断した。

「人を見かけで判断するような人間が組織の長だとは思いませんで

した。こんな長だからこそ、今回の騒動が起きたんでしょうね。木乃香さんも随分と可哀相ですね。自分の父親がふがいないばかりに、政争に巻き込まれてしまったんですから」

「……………」

詠春は何も答えない。否、答えることが出来ないのである。

「（まあ、何かあったら、木乃香さんは助けることにしてますから、このおっさんが協力を依頼しなくても動くつもりなんですけどね。…では次に行きますか）」

リアンの目的地はこの総本山の他にもうひとつある。次はそこへと向かうべく、黙りこくっている詠春をほったらかしにして総本山を後にした。

「そういえば、白髪の少年のことを伝え忘れましたね。まあいいでしょう。自業自得です」

第二十四話 修学旅行三日目 くリアン 暗躍する?? (前書き)

遅くなりました。短いですが投稿します。

第二十四話 修学旅行三日目 くリアン、暗躍する??

SIDE 三人称

「ここが…」

総本山をあとにしたリアンは、大きな湖に来ていた。特に名も無き湖であるが、その中央には巨大な石があり、その石を封じるように注連縄が巻かれている。

ここには飛驒の大鬼神リヨウメンスクナが封じられている。リアンの目的の一つはここである。

「古より神には神通力という力が備わったという話です。『鬼』という冠がついてはいるものの、『神』であることには変わりありませんね」

リアンの目的とは大鬼神の力、つまり『神通力』を得ることである。『神通力』とは、およそ人ではなしえない事象をなし得る力である。この力を使えば永久石化も解けるかもしれない。

「さすがにリヨウメンスクナそのものがいなくなると面倒なことになりますから、力の一部をもらいましょうか」

一人呟いたリアンは、胸の前で両の掌を合わせる。そしてそのまま両手を巨大な岩に押し当てる。

「……さすがは大鬼神。流れ込んでくる『力』が濃いですね」

若干額に汗を浮かばせつつ、リアンは作業を続行する。作業としては極単純。アンリ・マンユの封印を解除して、それに封印されているスクナの力を吸い上げるだけである。

アンリ・マンユはあらゆるものを包有する。人間の感情すら取り込むことが可能である。三千世界に渡って存在する暗黒神たるアンリ・マンユにとって、たかが極東の一鬼神の力を取り込むのは簡単なことである。ただ、リアンの体には相応の負担は掛かるのが唯一の欠点である。

「……っ！」

肉体の内側から刺されるような痛みがリアンを襲う。分かっていたことではあるが、さすがにリアンも顔をしかめる。しかしリアンは作業を止めることはない。たった一つの目的のため、ただ愚直に作業を続ける。一種の異常ともいうべきリアンの姿がそこにはある。何かを得ようとするなら相応の代償を払わなければならない。いわゆる等価交換。若干10歳にして、この世の真理ともいえるソレをリアンは正確に理解していた。

「……ふう」

リアンが作業を始めてどれくらいたっただろうか。

ようやくリアンは作業を終えた。その額にはうつすらと汗が滲んでいる。しかし、その顔は一種の満足感にあふれている。

「これが神通力ですか……。魔力とも気とも違う、暖かい感じがしますね」

リアンは、アンリ・マンユを通して感じるスクナの神通力に感心していた。

今回リアンが取り込んだのはスクナの『陽』の神通力。それに対をなす、『陰』の神通力は取り込んではいない。

……洋の東西等を問わず、力には二面性がある。例を挙げると、魔法にも属性がある。基本四属性と呼ばれる、火・水・風・土や五行相克など、その属性の数は無数にある。しかし、その無数にあるものも、大きく二つに分けることが可能である。

端的にいうと、『陽』と『陰』の二つである。もちろん、『陰』の力を使っても治癒などではできるし、逆に『陽』の力を使っても攻撃はできる。ただ、『陽』の力は『陰』の力よりもそういった方面に向いているという程度である。

「下手にスクナそのものを取り込む訳にはいきませんからね」

スクナは封印処置を施されているとはいえ、その管轄は関西呪術協会にある。スクナが東の抑止力になっていることも考えると、全てを取り込むというわけにはいかないのである。だからこそ半分の力を取り込むにとどめたのである。

しかし、リアンは気づかない。自分の行為が、例の襲撃者達の計画の根本に打撃を与えたことに。

「さて、すっかり日も暮れてしまいましたし、どうしますかね」

リアンは身代わりを滞在先のホテルに置いてきているので、自由に行動ができる。そして、リアンの予想ではそろそろ、例の襲撃者達が動くと考えている。奴らの目的が木乃香の魔力であることは理解している。

その魔力を何に使うかは分からないが、十中八九、先日の一件のように木乃香を誘拐しようとするだろう。

「一番は木乃香さんのそばにいいのですが、今、木乃香さんがどこにいるか分かりませんしね……」

木乃香のそばにはエヴァもいる。べったりというわけではないが、庇護下にあることは間違いないだろう。しかし…。

「エヴァさんがいれば大丈夫なのでしょうが、エヴァさんのあの様子だと目を離しているかもしれません…。そうなれば護衛の刹那さんと兄達では、彼らは手に負えないでしょうね…」

エヴァはこの修学旅行を本当に楽しんでいた。特に日本の寺社仏閣をみれるというのは彼女にとってかなり重要なことである。故にあのテンションなのである。

大丈夫だと思いつつも、リアンが不安視しているのはこれが理由である。

「とりあえず、総本山の様子を見に行きますかね。そろそろ兄も親書を届けているでしょうし…」

この場にとどまっても意味はない。リアンはとりあえず総本山に向かい、兄の様子を見に行くことにした。

自分の予想を大きく超えた事態が待っているとも知らず……。

第二十四話 修学旅行三日目 くリアン 暗躍する?? (後書き)

今回の話は後々、重要な話になります。

第二十五話 修学旅行三日目 く動乱のはじまりく (前書き)

お待たせしました。

第二十五話 修学旅行三日目 く動乱のはじまりく

SIDE 三人称

夜の関西呪術協会総本山。ここには今、親書を届けにやってきたネギを始めとして、ここが実家の近衛木乃香、神楽坂明日菜、桜咲刹那、宮崎のどか、綾瀬夕映、早乙女ハルナ、朝倉和美が訪れている。ネギもなんとか親書を西の長である近衛詠春に渡すことができた。リアンが詠春と会談し、スクナを取り込んでいる際、ネギは例の襲撃者達の攻撃を受けた。

ネギが退治したのは狗族の少年犬上小太郎。ネギとは相性が最悪とも言える格闘家であったが、ネギ自身の機転と一人の協力者の力よって辛くも退けることに成功する。

その協力者とは宮崎のどか。昨夜、偶然？にもネギと仮契約を果たしてしまった彼女のアーティファクトの力がネギを大いに助けた。そして、のどか自身多量の本を読んでいるため魔法に対する順応性が高く、なんやかんやでネギと一緒に総本山へと来ている。

一方、そのネギ達とは別行動をとっていたのはリアンだけではない。木乃香も刹那（+その他）と一緒にシネマ村を訪れていた。そして例によって例のごとく、木乃香たちも襲撃に遭うことになった。結

論から言つと、こちらも何とか迎撃に成功し、総本山へと至る。

そしてリアンから木乃香のことを任されていたエヴァンジェリンはというと、リアンの悪い予想が的中した形となり、悠久の歴史を感じさせる奈良の寺社仏閣に熱中していて、襲撃のことなど露も知らなかった。

そして、現在、ネギ達は危機に瀕していた。例の襲撃者達が総本山を急襲したのだ。

「ネギ君……。白い髪……。の少年に気をつけなさい……。あの……少年は別格だ……。君……たち……のような子供に……。任せるのは……情け……。ないが……木乃香を頼みま……。」

ネギ達の目の前で、近衛詠春は石化した。襲撃者の一人フェイト・アーウェルンクスが放った石化呪文により、かつての英雄もこの舞台から一時降りることとなった。

「兄貴。命には別状はないはずだ。今は急がないと……！」

目の前で石化した詠春に6年前の光景を重ね、動揺するネギだったが、カモの言葉でそれを一時的に頭の隅へと追いやる。

「刹那さん。急ぎましょう!!」

「はい!!」

ネギは自分の隣に立つ刹那に声をかけ、おそらく木乃香がいるであろう、大浴場へと駆ける。

総本山からさほど離れていない森の中、一人の少女が必死に走っている。何かから逃げるようにその足は決して止まることはない。

「（あれは一体：！？それに、助けを呼べと言われても、こんな非常識な事態に対応してくれるのは誰も……）」

森の中を駆けるのは綾瀬夕映。彼女は自分の現在の状況にひどく混乱していた。さっきまで自分たちは木乃香の実家の一室でトランプをしていた。

そこに突然白髪の少年が現れて、何か煙が部屋に立ちこめた。その瞬間、部屋にいた自分の親友やクラスメイトが石のように固まったのである。綾瀬夕映は朝倉和美のとなりの機転によって難を逃れた。その際に朝倉から『助けを呼べ』と言われたのである。

綾瀬夕映は3-Aではバカレンジャーと呼ばれているが、その実頭はいいのである。だからこそ、助けを呼べと言われて、混乱しているのである。

普通助けを呼べと言われたら、警察などに連絡を入れるだろう。しかし、夕映は動揺しつつも冷静に物事をとらえていた。さっきの現象はどう考えても常軌を逸している。ならば、普通に助けを求めても、何の役にもたないことは目に見えている。しかし、自分では手に余る事態であるが故、助けを呼ばないことにはどうしようもない。

この矛盾が綾瀬夕映を混乱させているのである。

「！！そうだ。あの人達なら…」

そんな夕映に一筋の光明が差した。自分がすぐに連絡の取れ、かつ、この事態に対処できそうな人物達が夕映の脳裏をよぎったのだ。

夕映はすぐさま唯一持ち出せた携帯電話を取り出し、その人物達へと連絡を試みる。

「なんや新入り、やるやないか。こない簡単に行くなら、最初からお前に任せといたら良かったわ」

襲撃者達のリーダー天ヶ崎千草は木乃香を手に戻ってきたフェイトに興奮した様子だ。これではようやく、計画が実行できると行き込んでいる。

「早く、ここを離れた方がいい。一応総本山の人間は無力化してき

たけど、もうすぐ『彼』が来るだろうからね」

「あないな『ガキ』が何かできるとは思わへんが、早いにこしたことはあらへんしな。ほな、スクナのところに行こうか」

フエイトという彼とはネギのことではないリアンのことである。

彼が来るとなると千草程度では盾にもならない。小太郎にしても然り。月詠なら相手はできるだろう。逆に千草はフエイトが言った彼をネギのことだと思いこんでいる。しかし、自的のモノを手に入れた千草、その興奮故に、フエイトの言葉について深く考えることなく移動を開始した。その後ろを追うフエイトは、何かを思案するようになつた。

「やはり、予想通りの展開になつたか……」

総本山へと到着したりアンは総本山の惨状を見て、こう呟いた。ネギとは違い、石化した総本山の人々を見てもただ冷静に、静かに総

本山の屋敷内を歩く。

「この石化は…」

石化された人達の状態を逐一調べていくリアン。

「（一時的な石化術式ですが、解呪までの時間が長く掛かれば、それだけ根深く石化が進行する。ずいぶんとまあ悪趣味な術式を組んだものですね…）」

これは比較的軽い石化呪文であるため、解こうと思えばすぐにでも解けるが、リアンはそれはしない。助ける義理もないし義務もない。それに解くなら解くで、専用の魔法具を使う必要がある、その魔法具はリアンのオリジナルでもあるので、非常に高価な魔法具である。ほいそれと使うような魔法具ではないのだ。それに、その魔法具はリアンが永久石化を解呪する研究の副産物的なもので、自分の研究成果ともいえるそれを見ず知らずの他人の為に使いたくないという感情もある。

「どちらにせよ、この状況は使いようによっては使えますね」

リアンは今後の展開に思考を巡らす。この状況は使いようによっては非常に使える手札となる。

「ですが、今はそんな場合ではありませんね。とりあえず兄を追いますかね」

リアンはネギの魔力が総本山を離れていくのを感じていた。そこから導き出されるのは、ネギが襲撃者を追跡しているという状況である。リアンとしてもネギに協力するつもりは皆無であるが、木乃香を救出することには異論は無いため、すぐにネギの魔力の残滓を追う。

ここに賽は投げられた。果たして、この動乱を制するのは誰か……

第二十六話 修学旅行三日目　く開戦の狼煙く

SIDE 三人称

古都京都。はるか昔、平安の時代には魑魅魍魎が渦巻き、人と妖怪が入り乱れ、そこはまさしく光と陰の都であった。そして今、その光景を再現したかのごとく夜の京都の山中で一つの戦いが口火を切るうとしていた。

「なんや、久しぶりに喚ばれたと思ったら、相手は子供かいな」

近衛木乃香を攫った一行に追いついたネギ達は、夫ヶ崎千草が木乃香の魔力を使って喚びだした、優に100を越える鬼達と向き合っていた。

初めて見る鬼という存在にネギ、明日菜は内心穏やかではない。一方、こういったものに慣れている刹那はただ、木乃香の身を案じるだけである。

「ほな、ここはあんたらに任せたで」

召喚した鬼達にネギ達の足止めを指示した千草は木乃香を抱えて離脱する。それを追いたい刹那であったが、周囲360度を完全に囲まれた状態ではいかんともしがたい。

「（くっ……！これではお嬢様が……！）」

焦る刹那。脳裏によぎるのは自身の忌まわしき力。それを使えばこの包囲はたやすく突破できる……が、

「（あの姿を見られてしまったのは、私は……！）」

刹那は、無意識のうちに明日菜達を見る。その存在が自身に、力を使うことをためらわせている。

そのときだった。刹那達を囲むように竜巻が発生し、召喚された鬼達と刹那達とを隔離した。

「これはマズイぜ。このまま足止めを食らったままじゃ、ジリ貧だ。ここは二手に分かれるしかない」

渦巻く風の中でカモが提案する。そして三人と一匹は現在自分達にできうる限りの作戦を立て始める。

一方、千草達を追っているリアンも、ネギが生み出した巨大な風の壁をその視界に収めていた。

「時間稼ぎ……ですかね？だとすれば……何か手に負えない状況になっているのか……」

ちょうど風の壁の位置にネギと明日菜、そして刹那がいるのを感じたリアンはこう結論づけた。そして、その場所を離れていく木乃香の魔力。

「せいぜい頑張ってもらいますか。私は木乃香さんを追わせてもらいましょう」

手出しはしない。自力でなんとかできないなら、所詮ネギはその程度の器。今回のような状況では弱い者から消えていく。

「さて、急ぎましょう。どうやらスクナの所に向かっているみたいですね。こうなってくると結果的に、私が計画を潰したことになるんでしょうかね……」

冷静に状況を把握しながらも、リアンはさらにスピードを上げた。

「なににせよ、この機会に取り込んだスクナの力を試させてもらい
ましょうか」

リアンは、かつてエヴァを相手にしたときと同様、大気中の魔力を
かき集め身に纏っていく。全身にまんべんなく魔力を行き渡らせ、
『以前』のリアンの全力の状態へとコンディションを調整する。

「十中八九、あのフェイトもいるでしょう。……なかなか厳しい状
況ですね。せめてエヴァさんが早く到着してくれるといいんですが
……」

ないものをねだっても仕方ない。リアンは覚悟を決めた。

「戦神舞踏曲。……じゃあいきますか。あとは出たとこ勝負」

身体強化魔法を施し、一気に接敵する。

「よし、到着や。ほな、すぐに儀式に入るで！」

スクナを奉る湖に到着した千草はすぐさまスクナの封印を解除する儀式の準備を始める。そばにはフェイト。そして少し離れた森の中に犬上小太郎を配置。小うるさい少女二人と英雄の息子の一人は大量の妖怪に足止めをさせ、保険として月詠を置いてきた。もう一人の英雄の息子は落ちこぼれと名高い出来損ないなので特に注意する必要はない。若干、新幹線でのやりとりのことに不安を覚えるも、千草にはどうとでもできる算段があった。

「スクナや……。こいつさえ復活させれば、誰もウチを止めることはできん！なんせ、こいつはあのサウザントマスターですら滅するとはできずに封印したぐらいやからな」

しかし、彼女は気づかない。落ちこぼれと、出来損ないと評した英雄の息子が迫っていることに……。

そのことにいち早く気づいたのはフェイトだった。

「来る…」

「あ？誰が来るんや、新入り？」

フェイトの独白ともとれるつぶやきに過剰に反応する千草。しかし
二の言葉は出ることはなかった。

襲撃にいち早く気づいたフェイトは敵の来る方角、距離、速度を見
極める。そしてその進路上へと瞬動で移動した。そして次の瞬間……

「な、なんやっ！！？？」

湖に巨大な水柱が出現した。それだけではない。何かと何かが衝突
した衝撃波が湖面を大きく波立たせ、その様は荒れ狂う大海原を彷彿
とさせる。

「止められたか…」

「フ…、君なら来ると思ってたよ」

「そうです…！っ！！」

初撃は失敗、見事にフェイトに止められた。少ない言葉の応酬。次

の瞬間にはリアンの蹴りがフェイトの側頭部を捉える。フェイトも右腕を跳ね上げ防御を試みる。

「（…なっ！？）」

完全に受け止められると思ったリアンの蹴りは防御もろともフェイトを吹き飛ばす。そしてリアンは即座に千草のもとに移動する。

「な、あ、あんたは！？」

「木乃香さんは返してもらいま…っ！？」

一息に木乃香を奪還しようとしたリアンだが、次の瞬間にはお返しとばかりにフェイトの蹴りが腹部に直撃。有無をいわず吹き飛ばされる。

「……千草さんは儀式を続けて。彼の相手は僕がする」

「新入り……」

未だ、現状の把握ができていない千草であったが、自分の成すべきことを思いだし、フェイトに全てを任せることにした。

「やっぱり、簡単にはいかないか……」

「驚いたよ。一昨日とは比べものにならないね。それが君の本気がい？」

「さあ、どうでしょうね」

いつの間にかリアンはフェイトの眼前に現れた。フェイトに吹き飛ばされたリアンに特に負傷は見あたらない。両者はそのまま互いを見合う。

「……君となら『楽しく』戦えそうだ」

「『楽しく』？人形のあなたが面白いことを言う」

「僕も、少し『本気』というものをを出してみるよ。君の『本気』を知りたいしね」

「……あいにく、私はあなたを相手する理由はないんですがね。私は木乃香さんを連れ戻せればそれでいいんですが」

「まあ、そうつれないことをいわないでよ」

互いに醸し出す雰囲気、否応にも周囲の空気は張りつめていく。二人が立つ木製の棧橋も軋み、静まりかけていた湖面も再び波打つ。離れている千草にもそのプレッシャーはひしひしと感じられる。張りつめた空気に耐えられず、棧橋が一際大きく軋んだ瞬間。

二人の足下の栈橋は爆ぜ、リアンとフェイトは衝突する！

「よし、作戦も決まった。兄貴と刹那の姉さんの仮契約も済んだ。準備はいいか？ここからは時間との戦いだ！」

竜巻の中の三人と一匹も作戦が決まり、動き出すようだ。

「それじゃ、兄貴でかいのを頼む！」

「分かった。ラス・テル・マ・スキル・マギステル……」

三人の作戦はこうだ。この場に残って鬼達の相手をするのは本来、こういった相手が本職の刹那。そしておあつらえ向きのアーティファクトを有する明日菜の二人。そしてネギはその間に木乃香を奪還し即時離脱。実にシンプルな作戦である。

「雷の暴風！！」

竜巻の防御壁が消えると同時に、ネギの最大魔法がその斜線上の鬼達を消し飛ばす。そしてネギは父の杖に跨りその場を離脱、木乃香のもとへと急行する。かたや地上の二人の少女は決意をこめて鬼達を見やる。

その瞬間、湖の方から轟音が夜の京都の山に響き渡った。そして僅かながら大地が振動する。

それはまぎれもなく、リアンとフェイトが激突した瞬間だった。

第二十七話 修学旅行三日目 ～リアン覚醒～

リアンとフェイトの激突。生じた衝撃波は先ほどとは比べものにならないレベルだ。二度目の正面からの衝突は互角。そして二人は互いに反発するように距離を取る。

リアンは魔力で刀を創り出す。対するフェイトも無骨ではあるがかなりの鋭さを持つ石の剣を創り出す。

「（これは…）」

リアンは今回、魔刀を創り出す際にスクナを取り込んだ際に得た神通力を従来のそれに組み込んでいた。割合では微々たる量であるが、それは確かにそして大きな変化を与えていた。

「なかなかの剣だね。いや刀かな…？」

フェイトですら思わずそう漏らすほどの魔刀がそこにあった。

これまでの魔刀はあくまでもリアンの魔力をただ『刀の形』に押し固めていただけであった。しかし、現在の魔刀は違う。限りなく本物に近く、それはリアンの思い描いた『刀』の形をしていた。

「（これなら他のも…）」

表情には出さないがリアンも内心驚いていた。そして同時に感心していた。さすがは神格を有するだけのことはあると。リアンはこれが終わったら神通力の研究も始めようと。なんとも場違いな決意を固める。しかし、今は感心すべき時ではない。今は戦う時である。

そして三度、二人は衝突する。

リアンとフェイトは互いの剣で切り結びつつも互いに多彩な攻撃を繰り出す。リアンが右足をフェイトの頭部めがけて蹴り上げると、フェイトはそれを僅かに後退しかわす。そしてがら空きになった胴体めがけて横薙ぎを放つが、リアンは蹴り出した右足のそばに魔力壁を構築し、それを足場にフェイトの剣を背面跳びの要領で回避。リアンの身体能力の高さが伺える動きである。

「障壁突破・石の槍」

「魔爆^{ボム}」

無詠唱によって素早く放たれたフェイトの石の槍は、その進路上に設置されたリアンの魔力によって爆発。

「投擲槍^{ランス}」

爆発の煙が一瞬リアンの姿を隠す。それに合わせてリアンは一気に50もの槍を生み出しフェイトに向かって放つ。同時に手に持つ魔力も投げつける。

「…へえ」

煙の中から次々と飛び出してくる槍を見て簡単の声を漏らすフェイト。その目には焦りや恐怖といったものは全く見られない。相も変わらず無機質な瞳である。

リアンが放った槍を次々にはじいていくフェイト。50ある槍を全て捌いたところに先ほどまでリアンが持っていた刀が飛来する。

それもさきほどと同様に弾こうとした瞬間…

「バースト
崩壊」

それが突然爆発したが、その爆発は障壁によって無効化される。しかし、次の瞬間フェイトは地面に叩きつけられた。

「^{プレス}圧殺」

リアンが生み出した不可視の薄い魔力板が頭上からフェイトを地面に押しつけたのである。さらにリアンは追撃する。

「魔砲」

従来のそれとは比べものにならない巨大な砲撃がフェイトに向かう。

「君の技は厄介だね。詠唱もないし、不可視の攻撃まであるとは……」

プレスが消え、魔砲が直撃する間の刹那にフェイトは移動し、リアンの放った魔砲は湖の水を吹き飛ばし、巨大なクレーターを創り出す。

「ヴィシュ・タルリ・シユタル・ヴァンゲイト。おお、地の底に眠る死者の宮殿、我らの下に姿を現せ…『冥府の石柱』」

さっきのお返しと言わんばかりに大質量の柱状の一枚岩をリアンに放つ。その数は6。しかしリアンに焦りはない。

「破ッ!!」

一本目は正面から殴り壊す。二本目は蹴り碎く。三本目は投擲槍で串刺しにして爆破。四本目と五本目は魔砲で消し去る。そして最後の一本は…

「これは返しますよっ!!」

強化した身体能力でもって受け止め、フエイトへと投げ返す。そして石柱の陰に隠れるように接近する。

「千刃黒曜剣」

投げ返された石柱は漆黒の剣によって細かく切り刻まれる。八本の剣がフェイトの周囲を多角的に動き回り、ある種異次元の斬撃を可能にする。

「それはいいですね。では私も…」

リアンはフェイトの真似をする。魔刀をフェイトと同じ数だけ創り出し、それを意思で操れるように即座に術式を構築。そして実行する。リアンの剣とフェイトの剣が凄まじい速度で衝突し合う。

「ねえ、君の目的はなんだい？」

「突然なにを言い出すかと思えばそんなことですか…。くだらないですね。ただ生徒が誘拐された。それだけの理由ですよ。…そういうあなたこそ目的はなんですか？見たところあなたの目的はこの騒ぎとは別のところにあるように思えるのですがね」

「…君に嘘をついても仕方ないね。僕の目的はあのスクナの調査だ」

「なるほど。あわよくばスクナをかすめ取るつもり、よしんばできなくてもその力を見極めるといったところでしょいか」

「そんなところさ。それよりいいのかい？千草さんが詠唱を終えたみたいだよ」

その言葉どおり、スクナの封印石がまばゆく輝き湖をあまねく照らす。時間じくしてネギが到着した。

「別に構いませんよ？」

「ガアアアアアアア！！！！」

『どうせあれは抜け殻ですしね…』というリアンの弦きはスクナの咆哮により、目の前のフェイトにも聞こえることはなかった。

第二十七話 修学旅行三日目 リアン覚醒（後書き）

次で戦闘は終わりにして、交渉（脅迫？）に移ります。

お楽しみに！！

第二十八話 修学旅行三日目 〱終戦 〱そして〱

SIDE 三人称

「ガアツアアアアアア！！！！」

封印から解放されたスクナの咆哮が湖に響き渡る。リアンにその力の大半を奪われたとはいえ神格を有する大鬼神。その残り僅かな力でさえも圧倒的である。

さすがは、あのサウザントマスターをして封印しかなかった怪物といったところだろうか。

「ハハハハハッ！！どうや、この力！。この力さえあれば魔法使いなんぞ恐るるに足りまへん」

スクナを復活させた千草は高らかにしゃべる。その傍らには木乃香もいる。

「ラス・テル・マ・スキル……」

一瞬の逡巡の後にネギは自身の最高の魔法の詠唱に入る。スクナの力はネギにも分かる。自分の実力よりも遙かに上であると。しかし、だからといって何もしないという選択肢は存在しない。そこに自分の生徒がいるのだから。

「雷の暴風！！」

ネギが放った魔法は一直線にスクナに向かう。これはネギが出せる最高の出力の魔法であった。込められた魔力もこれまでのそれと比べても遙かに上回る。

しかし、それでも相手は大鬼神。ネギの雷の暴風に対し、僅かに防御する素振りをみせたものの。取るに足らない攻撃だと判断したのか、甘んじてそれを受けた。その視線はリアンを捉えていた。

スクナに直撃したネギの最大魔法は特にスクナに傷をつけることなく霧散。それを見て、千草はさらに高笑いする。英雄の息子とはこんなものかと。

「そんな…」

「（マズイ状況だ。……！！そうだ）兄貴！カードだ！！」

自分の全力の魔法がいと也容易く霧散し、全く効いていないことに驚きを隠せないネギ。そして肩に乘るカモはこの状況を打開すべく思考を巡らせ、一つの案を思いつく。

「とても見習いとは思えない魔力だね…」

「よそ見は厳禁ですよっ!!」

「!!」

その一方で上空に位置するリアンとフェイトは一つの結末を迎えた。ネギが魔法を放つ瞬間、フェイトはそちらに意識を向けた。まるでその力を推し量るような目で。

リアンはその隙を見逃さない。一瞬で間合いを詰め、フェイトをネギの方に向かって叩きつける。

「さて、兄にはかなりきつい相手でしょうが。これも経験です」

厄介者^{フェイト}をネギに押しつけて、リアンはスクナを見据える。さっきからスクナが自分を見ていることに当然リアンは気づいていた。

「本能的に私の中の力を感じたのでしょうかね」

スクナとリアンの視線が交差すること数秒。先に動いたのはスクナであった。その巨大な右腕をリアンめがけて一直線に振るう。

「な、なんや!？」

千草は自分が指示してない動きをするスクナに動揺する。術で自身の支配下に置いているはずの鬼神が自らの意思で行動している。驚くのは仕方ないが当然と言えば当然。そもそも千草のような三下の術者に神格を有する大鬼神を支配できるはずがない。

「チツ…」

無意識に舌打ちをしたリアンはスクナの右腕を大きく回避する。

「（倒せないことはないが、手の内をここで見せたくはないですね。エヴァさんは何をしているんでしょうか。そろそろ来てもいい頃ですがね）」

リアンがいた場所を暴風を伴ってスクナの腕が通過する。

「さて… とりあえずやるだけやってみますか」

リアンは決めた。現状の力のみでスクナを相手取することを。

「ふう、全く彼は容赦ないね」

リアンに棧橋めがけてたたき落とされたフェイトは服の埃をはたきながら立ち上がる。

「き、君は！？」

「ああ、君かい。ネギ・スプリングフィールド」

目の前に落ちてきたフェイトに目を見開くネギ。

「よくも、刹那さんや明日菜さんにひどいことを！それに木乃香さ

んまで!!」

フェイトに向かって杖を構えるネギ。その肩ではカモがアワアワ言っているが、逆上しているネギにはその言葉に耳を傾ける余裕はとうになくなっている。しかしそこは優等生。

「召喚!!」神楽坂明日菜
、「桜咲刹那!!」

カモの助言を忘れてはいなかった。一人では手に余る相手でも複数人でなら、といったところだろう。ネギの近くに直径1メートルほどの魔法陣が浮かび上がり、そこから足止めを喰らっていた明日菜と刹那が召喚される。仮契約カードの便利機能の一つだ。

「な、なによアレ!?! ってあんたは!?!」

「く、お嬢様！？…貴様っ！！」

召喚されて早々、二人して同じような反応をする。巨大な鬼神は気になるものの、目の前には憎き白髪の少年がいる。

「やれやれ、君たちでは相手にならないよ」

「そんなのやって見なきゃわからないでしょ！！」

言うは易く行うは難しとはまさにこのこと。一気呵成に三人は波状攻撃をフェイトに仕掛けるが、ことごとくそれはかわし防がれ、逆にカウンターを喰らって三人仲良く吹き飛ばされる。

「石の息吹」

「あれはマズイ!!」

「ネギ!!」

三人がうまく固まった所に石化効果のある煙が襲いかかる。とつさに三人は大きく後退したが、かすってしまったのかネギが右腕を押さえている。

「ネギ先生…!」

「大丈夫です。かすっただけです」

一応戦闘経験のある刹那はネギの僅かな異変に気づき声をかけるが、ネギは大丈夫と一蹴。本能だろうか。ネギも今は弱音を吐くときではないと悟っているのだ。

実力差は明白。三人がかりでも掠りもしない。しかもこっちは満身

創痕と言っても過言ではない。

そして、刹那は一つの決意をする。

「ネギ先生、神楽坂さん」

ゆっくりと語り出した刹那。そして、バサッという独特の羽ばたき音とともに刹那の背中に純白の翼が現れる。

そしてゆっくりと自分が忌み子であることを語る。おそらくこのときの刹那の心境はかなりざわついていただろう。

「すごく綺麗です」

「そうよ。それに『そんなこと』で木乃香が刹那さんを軽蔑すると思うの？木乃香なら絶対綺麗やな〜っていうわよ」

正直なネギと明日菜の言葉に思わず感極まる刹那。これまでこの翼は忌み嫌われるものであった。褒められることなど一度たりともなかった。

「鳥族のハーフか…。気づかなかったな」

ここで致命的なミスを三人は犯した。どんな状況であれ、敵を目の前にして自分たちの世界に浸るのは愚の骨頂。そんな状況を見過ごしてくれるほどフェイトは甘くない。

「「「！……」」」

この三人では避けようのない完璧な一撃。しかし…

「随分と楽しそうだな。小僧？」

「っ!!」

突然現れた乱入者によってその一撃は防がれ、次いで放たれた乱入者の拳はいとも容易くフェイトの障壁を突き破り、その腹部に突き刺さる。

まるで石が湖面を跳ねていくようにフェイトは吹き飛んでいく。

「え、エヴァンジェリンさん!？」

乱入者はエヴァであった。まるで狙っていたかのようなタイミングでの登場であった。

「なんやこれは！？言うときかんかい！！この…！！」

千草は自分の命令を全く効かないスクナに困惑している。こんなはずではなかった。スクナを復活させたら、まずは東の魔法使いを殲滅し、次に西の関西呪術協会を滅ぼして仇をとるつもりが、苦勞して復活させたスクナは自分の命令なんか聞く素振りもない。現に目の前の落ちこぼれと呼ばれる英雄の息子を執拗に攻撃している。まるで何かを取り戻すように。

だからこそ千草は見逃した。

「お嬢様は返してもらっぞ！！」

「なっ！？」

エヴァが現れたことによりフェイトを相手にする必要がなくなった刹那がその純白の翼をもって、千草に接近。そして木乃香を奪還したのだ。

「（桜咲さんがここにいるという事は…）」

リアンはスクナの攻撃をかいくぐりつつ、下を見る。

そこには確かにエヴァがいた。

「【遅いですよエヴァさん】」

「【ふん。それは悪かったな】」

「【とりあえずこの場をお願いします。エヴァさんがいれば問題ないでしょう。私は行くべきところがありますので】」

「【…まあいいだろう。そいつは壊していいんだな？】」

「【ええ。もちろんです。派手にやってください】」

念話での簡単なやりとりを経て、リアンはスクナから大きく距離を取る。その直後、スクナに何かが衝突し、スクナは大きなうめき声とともに結界に拘束される。

「茶々丸さんか…」

湖の畔に巨大な狙撃銃も持った人影が宙に浮いているのを確認したリアン。それはリアンもよく知る茶々丸であった。

「…さようならですね。大鬼神リョウメンスクナよ。あなたの力は
せいぜい上手く使ってあげますよ」

そう言い残しリアンは本山に向かって超長距離瞬動を敢行。一瞬で
戦場を離脱した。

そして残されたスクナは、その後エヴァの魔法によって粉々に打ち
砕かれ、再封印が施されることになるのであった。

第二十九話 修学旅行三日目 〱後始末〱

S I D E リア

「これで最後…」

現在私は総本山へとやってきています。そして、総本山で石化している人々を全員大広間に集めていて、やっと最後の一人を運び終えた所です。ざっとみて50人弱はいる。おそらくこの屋敷にいる人間全員ですね。

その中から目的の一人の石像を探します。

「…あつた」

そして、その石像に対して、本来であれば使うつもりはなかった、私が作成した石化解呪用の魔法具を使って、石化を治癒します。これは針のような形状をしていて、対象に刺すことによってその石化を解呪する代物です。

頭に刺してもいいですが、シールドなんで肩に刺します。瞬間、ガラスが割れ飛び散るように石がはがれます。

「う…こ…こ…は…」

お決まりの台詞ありがとうございます。ですが、そんなのんきなことを言う暇は与えません。

「気づきましたか」

「リアン君…。こゝこれは！？」

遅いよ、気づくのが。というより全てが。まあいいでしょう。

「見ての通りです。この総本山の人間は全員石化されたようですね。もちろんあなたも」

「では、木乃香は！？」

「…とりあえず無事なんじゃないですか？」

私は最後まで見ていませんが、先ほどスクナの反応が消えたからとりあえず事は終局を迎えたみたいです。しかし、それを素直に教え

る必要はありません。この人は何もしてないですし。

「…私の石化はリアン君が？」

「ええ。私のオリジナルの魔法具を使用しました。とりあえずあなただけね」

「では、ここににいる者達の治療をお願いできないだろうか？」

「別に対価さえいただければ構いませんよ？ああ、既にあなたに対して使用してしまった分については、こうして話をする必要があったから、とりあえず必要経費でいいとしても、ここににいる人達を治療するなら相応の対価を要求します」

無償で治療なんて誰がしますか。ただでさえ石化治療の魔法具は高価ですしね。

「…君はこの状況を見て何も思わないのかね！君にはこの状況を、

石化された人々を治す力、方法をもっている…「少し黙りましょうか」…」

「この状況を招いたのは誰ですか？他でもないあなたでしょう？十分に対策を練る時間はあった。それをあなたはろくに使えもしない役立たずの護衛と見習いの英雄の息子に頼るだけ。その結果がこれですよ？だいたい、今回の騒動はそちらのお家騒動です。それに何故修学旅行で京都を訪れているだけの私たちが巻き込まれるのか？これ昨日も言いましたよね？忘れたとは言わせませんよ」

「それは…」

「別に治療なんてせずにこのまま帰ってもいいんですよ？この人達には何も関わりはないですし。感慨もないですしね。死ぬなら死ぬで結構。永遠に石化が治らないならそれはそれでいいです」

所詮他人事。ましてやこいつがきちんと対策を取っていればここまでの被害にはならなかった。自業自得ってやつです。

「それにこの石化は永久石化ではありませんが、石化してから解呪

までの時間が長ければ長いほど石化の進行は進み、解呪が難しく、そして後遺症がでてきます。そういった術式になっています。明日来るといふ手練れの術者に任せるのもいいですが、果たしてそのときに上手く解呪できますかね？」

あなたが選べる選択肢は二つ。ここで私に解呪を依頼するか。明日まで待つて、来る増援とやらに解呪させるか。

前者のメリットはこの場で全員石化を完全治癒できること。それによつて今宵の騒動の処理に迅速？に動ける。デメリットは私が要求する対価が何か分からないことぐらいですかね。

逆に後者のメリットは特にない。むしろデメリットとして、今宵の騒動の処理が遅れる。完全に石化が治癒されるかは分からないといったところですね。

ここで後者を選択するなら、この人はよほどの馬鹿です。一応選択肢は二つありますが、選択できるのは現実的に考えて前者だけです。

スクナの再封印処理もしなくてはいけないし、おそらくエヴァさんが捕らえているであろう天ヶ崎千草の身柄や今回の件に関与した組織の者の処罰などやることは多々ある。ここでぐずぐずしては、新たな政争がおこることは明白。そもそも近衛詠春という人間は、関西呪術協会において疎まれていると言ってもいい。強行派の人間からすれば早く蹴落としたい人物であることは間違いない。

そんな強行派からすれば今回の天ヶ崎千草の起こした事件は格好の材料である。このような反乱ともとれる行動ひとつ満足に鎮圧できないどころか、それを鎮圧したのは東の魔法使いである。

十分すぎる材料だ。私ならすぐさま行動を起こしますね。政争において重要なのは速度ですし。

というか さつきから考えすぎでしょう。10歳の私がすぐに考えつくのに なぜ倍以上生きてるこの人がこんなに考え込むのでしょうか。

「決断は早いほうが全てにおいて好ましいですよ？いつまでもわたしがあなたの答えを待っていると思わないことです。さつきもいいましたが、別にあなたたちがどうなろうと知ったことではありませんん」

「…この者たちの石化を治してください」

「…よろしい。しかし時間が掛かりすぎです。」

「では対価ですが、この関西呪術協会にある陰陽術の巻物の複写を頂きましょう。もちろん秘術・禁術も含めて全てです」

「なっ！？」

日本古来の陰陽術には反魂の術を初めとして、人の生命、身体に作
用する術が多数ある。これらの術式の成立プロセスを解き明かすこ
とによって永久石化の解呪も進展があるかもしれません。

「ああ、安心してください。別に悪用するつもりはありません。私
の研究に使うだけです。もし、関東魔法協会がその技術をどうこう
しようとするときは、完全に叩き潰してやりますから」

というより、関東魔法協会ってあの世界樹が無くなれば存在意義を
無くしますよね。あの程度なら余裕でアンリ・マンユを使って取り
込めそうですしね。

「…わかりました」

これは珍しい。渋ると思いましたが、思いのほか素直ですね。まあ、
渋ったところで断ることはできないのですがね。

「交渉成立ですね。ああ、言っておきますが後で、この件をうやむやにしないことです。あなたとの間で今の交渉に関してギアス《制約》を掛けさせてもらいましたから、素直に従うことをおすすめますよ。契約を反故にした瞬間、この石化になっっている人達が、せっかく石化を解呪したのに再び石化しますよ。もちろん、そのときにはほぼ永久石化に近い形の石化になります。ちなみに、私がこのまま石化を治さなかった場合の代償は私の命です」

このギアスについては術者、つまり制約をかける側の代償が大きいほどその効力は比例して大きくなります。その点、術者の命というものは代償としては最上級のものになるので、制約を当然大きく掛けることが可能。

「ご理解いただけたところで、早速履行しましょうか。私も自分の命は惜しいですからね」

さて、交渉も成立しましたし、てきぱき作業に取りかかりますか。それにしても、学園長と言い、この人といい組織のトップがこれでは、組織の未来は真っ暗ですね。

第三十話 修学旅行最終日 くリアン 考える

SIDE リアン

「ふむ……」

いろいろあった修学旅行も最終日を迎えました。今日も完全自由行動日となっていて、ある人はおみやげを買いに、ある人は朝から温泉につかったのんびりしたりと、自由な時間を過ごしています。ちなみに兄たちは父の別荘に行っています。エヴァさんもそれに着いて行きました。

昨夜の一件。私が湖を後にしてからの経過は茶々丸さんから詳細を聞きました。

結論を言うと、スクナはエヴァさんが『永遠の氷河』で砕いたそうです。そして、あのフェイトについては、そのときには既に戦線を離脱していたとのこと。首謀者天ヶ崎千草についてはチャチャゼロさんが捕縛。犬上小太郎という狗族のハーフの少年は自首とのこと。神鳴流剣士のゴスロリ少女、月詠も行方不明。

つまり犯行グループの内、フェイトと月詠という、実力で言えばトップ2はまんまと逃がした結果となりました。

幸いにして死者は一人も出ませんでした。しかし問題がいくつかあります。

一つは、長瀬楓及び綾瀬夕映、古菲の三人がこちらの世界を知ってしまったこと。次に、木乃香さんが兄と仮契約をしたことです。

前者については、もともと長瀬さんは忍者であって、半分裏の関係者であるので、まあ問題があるといえはありますが、許容範囲でしょう。綾瀬夕映さんについては、本山に来ていた3-Aの生徒の中で、唯一石化を免れたようです。そして、本山を逃げ出し、応援を呼んだ。その応援の中に、長瀬さんと古菲さんがいたとのこと。こ

の辺は私の関するところではないので、兄次第です。

次に木乃香さんと兄の仮契約については、これは完全に予想外でした。何でも、兄はフェイトの石化の息吹にかすっていたらしく、全てが終わったときには右腕が石化していたらしいです。本来であれば一気に石化するはずが、兄の魔法抵抗力が高いためにそのような状態にあったとのこと。そのため、全身に石化が回る前に、首まで石化した段階で窒息死する可能性があった。

そして、ここで問題が起きた。その場にいた顔ぶれ、明日菜さん、エヴァさん、木乃香さん、桜咲さん、長瀬さん、古菲さん、綾瀬さん、長瀬さん達とともに応援に来てくれた龍宮さん、あと生ゴミが一匹。

このメンバーの中で一番魔法に詳しいのは言うまでもなくエヴァさん。しかし、エヴァさんは治癒魔法が苦手です。元々、真祖の吸血鬼であるエヴァさんは負傷しても自己再生ができるから治癒魔法が必要になる場面が低かった。そのため数ある魔法の中でも治癒魔法に関しては、言い方は悪いですが、役に立てなかったというわけです。

では、どのようにして兄の石化を治したのか。ずばり、木乃香さん

との仮契約です。この話と合わせて聞いた話ですが、昨日の昼間に木乃香さんがシネマ村で襲撃を受けた際、刹那さんが木乃香さんをかばって矢を受けたらしいです。しかし、その傷は、おそらく自己防衛本能による、木乃香さんの魔力の軽い暴走によって完全に治癒されたとのこと。

そして、仮契約を行う際には主と従者の魔力パスがつながる瞬間、従者の能力が一瞬だけ表層化されます。その表層化した能力がカードの形になったのが仮契約カードというわけです。

つまり、木乃香さんの能力が治癒にあると仮定して、兄と仮契約をすることにより兄の石化を治癒しようとした。

結果として、この試みは成功。兄は無事に石化が解除されたようです。しかしこれによってもっと大きな問題が生まれました。英雄の子同士が仮契約をしてしまったのです。しかも、魔法使いと、陰陽士という相容れない組織の者が。木乃香さんについては陰陽士というわけではありませんが、父は呪術協会のトップ。普通に考えて、木乃香さんは次代の関西呪術協会の長です。それが魔法使いと仮契約したというのは、西の呪術協会からしてみれば気に入らないことは当然。となると今回以上の事件が起こる可能性もあるというわけです。

とまあ、一応まじめにこうやって考えましたが、所詮他人事。確かに木乃香さんにはお世話になりましたし、何とかしてあげたいと思います。が、こちらの世界、自身の立場を理解した上で踏み込んでくるなら、それは自己責任。あとは主である兄に任せましょうか。従者を守るのは主の役目です。

昨夜の顛末はこんな感じですね。まあ、あと拳げるなら、桜咲さんが木乃香さんと仲直りしたみたいです。いろいろと吹っ切れたんでしょう。

そして、私は現在、自分の部屋にて昨日の契約内容である、陰陽術

の巻物を一つ一つ確認しています。今朝届いたばかりです。近衛詠春もやればできるのだから、いつもこの位の早さで仕事をすればいいですね。

「…これで終わり」

最後の巻物を確認して、これで契約は完全履行となります。ギアスは解除されました。

「しかし、この禁術はすごいですね」

思わず一人で簡単の声を出してしまいます。目を見張るのはやはり禁術。特に反魂の術にいたっては、術式として完成系に近い。惜し

むらくは死んだ人間の蘇生は不可能であることに気づくべきだった。この術式の研究過程でかなりの人間が死んだであろう事が容易に想像できる。しかし、それを除いても、この術式については非常に興味深い。

他の禁術にいたっても同様である。これらの技術を上手く応用できれば研究もかなり進みそうだ。

「今回の事件はある意味感謝ですね……」

今回の契約、明らかに魔法具を使ったことによる損よりも、この巻物の山による利益のほうが大きい。いい契約をしたと思います。

「これらをじっくり見るのは麻帆良に帰ってからにしますかね」

旅行バックの中から、野球ボールほどの大きさのガラス玉を取り出します。これは別荘の一種です。使用目的はまさに倉庫。だいたいこれ一つに、東京ドームとやら一杯分の荷物が入れられるそうです。ちなみにお値段1、000万円。

値は張りましたが、それに見合うだけのコストパフォーマンスを見せてくれてます。この中には現在、私が先日使った魔法具を始めとして、治療薬や薬草。各種魔法薬の材料などが入っています。

これに巻物を全て入れたことを確認して、封印術式を起動。これで私以外には荷物を取り出すことはできなくなります。ついで見えた目もただのガラス玉のように無色透明になりました。それを元に戻して…と。

「…さて、私も仕事をしますかね」

修学旅行最終日、自由行動日とはいえ教師としての仕事が無くなるわけではありません。はやく研究をしたい気持ちがありますが、まずは与えられた仕事をこなさないといけませんね。

ああ、これが社会人の辛さってやつですかね。自分のやりたいことができないこの感じ。

まさか、10歳でこのようなことを考えることになるとは思っていませんでした。

第三十一話 ネギ弟子入り！？

SIDE 三人称

「ちよつとネギ！どこ行くのよ！？」

修学旅行の振替休日。新緑が芽生え、夏の兆しが見え始める今日の頃。ネギは朝から自分の部屋を飛び出し、ある場所へと向かっていた。それに着いてきたのは明日菜。

「ある人の所です。この修学旅行で僕は自分の実力を痛感しました」

修学旅行の一件。ネギは何もできなかった。スクナを倒したのはエヴァ。木乃香を取り戻したのは刹那。では自分は？

答えは何もできなかった。あの白髪の少年にいいようにあしらわれた挙げ句、石化魔法にかかってしまった。それに、聞くところによると、石化された近衛詠春他何十名を治療したのはリアンというではないか。

「今の僕では誰も守れません。ですからある人に弟子入りをしようと思っています！」

リアンには負けたくない。第一リアンは魔法が使えないはずだった。しかし、現実が違う。新学期にあがって早々の模擬戦でネギはリアンに完敗した。それに、修学旅行の湖畔での一戦。リアンと白髪の少年の戦いをほんの一部だけ見ることができた。それはリアンと自分の実力差を実感させるには十分だった。

「まあ、あんたがその気なら私は何も言わないわよ。それで？そのある人って誰よ？」

明日菜の疑問は、すぐに解消されることになる。二人がたどり着いたのは、麻帆良の郊外にある森の中のログハウス。

そう、エヴァの家である。

「ええーっ！？エヴァちゃんに弟子入り！！！？」

エヴァの家について早々、ソファでくつろいでいたエヴァに向かって片足について弟子入りさせて欲しい旨告げた。

「ほう…。この私に弟子入りか。その理由はなんだ」

一人で驚いている明日菜を放っておいてエヴァはネギに問いかける。

「はい！修学旅行でのエヴァンジェリンさんの戦いを見て、僕が強くなるにはこの人しかいないと思いました！！」

「ほう。つまり私の戦いに見惚れたか」

エヴァはその高すぎるプライド故におだてられるとついそれに乗っってしまう。ましてや、そのおだてている人物があのかのサウザントマスターの息子であればなおさらだ。同じ息子であるリアンはこのよう

なことは一切無かった。

そもそもリアンについては、自身のスタイルが確立されていて、教えることがなかった。むしろ教えることができなかったというのが現状である。リアンが麻帆良に来てから、エヴァが行ったことも、体術を教えたり、魔力運用のコツを教えたりと、言っては何だが見栄えのしないものばかりであった。

しかも、リアンは一つ教えればそこから十は行かなくとも八は知るので、今となってはエヴァでさえ教えることは無くなっているのである。たまに模擬戦をする程度である。

そんなエヴァだからこそ、ネギは素材としては面白かった。今はまだ原石にしかすぎない状態。これを自分の思うように削り磨き上げることができるのである。600年を生きるエヴァにとっては一種の道楽でもあるのだ。

しかし、ここで素直に『わかった。弟子にしてやろう』と言っのはつまらない。

「いいか、坊や。私は悪の魔法使いだ。悪の魔法使いに頼み事をするときには何か代償が必要だ」

ちょうど暇だったから少し遊んでやろう。そういった顔だ。何か得体の知らないオーラのようなものも背後に見える。横にちょこんと座っているチャチャゼロに至っては、主の雰囲気が変わったのを感じてその顔に笑みを浮かべている。

「だ、代償ですか…？」

「ああ。まずは私の僕として忠誠を誓え。そして…」

ネギもエヴァの雰囲気圧倒されている。

「私の足を舐めろ。話はそれからだ」

.....

.....

.....

……

……

…

エヴァの一言に部屋の空気が凍った。その空気の中、いち早く動き出したのは…

「なに、子供にアダルトな要求してんのよ!!!!」

明日菜であった。アーティファクトであるハリセンを召喚し、エヴァの横っ面に一撃。スパーンと心地よい乾いた音が響き渡る。

「何をする！？」

「エヴァちゃんこそ、何言ってるのよ！子供に要求する内容じゃないでしょ！？もう、ネギ、エヴァちゃんに弟子入りするのはやめなさい！おかしくなるわよ！」

「ええっ！？」

「おかしくなるとはなんだ！？」

「そのまんまよー！」

そして神楽坂明日菜VSエヴァンジェリンの幼稚な言い合いが始まった。その横でネギはアワアワ言っているだけである。その間も髪を引っ張り合い、頬を抓りあう。非常に幼稚な喧嘩である。

二人でもみくちやになること数分。意を決したネギは声をかける。

「あゝあの…」

その一言で二人は止まる。そして二人はばつが悪そうに離れる。

「チツ…。とんだ邪魔が入った」

「自業自得よ！」

「まあいい。弟子入り試験に合格したら考えてやるよ」

「本当ですか!？」

「ああ、一週間後に試験を行う。…それよりも聞きたいことがある」

藪から棒にエヴァがネギに質問する。

「坊やはなぜ私を選んだ？別に私じゃなくともじじいやタカミチとか、師匠なんぞいくらでもいるだろう？」

「…それは、リアンもエヴァンジェリンさんに弟子入りしているからです」

ネギはリアンとエヴァの真実の関係を知らない。いろいろと察するに二人の関係は師弟関係であると推測した。

「言っておくが、リアンは私の弟子ではない。単に私の庇護下にあるだけだ」

「えっ？弟子じゃないんですか！？」

「違うな。あいつは私の知識を必要とただけだ。その代償として私と協力関係を結んでいる。確かに最初は魔法について師事していたが、今では独り立ちしている。私にはもう教えることはない。お前も少しは見たんだろう？リアンの実力をな」

「それは…」

確かに見た。そして自分とリアンとの差を痛感したからここにいるのだ。落ちこぼれと言われていた魔法を使えないリアンがあそこまで強くなれたのはエヴァさんに弟子入りしてるからだとなギは思った。

だからこそ、自分もエヴァに弟子入りすれば、魔法の使える自分はリアン以上に強くなれると思った。魔法も満足に使えないリアンよりも自分の方が優秀だ。師が同じなら、実力は弟子の才能で決まる。短絡的にネギは考えていた。

「あれでもリアンは全力でもなければ本気でもない。いい機会だからついでに教えてやるが、リアンは強いぞ。本気になればそれこそタカミチなんか相手にならないだろう」

エヴァの一言は重い。しかし事実そうなのだから仕方がない。ネギはエヴァの言葉にうつむいている。

「なに、落ち込んでるのよ！」

「あうつー!!」

そんなネギの頭に明日菜のハリセンが振るわれる。

「別にいいじゃない、そんなこと。今負けてるなら、今から強くなればいいのよ。それこそリアンにぎゃふんって言わせるぐらいね」

この前向きな姿勢こそ明日菜の長所であろう。そんな明日菜につられて、億劫としていたネギも改めて決意を固める。今は負けていてもこの先勝てばいい。それにリアンはもうエヴァさんに何かを教え

られることはない。考えてみればリアンはエヴァさんに魔法について教えられたのはせいぜい数ヶ月だ。その程度の差はすぐに埋められる。

「弟子入り試験は一週間後ですね！」

そして元氣よく別れの挨拶をしてネギはエヴァの家を後にする。

その内心でリアンが自分の成長に驚き、そして、自分が父のような偉大な魔法使いになる未来を想像しながら……

第三十二話 利用する者

S I D E リアン

「…というわけで坊やの弟子入り試験を行う」

「…似たようなやりとり春先にもありましたよね」

確かあのときは私に兄と戦えということでしたね。

それよりも兄が弟子入りですか。兄なりに思うところがあったのでしょうか。ですが、それを私に話すと言うことはまた、私は巻き込まれるのでしょうかね。

「それでだ。その試験については千鶴に坊やの相手をしてもらう。試験方法は坊やと千鶴の手合わせ。勝敗は戦闘不能。魔法については相手を直接攻撃する魔法以外の使用は良しとする」

…ということはほぼ体術のみの試験。言っしまえば喧嘩。というより喧嘩になればいいですが。

「なぜ、千鶴さんに？」

「そろそろ奴にも私たち以外の魔法使いとの戦闘を経験しておいたほうがいい。それに今の坊やはちょうどいい相手だ」

ちようどいいというか、勝敗は明らかだと思うのですがね…。今の千鶴さんなら学園の主戦力になっている魔法先生達と勝負してもそこそこやれると思います。

「…つまり、エヴァさんは最初から弟子など取る気はないのですね」

兄が千鶴さんに勝てる可能性はゼロに限りなく近い。今聞いた話だと抜け道もあるようですが、兄はそれに気づかないでしょう。『自分の才能に自信を持っている兄』にはね。まあ私の知ったところではありません。なるほどね…。ただ一つ気になるのは…

「兄の試験の相手をするということは学園長、強いては学園側に千

鶴さんの実力がばれますね」

「十中八九、じじいは遠見の魔法で試験を見るだろうな。しかし、だからこそ意味がある。千鶴は魔法の存在を知り、それを学んでいる。このことを知っているのは私と茶々丸、チャチャゼロとリアンだ。じじいでさえ、事件に巻き込まれたことは知っただけでも、魔法を学んでいるとは知らない。つまり、千鶴は今の段階ならまだ引き返せる状態にある。しかし、今回の坊やの弟子入り試験の相手をするれば、千鶴の存在はじじい、ひいては関東魔法協会の知るところとなり、これより先は引き返せなくなる」

千鶴さんならこの程度のこと造作もなく思いつくでしょう。

「つまり、今回の弟子入り試験は渡りに船というわけですね。それで、千鶴さんには伝えたのですか？」

「ああ、ここに来る前に伝えた」

「千鶴さんは何と？」

「『そんな些細なことで悩むつもりはないわ』だとさ」

些細なこと……か。やはり強いですね。こう、心が。だからこそあの爆発的な成長があるのでしょう。

「千鶴さんが承諾したなら、私が口を挟むつもりはありません。ですが一応私も見に行きます」

「ああ、そのほうがいいだろう」

研究も進展がありましたし、息抜きにはちょうどいいでしょう。

「それで？話は変わるが研究の方はどうだ？」

「ええ。関西呪術協会からの陰陽術の巻物おかげで進展がありました。それに私にも役立ちそうな術もいくつかありましたね」

正確には取り込んだスクナの力を有効利用するための術ですけど。

「強いて言えばあといくつかのピースが揃えば、試験薬はできそうです」

悪魔の心臓でもあれば一気に研究も進みそうなのですがね。まあ、
無い物をねだっても仕

方ありません。持ちうる手札で最高の結果を見せる。これが研究の
真髄ではないでしょうか。……研究者でもない私が言っても説得力
はありませんね。

なににせよ、兄には千鶴さんの踏み台になってもらいましょうか。

第三十三話 利用される者

SIDE 三人称

「踏み込みが甘いアル!!」

「っ…はい!!」

弟子入り試験が今夜に迫った昼。世界樹の近くにある小高い丘。一面鮮やかな緑の絨毯に覆われたそこでは少年と少女が組み手を行っている。言っまでもなく少年はネギ・スプリングフィールド。そして少女は古菲だ。古菲の中国拳法をネギが学んでいると言うわけである。本日は休日ということもあり、最終確認を行っているのである。

先だって、ネギの下にエヴァからの封書が届いた。そこには試験内容が記載されており、それを見てネギは、クラス（表）でも一、二を争うと思われる古菲に師事を仰いだのである。それに修学旅行においてわずかではあるが対峙したあの白髪の少年と同じ動きをする古菲の拳法であれば、彼にも対抗できるかもしれないとネギは考えたのである。

利用できるものはいくらでも利用する。その心意気は買うが、いかんせん時間が足りない。えてして武術というのはいかなる流派にせよ、一朝一夕で習得できるほど容易いものではない。基本修練を反復して行い、下地となる強靱な肉体を作り上げ、その上に技を乗せていく。ましてや中国拳法にいたっては四千年の歴史がある。四千年にわたり磨き上げられた技術をたった一週間程度でものにできるはずがない。

「足への意識がおろそかになっているアルよ!!」

「はい!! 古老師!」

だからこそ、古菲は教える技を絞って教えた。組み手は約一時間に渡って行われた。

「よし。じゃあ、後はゆっくり体を休めるアル。相手が誰か分からないアルが、この一週間で教えられることは教えたアルよ」

「あ…ありがとうございます…」

純粋な技術においては達人の域に迫っている古菲との組み手に疲労困憊のネギ。二人の組み手が終わるのを見計らって、明日菜と刹那、それに木乃香が近づく。木乃香も修学旅行の一件で魔法の存在を知った。そして木乃香は魔法について学ぶことを決めたのだ。しかし目下、師となる人物がいなかったため何もできていないのが現状となっている。

「ネギ君。お弁当持ってきたえ」

「わあゝ！ありがとうございます！」

木乃香が作ってきた弁当をレジャーシートの上に広げ、五人は重箱に入った豪華な弁当を食べ始める。

「ネギはどうなの？合格できそう？」

「微妙アル。相手が誰か分からないからネ。でもネギ坊主は卑怯アルよ。一、二ヶ月は習得にかかる技も三時間で覚えてしまうネ。でも、この一週間でやれることは全てやったアル。あとはネギ坊主次第ネ」

「そっか…」

「頑張ります！」

明日菜の疑問に答える古菲。そしてやる気を高めるネギ。

「そういえば明日菜もせっちゃんに剣を教えてもらってるんやろ？そ
ちはどないなん？」

「明日菜さんは元々の身体能力が高いのでこのままいけば、なかなか
かの強さになりますよ」

「明日菜もすごいなあ。それじゃうちだけやな。まだ何もできてな
いの」

「焦る必要はないわよ木乃香。ゆっくり自分のペースが一番よ」

かくいう明日菜も修学旅行の一件で自分の無力を痛感し、刹那に剣
術を教えてもらっている。剣術を選んだのは自身のアーティファク
トが剣であったが故である。

「ネギ先生、作戦はあるのですか？」

「作戦というほどではありませんが、秘策はあります」

「フッフッフ。今夜を楽しみにするアルよ」

「…なんで古菲が得意げになってるのよ…」

その後も五人は和気藹々と弁当を食べ、弟子入り試験を迎える。

利用されているとも知らないまま……。

第三十三話 利用される者（後書き）

…というわけで、弟子入り試験を利用した千鶴の本格参戦イベントです。

これを書きたいが為に、エヴァへの直談判を書きました。

それと、たくさんの感想ありがとうございます。

余裕がなく、なかなか返信ができませんが、頂いた感想は励みになります。

今後もし意見、ご感想をお寄せいただければと思います。

第三十四話 弟子入り試験開始

S I D E リアン

深夜零時。世界樹広場前にはエヴァさんと茶々姉妹。それに私と千鶴さんがいます。チャチャゼロさんは私の頭の上にあります。そして千鶴さんには仮面を着けてもらっています。そんな私たちの目の前には兄と明日菜さん、刹那さんに木乃香さんと古菲さんがいます。皆さん私の横の女性、つまりは千鶴さんが誰か分からないみたいですね。仮面で顔が見えないので当然と言えば当然ですね。

どうやら彼女たちは単純に応援のようです。のんきなものですね。

「ネギ・スプリングフィールド。弟子入り試験に来ました!!」

やる気十分といったところでしょうか。やる気だけでどうかなるなら世の中苦労しませんかね。

「よく来たな。早速だが試験を始めるぞ。ルールは以前通達したとおりだ」

無駄話はほとんど無く、エヴァさんが兄に準備をするように促します。それに応じて、私たちと明日菜さんたちのちょうど中間あたりに兄が進み出ました。

「……………」

対する千鶴さんもゆっくりと前に進み出て、二人は間に2メートルほどの距離を置いて対峙します。

「戦闘不能になったその時点で終了とする。なお降参もありだ」

そして千鶴さんがその仮面を外します。

「『『『『えっ…！？』『』『』」

驚く5人をよそに千鶴さんは構えます。

「それでは始め！！」

「ちょ、ちょっと待ってください！？」

自分の相手が3 - Aの生徒ということに狼狽する兄。

「…予想通りですね」

今回の千鶴さんに仮面を着けてもらったのは私の案です。兄の覚悟を試す意味もあります。この程度でうろたえるようでは、この世界で生き抜くことは難しいでしょう。

そんな兄とは対照的に千鶴さんは躊躇なく右の正拳突きを放ちました。

「…へえ」

うろたえながらも兄は千鶴さんの正拳突きを左手でいなくしました。

「あれは八極拳？」

一瞬の手の動きだけでしたが、独特な動きだったのでおそらく中国拳法でしょうね。いつの間に覚えたのでしょうか。

「どうして那波さんがここにいらっしゃるんですか！？」

あなたの相手をするために決まってるじゃないですか。それ以外に何かあるのでしょうか。それと、言っておきますが千鶴さんはおしゃべりしながら相手できる人ではないですよ？

「うっ！！」

ほらね。千鶴さんの蹴りが兄の腹部に見事に決まります。

「ネギ先生。やる気がないなら降参してください。相手が誰だろうが別にどうでもいいでしょう?」

そのとおり。ひとたび対峙したならこの世界においては情けは無用。殺るか殺られるか。強い方が生き残り、弱い方は死ぬ。そこに正義も悪も関係ない。

腹部を押さえて唸っていた兄ですが、千鶴さんの冷淡な物言いに少しは頭が落ち着いたようです。目が変わりました。

「契約執行180秒。ネギ・スプリングフィールド!」

我流の魔力供給術式ですね。兄は戦いの歌の存在を知らないのです。ようか? 戦闘における初歩中の初歩ですけど。攻撃呪文だけを追い求めて、補助呪文を覚えようとしなかったのでしょうか? いくらなんでもそこまで考えなしではないと思うのですが…。

魔力供給により動きが格段にあがった、というよりようやく動き出した兄ですが、その動きはやはり未熟。どうやら八極拳ともうひとつ動きがあるようですが、型が荒い。見たところ取り組み始めて間もないでしょう。ですが、ある程度形になっているところは才能というやつですね。

「ふむ。カンフーか…。理屈っぽいところは坊やにはぴったりだな」

確かに、兄にしては良い選択をしたと思いますね。下手に剣に走ったりしなかった所は褒めるべきでしょう。

中国拳法の兄に対して、千鶴さんは足技中心の柔体術です。サバットやムエタイ、キックボクシングなどの型を融合し、敵の攻撃を柔術でいなし、隙ができたところを多彩な蹴りで仕留めるといった感じです。実はこれが意外と凶悪な組み合わせです。ほら、現に今だって…

「ちょっと、何よアレ!？」

「すごい…」

兄が放った肘打ちを、円を描くようにその力、兄の体を自身の右側にいなしたところを膝蹴り。飛び込んできた兄の勢いはそのまま生かし、カウンター。兄のその軽い体重故に軽く浮いたところを左回し蹴り。

驚いたことに兄はこれを防ぎましたが、これで終わりではありません。さらに半回転して右の蹴り。刹那の三段蹴り。思わず明日菜さん達も声を上げてしまいましたね。というか刹那さんまで見とれてどうするんでしょう。

「千鶴さんが一方的に押していますが、少し違和感がありますね」

兄のあの目。何かを狙っているのでしょうか、無駄に終わるでしょうね…。そろそろ、魔力供給が切れるはずですから、おそらく次に来るでしょう。

S I D E エヴァ

坊やの試験が始まったはいいが、やはり内容は一方的。千鶴が押しているのは言うまでもなく。有効打はおろか、その拳が千鶴に届くことはない。にわか仕込みのカンフーでは到底相手にならないだろう。

だが、にわか仕込みとはいえ、それなりに形になっている部分は評価すべきだろう。その辺りは親譲りの才能というやつだろうな。実際、坊やは天才だろう。周囲が期待するのも確かに分かる。

だが、坊やは甘い。その甘さが、その才を妨げている。

千鶴が魔法を知ってから現在に至るまでおよそ二ヶ月。かたや、生

まれたときから魔法の存在を知り、それに親しんできた坊や。つまり、坊やには9年近い魔法に対するアドバンテージがある。通常、知識や技術といったものはそれを学んだ時間に比例して、より高度になる。

しかし現在、その経験が二ヶ月にしか満たない千鶴が坊やを圧倒している。

修行の密度は、別荘を使ったことにより、通常のそれとは次元が異なる。だが、それだけが千鶴の急成長につながっているわけではない。

千鶴と坊やとの違い。さらにいうならリアンと坊やの違い。それは何か？

それは『覚悟』。

この一言に尽きる。千鶴の覚悟はいまいちはつきりとはしないが、それでも奴には自分の目的のためなら、友ですら敵に回すだろう。現状がそれを如実に示している。元々、千鶴の坊やに対する印象は『世話のやける子供』だそうだ。自身、保母のボランティアをしているからこそその答えだろう。

しかし、現在、千鶴はその子供である坊やを躊躇無く攻撃している。弱い者いじめともとれるような光景が私の眼前には広がっている。おそらく本人もそのことを自覚しているだろう。だからといって攻撃の手をゆるめることはない。千鶴の『覚悟』に関しては私の杞憂に過ぎなかった。これなら十分にやっていける。

リアンについては私が口を出す必要はない。リアンはその目的がはっきりしていて、なおかつそれを害するなら、例え肉親でも排除するだろう。

それに、リアンは人を殺した経験があるはずだ。伊達に600年も生きてはいない。『踏み越えた者』と『そうでない者』の差ぐらいわかる。

はつきり言おう。『踏み越えたもの』つまり『人を殺した者』は強い。一線を踏み越え、殺しの快樂におぼれる者もいる。その重責に潰される者もいる。だが、人を殺して、なおかつ自身を見失わないのは『強者』だけだ。あの年齢で、あそこまでの魔法に関する独自理論やそれを実行する技術は身に付くものではない。世間一般に優秀と評される魔法使いでも生涯かけても無理だろう。

それを成したリアンは、それこそ血反吐を吐くような努力をしたのは優に想像できる。

坊やも努力しているのは間違いないが、それに掛ける執念の差が二人の差となって現れている。

坊やは偉大なる父の背中、つまり幻想を追い求め、リアンは、右化の解呪という現実を求めた。

抽象的でしかない目標と、具体的な目標。言うまでもなく後者の方がやるべき事、求めるべきものがはっきりしているのは言うまでもない。

……いろいろ言っては見たが、結局、坊やは現状のままではいくら努力しようがリアンには敵わない。追いつくことはおろか、その足下すら見えないだろう。

『何の』為に強くなるか？

『みんなを守る為に強くなる』とか考えている現状ではなおさらな。

しかし、わざわざこんな場を設けてやるあたり、私も丸くなったものだ。

まあ暇つぶしにはなったか……。

第三十五話

S I D E リアン

「ほう…」

「やった！」

「上手いアル!!」

兄の我流魔力供給のリミットが迫る中、兄の渾身の一撃が千鶴さんに決まります。兄の狙いはカウンター。順を追って説明すると、これまでのパターン通り、兄の攻撃をいなした千鶴さん。当然攻撃後の隙を狙って蹴りを放ちますが、それは兄の誘いでした。これまでの攻撃から千鶴さんのパターンともいうべきそれを見極めていたらしく、わざと隙を見せ、そこに攻撃を誘導したのです。どんなに速い、強力な攻撃でも来る場所が分かっていたれば怖くはありません。兄は千鶴さんの蹴りを捌き、さらに踏み込み腹部に渾身の肘打ち。技の名前は知りませんが、結構威力の高い技なのでしょう。

わざと隙を作って攻撃を誘導するというテクニク。これはなかなか高等な技術です。たった一瞬とはいえそれを成したところを見ると、やはり兄は才能の固まりなのでしょうね。そんな兄の攻撃を見て、思わず歓声をあげる明日菜さんに、おそらくこれを教えた古菲さんもガッツポーズをしています。それに一瞬とはいえ兄の表情もゆるみました。

……ですが甘い。戦闘時は常に冷静でなければならない。この程度で一喜一憂するところを見ると、やはり自覚が足りない。京都の湖畔でもそうでした。目の前の敵から目を離すなど言いたい。その一瞬の注意の散漫が死に直結する。本人達は決まったと思っているようですが、この程度の攻撃、受けこそしましたが今の千鶴さんにはたいしたダメージはないでしょう。

「！！」

「「「ネギ（先生、坊主）！？」「」「」

思った通り動きこそ止めたが特に痛がる様子もなく千鶴さんは反撃をしました。

「……油断していました。これからは私も全力でお相手します」

確かに千鶴さんは兄のペースに意図的に合わせていました。それほどまでに現状における兄と千鶴さんの差は明らかです。しかも我流の魔力供給もさきほどの一撃を境に切れてしまいました。もはやそこには絶望的な差しかありません。

これまで受け一辺倒だった千鶴さんが初めて攻めに転じます。まずは左大腿部へのローキック。ここにまともに衝撃が来ると力が抜けるのだ。

「あうッ！」

力が抜け崩れ落ちる兄の体に接近して左肩胛骨あたりをその顔面にぶつける当て身を放つ。ただの体当たりと思う事なかれ。すべての動的エネルギーをそこに収束させて放った千鶴さんの当て身は細身の兄を大きく吹き飛ばし、向かいの広場の壁に衝突させました。収束させたエネルギーを『面』で放ったが故に大きな外傷こそ生じないが、その衝撃は脳を激しく振動させ、典型的な脳震盪を引き起こします。

「坊やの負けだ！この勝負千鶴の勝利とする」

壁からずりと落ちる、意識がない兄。誰が見ても続行不能ですね。これで千鶴さんの勝利となり兄の弟子入りは叶いませんでした。慌てて駆け寄る兄の応援に来ていた四人。それを尻目に千鶴さんはこちらへと来ます。しかし、千鶴さんも強くなったものです。こうしてみるとその成長がよく分かりました。

「さて、出てきたらどうですか？」

…気づかれてないとも思っているのでしょうか？案の定試験開始の前から『二人』の私たち以外の視線がありました。

「……………」

無言で広場に現れたのは高畑教諭。予想通りといったところでしょうか。二つの視線の一つは高畑教諭。もう一つは学園長の遠見の魔法でしょう。何か言いたそうな顔をしています。知ったことではありません。まあ高畑教諭が話したい内容は千鶴さんのことでしょうし、それに関して情報を与えるつもりは全くありません。この場で見た

千鶴さんの力の一部を見て、彼女の力を想像するといいでしょう。今回は兄が相手だったので使っていない技もありますし、千鶴さんの本当の武器は先ほどの蹴り技ではありませんね。

「千鶴さんお疲れ様でした」

「ふふふ、そんな疲れてないわよ？」

「それは重畳。では用事も済みましたし帰りますか」

エヴァさんも最後に兄を一瞥して帰路についたようです。あの感じだと興味も失せたといった感じででしょうか。確かに才能の片鱗こそ見れましたが、エヴァさんの興味を引くレベルでは無かったようですね。とはいえ、今回の試験を通じておそらく学園長が兄の師となる人物を用意するでしょう。私ならともかく、ほんの二三ヶ月前までは一般生徒だった千鶴さんに負けたのですから。ここらで上手く舵取りをしないと兄は必ず暴走するでしょうしね。となると、師となるのは誰でしょうか？まあ私には関係ないですね。

「では高畑先生。また明日」

強くなるのもいいですが、兄にはもっと教師の仕事をこなしてもら

いたいですね。私たちは『教師』をしに麻帆良に来たのですから。
決して『強く』なるために麻帆良に来たわけではありませんしね。

第三十六話 思惑

S I D E ? ? ?

さて、今私の手元にはある二人の少年の資料があります。そう。かの有名なサウザントマスター、ナギ・スプリングフィールドの息子達の資料です。メルディアナ魔法学校での成績を含めて全てがあります。かの麻帆良学園に潜り込ませている私の部下からまた新しい報告書が届いたので、現在それを見ているところです。

本来であれば今頃あの二人はメガロメセンブリアで修行に励んでいるはずだったのですが、あのメルディアナの爺と麻帆良の妖怪が上手く事を運んだらしく寸前で修業先が現在の麻帆良に変更になりました。∴当初は腹立たしいと思っていましたが、今となってみれば感謝すべきですね。私としたことが侮っていました。私のプランとしては才能にあふれた優秀な兄を全面に押しだし、魔法の使えない落ちこぼれの弟の方は英雄の息子というネームバリューにつられてくる有象無象の餌とするつもりでした。

しかし、仮に当初の予定通り二人がメガロメセンブリアに来たとし

て、私の考え通りに事を運ぼうとしたなら身を滅ぼしていたでしょう。兄については資料通りの人物像でしたが、弟の方は規格外でした。魔法が使えないというハンデをもともしない實力。そして知識。調査員の報告によると彼はかの闇の福音すら味方につけているとのこと。…間違いなく世間も知らない子供と思っただけいい相手でした。

となると、私も少し考えを改めなければなりません。予定通りオスティアの総督の席は手に入れました。オスティアの『人間』を救う算段も立っています。しかし一番重要な部分が未だ決めかねています。いずれ訪れる崩壊の時。その時に旗頭となるのは兄か、それとも弟か…。

麻帆良の調査員の報告によると、兄は才能にあふれているが理想主義であり子供らしい部分も多々あるとのこと。対して弟は魔法こそ使えないものの、現実主義でありその實力はかなり高い可能性がある。また現実主義な部分も多く見られ、9を救うために1を切り捨てる覚悟もあると思われるとのこと。兄が『偉大な魔法使い』を目指すのに対し、弟はその目的が分からないが少なくとも『偉大な魔法使い』を目指すつもりはない。

…扱いやすいのは間違いなく兄の方。しかしその甘いとも言える価値観から全ての人間を救うとか言い出しそうですね。弟はその心配はないものの、その腹に何を隠しているのかわかりません。なかなか

か頭も回るようですね。

兄は別にしても弟に関しては資料だけでは判断が付きませんね。これは一度会って、私自身が確かめる必要がありますね。…とすればいつがいいか。そういえば近く麻帆良学園で大きな祭がありましたね。確かあの時期は議会も閉幕していますし、休暇という名目で簡単に旧世界に行けますからちょうどいい。そのときに見定められますか。

「議員。よろしいでしょうか？」

「ああ、構いませんよ」

思考に熱中しすぎて気づきませんでしたね。

「至急のご報告ですが、爵位級の悪魔が召喚されたとの連絡が旧世界の調査員の一人から報告がありました」

「ほう…続けてください」

「はい。場所は旧世界の日本。おそらく目的地は麻帆良学園かと…」

「わかりました。下がって結構ですよ」

「失礼します」

麻帆良学園に向かう爵位級の悪魔。その目的は分かりかねますが、ちようどいいかもしれません。彼ら兄弟の故郷を襲ったのも悪魔です。今回の悪魔がどんな行動をするにせよそれを知った彼らが何か行動を起こすかもしれませんね。これは一部始終を監視させましょう。何か分かるかもしれません。

第三十七話 悪魔襲来

S I D E リアン

兄の弟子入り試験から三週間が経過しました。あの後兄は、学園長が紹介した図書館島の司書に弟子入りして修行に明け暮れているそうです。その司書の名前はクウネル・サンダースとか言っているそうです。が、実際はアルビレオ・イマ。かの紅き翼の一員。つまり私の父の友人らしいです。兄はこのことを知らないみたいですが、気になって調べてみたら一発でした。今ではその師匠の元で兄は毎日修行に励んでいるとのこと。放課後になると最低限の仕事のみこなすすぐにいなくなります。まあ全く仕事をしないよりはマシなのでいいですけど。

それにしてもここ麻帆良に英雄の一人がいるとは思いませんでした。高畑教諭は単純に大戦期紅き翼に同行していただけですが、アルビレオ・イマは違います。最前線で戦った英雄です。そんな人物がなぜこんな旧世界の辺境の地にいるのか。ましてや西にはこれまた英雄の一人、近衛詠春もいます。極東の島国日本にいるメンツとしては大層な顔ぶれです。…日本に何かあるのでしょうか？いやこの場合は麻帆良にですね。近衛詠春の場合は実家が京都にあるので違和感はないですけど、アルビレオ・イマは違います。わざわざ戦後の

療養？にこんな霊地のど真ん中、図書館島の地下なんかにいる必要はありません。

…まあ考えてみても所詮私には関係ないのでどうでもいいでしょう。関係ないと言え、なんでも兄と明日菜さんが喧嘩していましたね。原因は知りませんが、その仲直りに乗じて雪広さんが南の島に招待しますわとか言ってきましたけど、そんな時間があるなら勉強に仕事をしろと言いたいです。当然私は行きませんでした。興味も無いですしね。私が行かないと言うこともあって千鶴さんも麻帆良にいました。

あと、最近で特筆すべき事と言えばまた兄が魔法バレをしたことでしょうか。綾瀬さんにばれたようですね。しかも今では兄が綾瀬さんを始め、何人かの生徒に魔法を教えているようです。京都であんな一件があつたあとだというのに死なせたのでしょうか？

「…対象の外面からのアプローチだけではやはり不十分だな」

結局のところ私は私の目的を第一に考えるべきですね。首を突っ込むつもりはありませんが、下手に近づいて巻き込まれるのはごめんですしね。

「つまり、内面からのアプローチも必要というわけですね」

外は梅雨の時期に入ったということもあり、激しい雨が降っています。そのせいかどうかは分かりませんが、今日は珍しくエヴァさんが研究を手伝ってくれています。

「では、治癒魔法のように対象の自己治癒力を増進させる術式を組み込み、外部からの解呪に合わせて、術式により強化した対象の自己治癒力で外と内の両方から解呪を促しましょう」

最近の研究の進み具合も絶好調といったところでしょいか。

「むっ……」

「どうかしましたか？」

「何者かが学園に侵入した」

ふむ…。この時期に、しかもまだ明るいこの時間での侵入者ということは西の者ではありませんね。となると誰でしょう？

「この感じ…、人間ではないな」

さすがはエヴァさん。おそらく魔力の波長から判断したのでしょう。私ではそこまでの探査はできません。単純に知っている魔力なら誰か判断できますが、今のエヴァさんみたいに初めて感じる魔力から種族を割り出すのはできません。こういったところは実に参考になります。

人間ではないなら式紙が召喚された鬼の類ですかね…。

「この感じは…悪魔か。しかもこいつは爵位級だな」

「！-！」

……やはり今日はツイてますね。日頃神という者に感謝なんてしたことないですけど今日は感謝したくなりますね。

S I D E 三人称

「学園長っ!!」

現在学園長室は騒然としていた。つい先ほど侵入者が現れたのである。別にこれだけなら普段の警備通行に行動すれば問題ないが今回は違った。侵入者が爵位級の悪魔だからである。通常の下級悪魔であるなら魔法先生はもちろん魔法生徒でも十分に相手にできるが、爵位持ちの悪魔、つまり上位悪魔となれば文字通り次元が違う。個体数はそれほど多くはないが一体一体の持つ力は強大なものである。いかに麻帆良学園の精鋭といえども真正面から戦えるのは数人しか

いない。対処に苦慮する学園側の都合など関係なく侵入者はその目的を遂行すべく行動する。

「つい先ほど女子中等部3・Aの生徒が数名攫われたとのことですよ！あと、ネギ先生と黒髪の少年の二人がそれを追っています！」

「「「「！！！！」」」」

ここで恐れていた報告がきた。学園側が最も憂慮していたのは一般人が巻き込まれることとネギが事件に巻き込まれることである。リアンならまだしもネギはまだ爵位級の悪魔と戦える実力はない。

「侵入した悪魔は現在世界樹前広場の音楽ステージにいる模様です」

「学園長……」

学園長室に集まった魔法先生達が強張った表情で縋るような視線を向ける。

「高畑君とガンドルフィーニ君、それと神多羅木君と葛葉君はすぐ

にでもネギ君を追いかけるんじゃない。彼と一緒にいる黒髪の少年は保護せよ」

呼ばれた面々はすぐに学園長室を出て行く。

「明石君たち情報班はこのことが外部に漏れぬよう情報統制を頼んだぞ。瀬流彦君は学園の警備を頼んだ。決して外に悟られるでないぞ」

学園長室が慌ただしくなり、各々が自分の役目を果たすべく動き出す。が彼らは遅かった。

所変わって世界樹前広場の音楽ステージ。件の悪魔はネギと黒髪の少年犬上小太郎（どうやら彼は西から脱走してきたようだ）と対峙していた。ステージ上には水牢に捕らえられた明日菜、木乃香、刹那、のどか、夕映、古菲、和美と力モがいた。奇しくもネギに関わって魔法という世界に踏み込んだ者達である。そして其れを見張る

三匹のスライム。

「ネギ君、君は本気で戦っているのかね？」

侵入した悪魔はヘルマン。伯爵の爵位を持つ悪魔である。先ほどからネギ達は攻め続けるもののヘルマンは全く動じない。むしろ攻め続けているにも関わらずダメージを蓄積しているのはネギ達の方である。だからこそヘルマンは問う。少なからず今回の仕事を楽しみにしていたが故の落胆から。

「そここの黒髪の少年は実にいい。彼は強者との闘争を望んでいる。だからこそ実に楽しそうに戦う。君は何のために戦うのかね。捕らえられた彼女達を救うためかい？偉大なる魔法使いになるため？それとも……自分の村を襲った仇を討つためかい？」

ヘルマンの最後の言葉を聞いてネギが目を見開く。囚われの少女達も同様だ。

「どうやら君は自分の行動原理を自覚していないようだ。ならば私がそれを教えてあげよう」

途端、其れまで人間の姿をしていたヘルマンの肉体が悪魔の其れへと変化する。突然の変化に明日菜達は驚愕する。ネギも同様の反応かと思つたが彼は違つていた。むしろ顔色が悪くなつていた。

「思い出したようだね。私が君の村を襲った悪魔だ。あのとき召喚された悪魔の中でも数少ない爵位級のね」

ネギの脳裏には六年前の光景がフラッシュバックされる。鮮明に思い出されるそれはネギの中の『何か』を外した。

「アアアアアアアアアアアッッッッ！！！」

突然膨れあがるネギの魔力。あふれ出した膨大なそれは周囲の暴風を巻き起こす。そしてこれまでとは比べものにならない速度でヘルマンの懷に潜り込む。

!!

油断していたヘルマンの腹部に初めて攻撃が当たった。型も技術もない只のパンチ。しかし、ネギのあふれ出した魔力がそれをれっきとした攻撃にする。

「フハハハハッ！それだネギ君。私はそんな君が見たかったのだ！！！」

喜びの感情を爆発させるヘルマン。しかし明日菜達や小太郎は今日一番の驚きを感じていた。

「ちょ、何よアレ！？」

「あれは暴走だ！！兄貴の保有魔力は膨大だ。その膨大な魔力が暴走して兄貴の身体能力が異常に高まっているんだ！！いつけえー兄貴！！！」

「ですが、あの戦い方では……！！」

現在ネギが押しているように見える。しかし、この面々でこと戦闘

に関しては一日の長がある刹那は危うさを感じていた。同時にネギの変貌に驚いていた小太郎も刹那と同じ危機感を抱く。

「素晴らしい！！ネギ君、やはり君はあのサウザンドマスターの息子だ。次代の英雄の原石だ！！だが…」

ネギに吹き飛ばされたヘルマンだが、空中で即座に体制を整える。そんなヘルマンにネギは真正面から突撃する。それを見たヘルマンはニヤリと笑みを浮かべる。

「そんな原石が輝きを失う瞬間を見るのが私の楽しみなのだよ！！」

ヘルマンの口が大きく開きその口から光線が吐き出される。石化の光線である。刹那や小太郎が危惧していたのはこれである。今のネギの攻撃は単調すぎるのである。大きすぎる力を手にしたが故に、その力で押し切れると思っているのか、真正面からしか攻撃していないのだ。だからこそ簡単にカウンターを喰らってしまう。

「『ネギ（先生、坊主）！？』」

悲鳴に近い叫び声を上げる明日菜達。あのタイミングでは素人でも直撃すると理解できる。しかし、唯一自由に動けて、危惧していた小太郎が直前でネギに追いつき、そしてネギを地面に向かって引きずり落としたことにより、ヘルマンの放った光線はネギを二人を捉えることはなかった。

「…こんの馬鹿野郎！！」

地面に仲良く墜落したネギに小太郎は拳骨と罵声を浴びせる。ネギも自分があと一步で下手をすれば死地に踏み込むところだったのを理解したようだ。しかし、小太郎に殴られたことが納得できないのか、二人で醜い言い争いを始めた。しかし、それもすぐに終わる。不機嫌さをにじみ出したヘルマンの存在で。

「まさか君ごときに邪魔をされるとは思わなかったね…。私の楽しみを邪魔してくれた責任はとってもらうよ」

ヘルマンから身も凍るような殺気が放たれる。この場においては圧倒的強者のそれは、はるか格下のネギ達の動きを止めるには十分だった。

「あの黒髪のカキ終わったな」

「ヘルマンのおっさんの石化は強力だからな。腕の一本ぐらいは永久石化かもしれねえな」

水牢を見張るスライムうち、おそらく男性体であろう二匹が語る。それを聞いた明日菜達の顔色はいっそう悪くなった。

「覚悟はいいかい？」

一步、また一步。ゆつたりとした足取りでネギと小太郎に近づくヘルマン。殺気にあてられ筋肉が硬直して動けない二人は死刑執行を待つ囚人のようであった。小太郎は何とか逃げようと試みるも、本能的に敗北を悟ってしまったが故に足がまったく動かないのである。

「では黒髪の君には退場してもらおう」

ヘルマンが小太郎に向かって光線を放とうとしたそのときだった。

「ではあなたも退場してもらいましょうか。永遠にね……」

突然、背後から聞こえた声に振り向こうとした瞬間、ヘルマンの胸から腕が飛び出した。しかもその手には脈打つ『心臓』が握られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0328q/>

魔法先生ネギま！ ～落ちこぼれと呼ばれた英雄の子～

2011年10月7日20時32分発行